

金の星

Z32-B88

十一月号



第九卷
第十二号

Kuchi

inches
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak 2007 TM Kodak

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak 2007 TM Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



目次

初霜の頃 (表紙・石版)……………岡本歸一
 風に追はれて (口繪・三色版)……………寺内萬治郎
 田にゐる鳥 (童話)……………野口雨情
 同作曲……………(一) 本居長世
 はだか長者 (童話)……………(二) 立石美和
 試斬りの使 (童話)……………(三) 小城庄一
 嘘のはなし (二頁小話)……………(四)
 一王國を争ふ (長篇)……………(五) 小島政二郎
 百日紅 (推薦童話)……………(六) 野口雨情選
 吉衛門頼智ばなし (童話)……………(七) 佐藤猛夫
 空の御殿 (童話)……………(八) 霜田史光
 鍛冶屋の子 (童話)……………(九) 三井信衛
 ひらすゞめ (童話)……………(一〇) 野口雨情選



頼光の四天王 (長篇)……………(一) 川崎春二
 三ちやん鳩 (童話)……………(二) 鳴海要吉
 からすうり (大人篇)……………(三) 野口雨情選
 鯨が来た (推薦童話)……………(四) 茶木七郎
 魔法くらべ (長篇)……………(五) 高橋里江
 足の下の聲 (童話)……………(六) 西川喜平
 めつからち泥棒 (童話)……………(七) 樺山千代
 穂 (子供篇)……………(八) 野口雨情選
 大石主税 (長篇)……………(九) 三島霜川
 十一月の歌 (童話)……………(一〇) 三木露風
 通 信……………(一一)

世界童話欄……………(一三)
 山姥 (日本)……………謎を解く王子 (長篇)
 ビツこになつたイギリス



（書 版 出 社 星 の 金）

入 繪

世界童話集

（印度の巻）



大戸喜一郎先生譯
寺田良作先生裝幀

菊判箱入美本
内容三〇〇頁

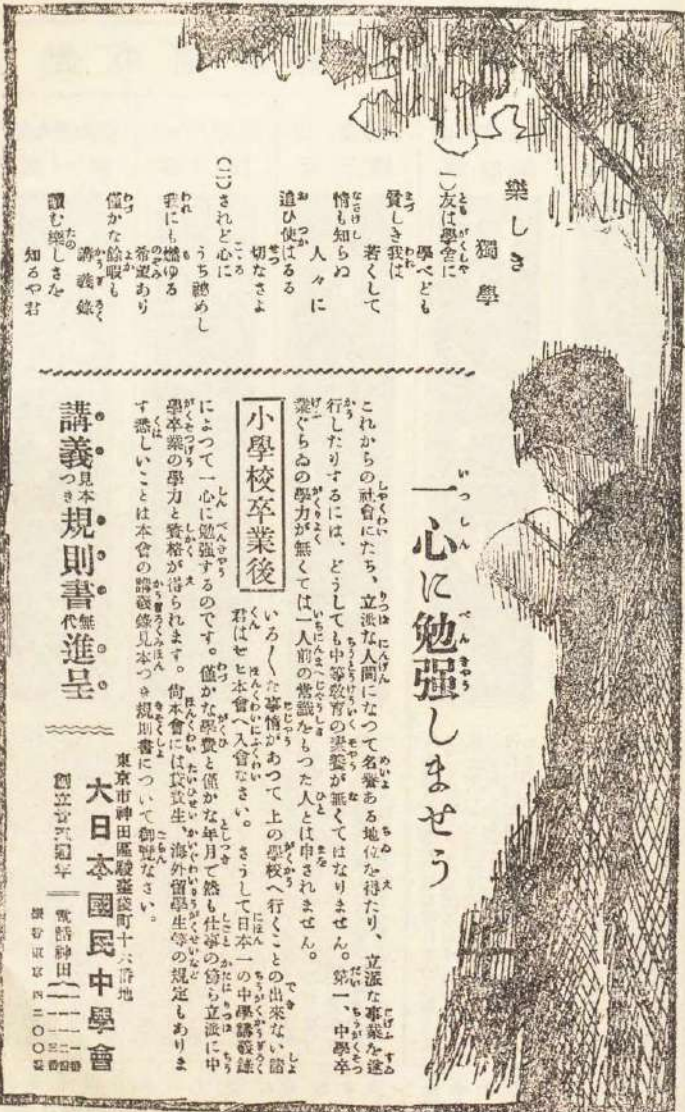
定價金貳圓五十錢
送料十五錢

日本で發行された童話の本で、こんなにも美しくて、立派で、面白い本が他にあらでせうか。少年少女の本専門に出版してゐる金の星社でも、こんな美しい本を發行したのははじめてです。お話は、これもこれも幾度でも繰返して讀ますにはあらぬい印度の面白いお話ばかりです。さうして破天荒の定價で出版されたのですから、買はない方が損だといひたい位よく出來ました。嘘か本當か、書店で御覽下さい。

てれは追かに風



畫 郎 治 萬 内 寺



樂しき

獨學

(一)友は學舎に
學べども
賢しき我は
若くして
情も知らぬ
追ひ使はるる
切なさよ

(二)されど心に
うち聴めし
手にも燃ゆる
希望あり
僅かな餘暇し
讀む樂しさを
知るや君

一心に勉強しませう

これからの社會にたち、立派な人間になつて名譽ある地位を得たり、立派な事業を遂行したりするには、どうしても中等教育の要務が無くてはなりません。第一、中學卒業するの學力が無くては一人前の常識をもつた人とは申されません。

小學校卒業後

いろいろ事情があつて上の學校へ行くことの出来ない諸君はぜひ本會へ入會なさい。さうして日本一の中學講義録によつて一心に勉強するのです。僅かな學費と僅かな年月で然も仕事の傍り立派に中學卒業の學力と資格が得られます。尙本會には貸費生、海外留學生等の規定もあります。嬉しいことは本會の講義録見本つき規則書について御覽なさい。

講義見本規則書代進呈

大日本國民中學會
創立廿五週年
電話神田二二二〇

録目著名行發社星の金

| | | | | |
|---|---|--|---|---|
| 系大傳人偉 編一第 | 系大傳人偉 編二第 | 系大傳人偉 編三第 | 系大傳人偉 編四第 | 系大傳人偉 編五第 |
| ジヤンヌ・ダルク | ローマ 英雄 シーザー | ネルソン | リンコルン | 太閤秀吉 |
| 大木雄三先生著。有名なオルレアン少女ジヤンヌ・ダルクが奮い立つて母國を滅亡から救ふ勇壯な物語である。各頁とも血ひたり、涙ながるゝ悲劇的物語である。 | 籍田史光先生著。シーザーは古代の大英雄である。世界歴史を通じてシーザー程の英雄は幾人と數へる程しかない。そのシーザーの變化極りない運命を書いたのが本書である。 | 三井信衛先生著。トラファルガアの海戦に名譽の死を遂げたネルソンの傳記です。その國を愛する赤心と、己の責任を重んずる觀念は偉大なる教訓を讀者に與へます。何人も一讀すべき名著です。 | 久米敏一先生著。最も優れた立志傳として、この「リンコルン」をおすすめする。紙一枚、ペン先一ツ買へば、このリンコルンが、如何にして大統領の榮位をかち得たか。本書を読まざる者は一生の不孝である。 | 三島精川先生著。日本の英雄として世界に誇り得るものは、太閤秀吉である。本書は、秀吉の一生をあらゆる歴史書を參考にして研究し、それを三島先生の名筆によつて面白く表現したものである。 |
| 錢十九金 錢六金料送 | 錢十九金 錢六金料送 | 錢十九金 錢六金料送 | 錢十九金 錢六金料送 | 錢十九金 錢六金料送 |

録目著名行發社星の金

| | | | | |
|---|---|---|---|--|
| 系大傳人偉 編六第 | 系大傳人偉 編七第 | 系大傳人偉 編八第 | 系大傳人偉 編九第 | 系大傳人偉 編十第 |
| ナイチンゲール | ワシントン | 大楠公 | ローマ 英雄 ヒーター大帝 | コロンブス |
| 入交純一郎先生著。女神探のやうに氣高い心を持ったナイチンゲールの一生を書いた本です。この人の傳記を読んだものは誰でも、本當に清い心の人になれます。少年少女の爲に書かれたはじめての本です。 | 三井信衛先生著。アメリカを獨立させて最初の大統領になつた大偉人ワシントンの傳記です。艱難辛苦して遂に偉い人となつたワシントンのお話は、誰が讀んでも勇氣をつけられます。 | 三島精川先生著。楠正成の傳記を正しく書いた本として、これ以上の本はありません。この本を讀んだ人は成程と正成の偉かつた事に感ずるでせう。面白くてそして本當の正成のお話の解る本です。 | 大戸喜一郎先生著。文明に後れてゐたローマを盛んにする爲めに、帝王の身であり乍ら造船職工にまでなり、また自分の子や妻までも殺さなければならなくなつた變化極りないヒーター大帝の物語です。 | 三井信衛先生著。廣い大西洋に小さな船を浮べて、遂にアメリカ大陸を發見したコロンブスの勇壯な物語です。四面海にかこまれた日本國の少年少女に、是非讀んでいただきたいと思ひます。 |
| 錢十九金 錢十金料送 | 錢十九金 錢十金料送 | 錢十九金 錢十金料送 | 錢十九金 錢十金料送 | 錢十九金 錢十金料送 |

書叢語物傳實史歷本日

三島霜川先生著・羽鳥古山先生編
◇錢十料送◇圓壹金冊一各價定◇

| | | | | | |
|---|--|---|--|--|--|
| 6 維新 哀史 彰義隊 と 白虎隊 | 5 信玄 と 謙信 (川中島 の戦) | 4 小楠 公 | 3 赤穂 四十七士 | 2 曾我 兄弟 | 1 源義經 |
| 徳川幕府が倒れ王政復古となつた明治維新の物語の中で、有名な彰義隊と、白虎隊のお話を面白く書いたのが本書です。少年読者はこの本によつてどんなに深い喜びを見出されるでしょう。 | 信玄と謙信の幼い頃のお話からはじまつて、この二人の偉い大將が川中島で大合戦をする有様までくわしく書いてあります。一々史蹟をさぐつて書いてあるこんな面白い本は外にありません。 | 備正行のお話で本になつてゐるものが少い中に、この本だけは勇壯な正行の一生を傳へてゐる得難い著述です。父正成の死後、正行はどんなに勇壯な一生を送つたか本書を御覽下さい。 | 三島先生が最もお得意の研究だけに、でたらめな講談などとは違ひ、真に迫つてゐます。大石蔵之助をはじめ四十七士が、血の涙を流して主君の仇を討つたその當時の有様が手に取るやうに分ります。 | あはれにして勇ましい曾我兄弟の物語は、日本の物語として永く傳へられるべきお話です。三島先生の苦心の結晶になつたこの「曾我兄弟」はこの物語と共に永遠に傳へられるべき名著です。 | 源義經のお話は誰が讀んでもたまらなく面白いお話です。この本は、でたらめの義經の物語とは違つて、歴史によつて義經の生ひ立ちから最後までを書いたものでありますから實に立派な本です。 |

英國汽船ノーブルス號が伊豆の海で沈没した時、救助した春日艦長太田大佐の勇名は、世界に鳴り響いてゐます。(沖野先生の童話「沈没したノーブルス號」をお讀みになつた方は、皆さん御存知です。)その日本の勇士太田大佐は沖野先生著、童話讀本第四巻「海を越えて」に對して左の言葉を寄せられました。

貴著「海を越えて」唯今紀州沖航行中に拜見致しました。結構な本で、随分世の爲、人の爲になるものと思はれます。吾の微力も御影で何かの御役に立つのを光榮とし、著者に對して特殊の敬意を表します。

昭和二年四月廿八日午前

春日艦長

太田 資平

沖野岩三郎先生著・寺内萬治郎畫伯
裝幀・挿畫

童話讀本

四六判箱入裝本
内容二〇〇頁
定價金壹圓
送料十錢

第五編 孝行息子 (近刊)

第一編 赤い猫

第二編 金のつるべ

第三編 笛吹川

第四編 海を越えて

蘭金の刊書叢刊

第五編川名芳郎編池上浩装幀
 櫻田門の變
 第二編川名芳郎編池上浩装幀
 (共伊大老の死)

世界童話變書第十編
 仲木貞一編池上浩装幀
 アメリカ童話集

世界名篇物語叢書第十五編
 加治亮介編高坂元三裝幀
 モントクリスト伯爵
 (岩窟王)

少年少女科學大系第七編
 松平道夫著池上浩装幀
 兒童植物學

少年少女文藝談叢書第十編
 加治亮介編池上浩装幀
 大久保彦左衛門

四六判箱入美木
 本文一七〇頁
 原色版二枚
 凸版刷挿畫豐富
 定價各令一圓
 送料十二錢

四六版箱入美木
 本文三〇〇頁
 原色版凸版豐富
 定價金一圓五十錢
 送料十二錢

四六版箱入美木
 本文一六九頁
 原色版凸版豐富
 定價金九十錢
 送料十二錢

四六判總クローズ
 ドイツ式裝幀
 本文一七〇頁
 定價金一〇圓
 送料十二錢

四六判總クローズ
 原色版凸版豐富
 本文一七六頁
 定價金一七圓
 送料十二錢

上野の山に立籠つた幕臣の群、影義隊と、それを解散さ
 せようとした官軍とが大衝突するまでの物語で、大
 四郎、山岡、大村益次郎等偉人勇士の大活躍は
 讀者の胸を躍動させずには置きません。
 將に倒れやうとする徳川幕府を、必死になつて支へて
 た大老井伊掃部頭が、水戸派士の爲途に、櫻田門外に
 斃れるまでの幕末血涙史です。

總てに於て現代文化の先驅をなすアメリカにはアメリ
 カ人でなければ創造する事の出ない、金と獨特の童話を
 持つてゐます。それを遺憾なく皆様に紹介し得るのは本書
 あるのみです。次刊「スベイン童話集」

復讐冤さなつたモントクリスト伯爵が、如何にして第
 一、第二、第三と、巧妙極まる復讐をなしてゆくか、息を
 も吐かず最後まで読んでしまふ、世界第一の面白い小説で
 す。次刊「ナポレオン」を捕へる

太郎、次郎、お父さん、お母さん、その三人の口を借りて、あら
 ゆる植物の種類と其性質とを緻に入り細にわたつて面白
 く説明してゆく本書は、學校に於ける絶好の課外讀本で
 あると云ふ事が出来ます。次刊「兒童植物學」

徳川幕府三百年を築きあげたのは一つには大久保彦左衛
 門あつたればこそと云ひ得ます。もしすれば、龜裂の入りう
 とするその土台を、固めに固めて来た彦左衛門の努力は
 今もその礎が成る程です。次刊「彦左衛門」



金の星

十一月一號

(通卷第九拾六號)

東 京 上 野 市 二 八 外
 振 替 東 京 六 一 七 一 〇 番
 電 話 小 石 川 六 五 六 番
 蘭 金 社

田*にゐる鳥

作 詞 野口雨情

作 曲 本居長世

Andante M.M. ♩=138

Musical notation for the first system on the left page, including vocal line and piano accompaniment.

Musical notation for the second system on the left page, including vocal line and piano accompaniment.

Musical notation for the first system on the right page, including vocal line and piano accompaniment.

Musical notation for the second system on the right page, including vocal line and piano accompaniment.

Musical notation for the third system on the right page, including vocal line and piano accompaniment.

田にゐる鳥

野口雨情

田にゐる鳥は
足の長い鳥ヨ

足の長い鳥は
なんと云ふ鳥ヨ

驚の鳥ならば
足の長い鳥ヨ

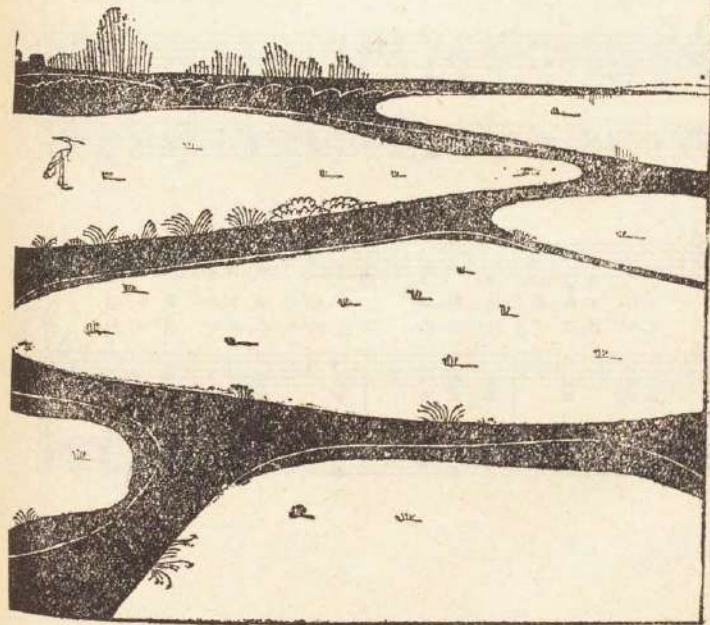
鳴の鳥ならば
足の長い鳥ヨ

田で啼く鳥は
首の長い鳥ヨ

首の長い鳥は
なんと云ふ鳥ヨ

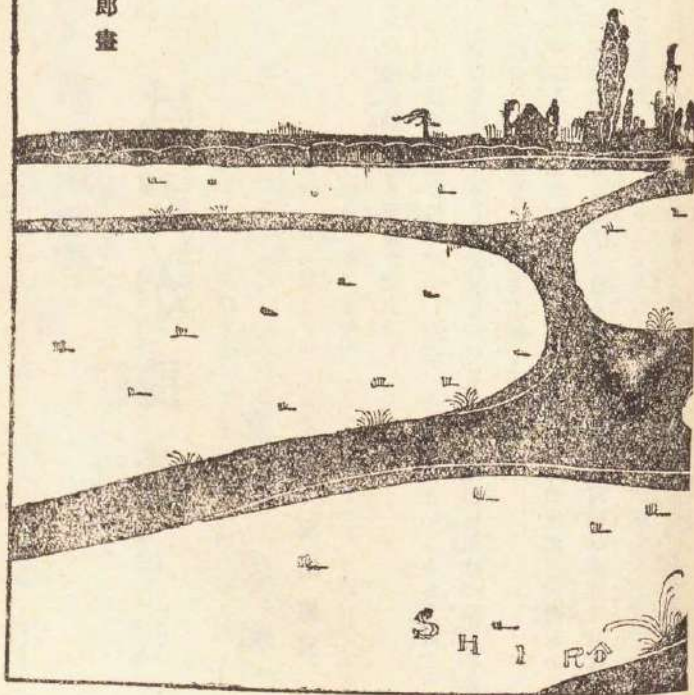
驚の鳥ならば
首の長い鳥ヨ

鳴の鳥ならば
首の長い鳥ヨ



四

川上四郎畫



五



(日本童話選)

はだか長者

立石美和
寺内萬治郎畫

兄と弟がありました。兄はやさしい性の子でしたが、どちらかといふとお人好で、いつもぼんやりしてゐました。それにひきかへ弟は、伶俐な生れつきで、はさ／＼とよく働く子でした。二人は、それは／＼仲のいい兄弟でした。けれど、悲しいことには、お母さんは、まゝ子の兄を憎んで可愛いがりませんでした。二人が大きくなると、まゝ母のおつかさんは、兄を邪魔に思

つて、旅へ出してしまひました。お母さんは、「人は一度は廣い世間といふものを見て來なければならぬ。お前も大きくなつたのだから、家にはかり居ないで、早く旅へ出て、その廣い世間といふものを、すつかりみて來るがよい」と、兄に云つて、旅の仕度をしてやつたのです。正直な兄は、

「それでは、その、廣い世間といふものをすつかりみて來ませう」と、云つて、家を出ることになりました。

兄さん思ひの弟は、分れるのを悲しがつて、遠い所まで見送つて來ました。

そして、分れ際に、
「これは、私が働いて、貯めたお金だから」と云つて、財布に一杯お金をくれました。
兄は、一人になつて、何處と云つて、あてのない旅を、足のむくまゝに、續けて行きました。

をひ／＼、自分の國をはなれて、遠い／＼所まで、何日も／＼歩きつゝけて、ある村のはづれまでくると、大勢の村人が、一匹の山猿を縛りあげて、ぶつたり、たゝいたりしてさわいでゐます。村人の一人は、

「こん夜は、こいつをにて、猿汁を造らへて喰べよう」と云つてゐます。

猿は、悲しがつて、キヤツ、キヤツと泣いてゐますが、誰も許してやりません。

情深い兄は、かわいさうだと思つて、村人に、助けてやつて呉れと頼みました。が、村人は、仲々しやうちしません。

そこで、分れ際に弟から貰つた、お金の一杯入つた財布をやつて、その代りに猿を買ひました。

そして、
「遠くの／＼、大きな／＼大山の、奥の奥へ逃げて

行け、里へ出て来て捕られるな！」

と、猿にいつて逃がしてやりました。

猿は、うれしさうに、三べんおじぎをして山の方へ逃げて行きました。

それから、だん／＼やつて来ると、その次の村のはづれに、大勢の子供が、よつてたかつて、一匹の小龜をいぢめておました。

兄はまた、かわいさうだと思つて、龜をにがしてあやりと、云ひましたが、いたづらな子供達は、仲きくません。

持つてるお金は、もうみんなやつて終つたので、兄は仕方なしに、

「それでは、小父さんの着てゐる着物を、みんなやるから、その龜と、とりかへてお呉れ！」

と、云つて頼みました。

子供達は、それを聞いて、この小父さんはさつと、ばかに異ひないと思ひました。そこで、みんなでか

らかつて、

「それでは、小父さんの帯も呉れるかい？」

「あゝあげるよ」

「じばんもか？」

「あいよ」

「きやはんもか？」

「あいよ」

「わらじもか？」

「あいよ」

「たびもだよ」

「あいよ」

子供達は、わあつと笑つて、

「代えよう！ 代えよう！」

と、小龜を兄に渡しました。

おふんどし一つの、まる裸體になつた兄は、小龜をてのひらへのつけて、川の方へ行きました。そして、

「遠くの、大きな大川の、底の底へ逃げて行け！ 里へ出て来て捕られるな！」

と、云つて、にがしました。

小龜は、うれしさうに、三べんおじぎをして、見えなくなつて終ひました。

困つた事になりました。

兄は、けんでもう、三日も四日も、ご飯をたべずに、裸體で歩いて来たので、お腹がすくし、つかれて、くたくたになつて終ひました。

仕方なしに、お宮のお堂へ入つて、こゝで夜を明か



さうと、横になりますと、

「ブーン、ブーン、チーチ、チーチ、お腹が空いた！
ブーン、チーチ」

と、悲しい聲を出して、泣いてゐるものがありま
す。

誰だと思つて、よく見ると、それは、一匹の大き
な蚊蚊でした。

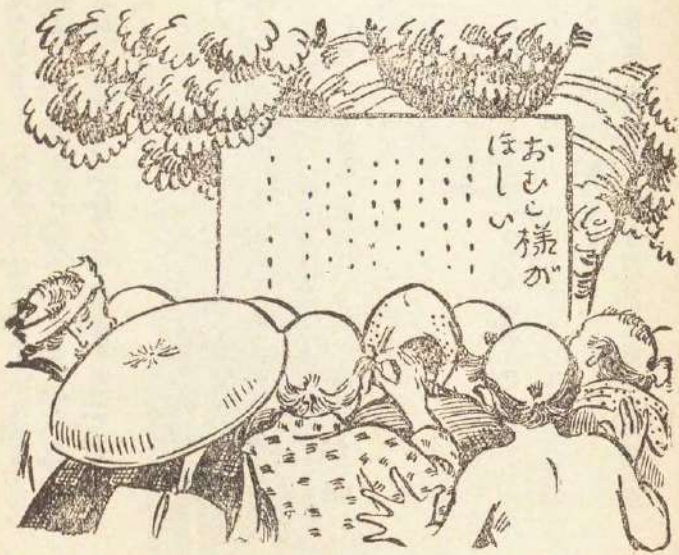
兄は、自分のお腹の空いてゐるのも忘れて、

「それはかわいさうだ」と思ひましたが、もう、何
もやるものも喰べさせるものもありません。仕方な
しに自分の身體へたからせてやりました。

「ブーン、チーチ」

と、やぶつ蚊は泣き乍ら、兄のお腹へたかつて、
い、だけ血を吸つて行つて終ひました。

夜が明けると、いつそお腹が空いて、堪らない
ので、兄は、何處かでご飯を喰べさせて貰はうと思
つて、急いで村の方へ歩き出しました。



10
みると、村の入口に、立札が立つてゐて、大勢の
人が、ワイ／＼云ひ乍ら讀んでゐます。立札には、
「おむし様がほしい」。

家へ来て、三つの難題を見事にやりとげた人を、
家のお姫様のおむし様にする」

と書いてあります。

そして、その家といふのは、この國に、もう一軒
とはない大金持ちの、長者様だといふ事でした。

兄は、自分でも、決して賢い性だとは思はなかつ
たので、そんな難題なんか、とてもやり遂げられる
とは、思ひませんでした。そこへ行つて、せめて、
ご飯の御馳走にでもなりたいたいのだと、思つて、さ
つそく訪ねて行きました。

長者様の家では、難題をとくと云つて、裸體のお
客様がやつて来たので、あきれ返つて終ひました。

そして、とにかくご飯の御馳走になりたいといふ
ので、御膳を出すと、喰べるわ、喰べるわ、七杯も

八杯も御代りをするので、これはきつと、大ばか者
か、氣狂ひにちがひないと思ひました。

さて、その難題といふのは、どんな事かと尋ねる
と、先づ第一に、この家の裏には、底なし川といふ、
深い／＼大川が、渦を巻いて流れて居る。それを見
事に、向ふへ渡らねばならない。それが一つ。第二
に、その川の向ふに、高い高い山があつて、その山
のてつべんに、名無しの樹といふのがあつて、それ
には、紫色の美しい花が咲いて居るから、その花
を一枝取つて、歸つてこなければならぬ。

その家の御姫さまは、何うかして、その名無しの
花を一枝手に入れて、自分の部屋へ生きたいと、兼
ね兼ね云ひ暮して居るのだといふ事でした。

兄は、長い間旅をして、色々な苦勞をして来て居
ますから、山登りや、川渡り位なんでもないと思ひ
ました。

そして、さつそく、裏の川へ行つて見ましたが、

何うして、今までに、見た事もきいた事もない、急流で、歴の所位まで入つて行くと、今にも押し流されさうで、立つて居る事も出来ない位です。

「これは困つた！」

どうしたものだらうと、考へて居ると、川上から、ベカ／＼ベカ／＼と、小さな甲を見せて、一匹の小龜が流れて來ました。兄の前まで來ると、可愛い四足で水をかいて、流れなくなりました。

そして、不思議な事には、その小龜が、水の中から、小さな聲で、

「乗れ！ 乗れ！」

と云つてゐます。

そして、もつと、もつと不思議な事には、その小さな龜が、見る／＼中に大きくなつて、四斗椀程の大きさになつて終ひました。

兄は、思ひ切つて、その背中へ乗つて見ました。

すると、龜は、まつすぐそのまゝ、水を切つて、波をけたて、また／＼間に、向ふ岸へ泳ぎついて終ひました。

龜の助けで、元氣になつた兄は、岸へとび上るやいなや、勢ひづいて、何度も／＼すべり落ち乍ら、とう／＼高い山の頂邊までかけ上りました。

けれど、頂上へ來て、兄はいまさらのやうに、

「あッ！」

と云つておどろきました。

なる程、その名無しの樹といふのでせう。一本あるにはあるが、それがまた大へんな大木で、二十人も三十人も人が、手をつないで、やつととりまける程の太い幹が、ずん／＼大空へのびて、はるか雲の上で紫の雲がたなびいた様に、美しい花が咲いてゐるのでした。

「何うして、何うして、わたしにあれがとれるもの

か。」さう云つて、兄はがっかりして、樹の根元へ、しやがんで終ひました。

「あゝあゝ、つまらない事をして終つた。」と、首をうなだれて、考へ込んでゐますと、誰や



餘り勢ひよく山登りをしたので、またお腹がすいて終つて、せつかく御馳走になつたのも無駄になりさうです。

ら、スル／＼と、樹をすべり下りる音がして、ぱつと、自分の背中へ飛びついた者があります。

「誰だ？」

おどろいて振り返ると、まあ！ 忘れもしない、この間助けた山猿が、手に一枝の名無しの花を持って、キーツー キーツー と、なつかしうに、ないてゐます。

「おー！ 猿どんか！」

兄は、うれしさの餘り、山猿に抱きついて御禮を云ひました。

岸では猿が、手を振り、手を振り見送ります。

小龜がたちまち、四斗樽ほどに大きくなる。

名無しの花の小枝をかついで、兄がひらりと龜に乗る。

渦まく波を、けたて〜けて、龜がスイ〜沖へ出る。

小手をかざすと、はるか向ふに、長者の家のきれいな屋根が光つて見える。

度で、間違ひなしに、家の娘へ杯をさしていたゞきたいのです。まちがへばそれ迄の事、うまく姫にさして下されば、それが夫婦のさかづきです」

あゝあ、今度こそは、何うしたらいいのでせう？ 誰も彼もみんな同じように見えます。旅人のかなしさには、百人の娘の中、たれ一人として、知つてゐる者もありません。

「もう駄目だ！」

さう思つて、じつと考へ込んでゐると、すぐ耳元で、ブーン、チーチ、ブーンチーチとなく者があります。

「あゝまたやぶつ蚊がお腹を空かしたな」

と思つてゐると、やぶつ蚊は兄の眼のまへで、クルクルと、三度廻つて、向ふの方へ、飛んで行きました。

變な事もあるものだ、見てゐると、やがて、舞

長者の家では驚きました。

「はだかの御客は、偉い人にちがひない」

さう云つて、大事にしました。

ちやうどその晩、これからいよく、御姫さまとの婚禮の式をあげるといつて、ひろい〜百疊敷のあざしきへ通されました。

兄は座しきへ通つて見て、また、あッ！ と云つておどろきました。

百本のろうそくの火が、ピカ〜と輝く大廣間には、ちやうど百人の、同じ着物をきた、同じように美しい娘さん達が、ずらりと並んで居ます。

そこへ、長者様が出て来て、いふ事には、

「この百人の娘の中に、一人、家の娘がまじつて居ます。お客さまは、見事に二つの難題を仕上げて、下さいました。もう一つの難題といふのは、たゞ一

ひもどつて来た蚊は、今度は、チーチと流き乍ら、杯をもつた、兄の人さしゆびにとまりました。そして、また、クル〜クル〜廻り乍ら、前へ〜と飛んで行きます。

兄は、思はず膝を立て、蚊の後を追つて行きました。

蚊は、やがて、チーチつと、一際大きくないて、一人の娘の人さしゆびにとまりました。

「ハイッ！」

と云つて、兄はその娘さんにさかづきをさしました。

さうでした。その娘さんが長者の姫だったので

そして、兄は、めでたく百萬長者のあと〜りになりました。



試斬りの使

小城庄一

羽鳥古山畫

一六

村瀬八彌の家に、友達の笹山内記が遊びに来ました。

八彌は江戸の旗本の若主人で、内記は貧しい浪人です。ふとしたことから交りを結んで、非常に親しくして居ましたが、その日も碁を打つたり酒を飲んだりして、愉快に日が暮れるまで遊びました。

四方山の話の末、八彌は近頃或る商人から買求めた刀の自慢を始めました。

「銘ははいつてゐないが、たしかに相州物で、焼刃やにその具合から推すと、ひよつとしたら正宗あたりぢやないかと思ふ。兎に角立派な物だよ。」

「ふうん、そりやあ大したものだな。どれ一つ拜見。」

八彌は床の間に飾つてゐたその刀を取つ

「相州物にしても随分年代が下つてゐる。まして正宗などではない。正宗なれば焼刃の入れ方が違ふし第一もつと氣品がなくてならぬからな。」

「では誰の鍛えた物だ？」

「さあそれは私にも判らぬ。兎に角決して悪い刀ではない様だけれど……」

内記は首を傾げました。

自分よりも劍術も勝れてゐるし刀の目利きにも悉はしい内記に、さう言はれると、八彌はこの上押して言ふことが、出来ませんでした。で今度は言葉を換えて、

「併しどつちにした所で、斬れるには斬れさうだらう。」と言ひました。

「それもどうか。少し刃が薄いから…… 試めして見ぬことには判らぬ。」

八彌は心中少し口惜しくなつたので、

「よし、ではそれを貴公に借すから試めして見てくれ。若し斬れない刀だつたら捨て、丁ふ。」

とやけ氣味に言ふと、内記は笑つて、

「折角買った物だから捨てなくてもいゝだらう併しまあ物は試した借りて行つて一つやつて見様。」

やつて見様——といふのは試斬のことです。何しろその頃は、三代將軍家光が上に立つて、世は静かになつたと云へ、未だ大阪合戦の名残りが人の心を荒くしてゐ

一七

て来ました。居すまひを正して、懐紙を口に、おもむろに刀を受取つて鞘を拂つた内記は、打ち返し、打ち返し、じつと眺めて居ました。が、何も言はずにバチンと又元通り刃を収めて、黙つて八彌に返し交した。

「どうだ、君の見立ては？」

と八彌が促すと、

「失禮だがこれはそんなものではない。未だ随分新しいよ。」

と、内記は落着いて答へます。古刀と新刀の鑑定違ひをしたと言はれては、いやしくも兩刀を生命とする武士の恥です。折角の自慢の鼻を折られて八彌は、

「いや、そんなことはない。儘に相州物だ。」と強く押返しました。

た時だものですから、試斬り（即ち町人や百姓などを闇の夜にいきなりぶち斬つて、刀の斬れ味を試すのです）は盛んに武士の間に行はれて居たものでした。

で、内記はその刀を持つて歸つて行きまして。
三日経つても四日経つても、内記からは何とも言つて来ません。十日目にやつと一封の手紙が届きました。それには「近頃とても役人達の眼が厳しくて、うまく辻斬りが出来ない。それに試して見た所で大して斬れる刀とも思へぬから、近く行く時に歸しし様と思ふ。」と書いてあります。
八彌は何となく馬鹿にされた様で、意地になつても試させてやら

うといふ氣になりました。そこですら／＼と又一通の返事を書いて庭掃除をしてゐた下僕の伍助を呼びました。伍助は長くこの家に仕へてゐる忠實な正直一べんの男でした。
「伍助、これを笹山殿の家に届けくれ。」
「はい、長りました。」
伍助は手紙を懐にいれて、直ぐ家を飛出しました。

二
笹山内記の家は隅田川を渡つた向ふの淋しい村里でした。だから麻布の八彌の家から其處まで行くには随分の道程があります。伍助が一生懸命急いで淺草の邊

りまで来ると、夏のこととて折悪しく驟雨が来ました。しまつた！と思つたけれども、雨除けしてゐれば遅くなつて了ふし、忠實な伍助は、手紙だけをしかと濡れない様に懐に深く藏ひこんで、一散に駆けて行きまして。

隅田の渡しにいた時、やつと雨は霽れました。やれ／＼と思つて、渡船に乗らうとすると、矢張り心が急いでゐたせいか、それも舟べりが濡れてゐたからか、するりと足踏み滑らして、伍助は水の中に轉んで了ひました。
「ああ大變、着物が濡れ様が、背に水が這入らうが、そんなことはどうでもいいが、大事な主人の手紙を水につけて了つたのです。伍



助は蒼くなりまして。
舟頭や乗合の衆が氣の毒がつて色々言葉をかけてくれましたが伍助はたゞ上の空で挨拶を返すだけですつかり弱りこんで了ひまし

た。そしてそは／＼と懐をひろげて手紙を取りました。水に濡れたので勿論封はとれて、上紙もくちや／＼になつてゐます。
「あつ飛んでもないことをした。」
伍助は呟いてぼんやりしてゐます。
その時、隣りから

「もし御仲間、どうなさつたのですか？」
と親切に尋ねてくれた人がありました。見ると破衣を纏つた、すげ笠の旅の僧です。
「御主人の使に來

て、大切な手紙を水にぬらして了ひました。」
伍助はしよんぼりと答へます。「それは／＼、でも幸ひ陽が照つて來たから乾いたらいいではありませんか。そして元通り封をして持つてゆき、譯をお話しなすつたら、きつと向ふの方も許して下さるだらうし、御主人も御腹立ちにはなりません。」

成程さう言はれ、ばさうです。正直な伍助は餘り心配し過ぎて、それ位の事にも氣がつかかなかつたのでした。
喜んで坊さんの言ふ通り、封筒の中の手紙を取り出し、破けない様に静かにひろげて、舟べりに置き日は乾し始めました。併ししつと

水がとほつてしまつたこととて
仲々思ふ様に乾きません。伍助は
ふつと溜息をつきました。
餘り打萎れた伍助の様子に、餘
程氣の毒に思つたものか、坊さん
は、

「手傳ひませう。」

と言つて手をさし延べ、手紙の
片端を持つて、程よく日の光りに
あてました。そして、見るともな
く手紙の文面に眼をやりましたが
半ば頃まで讀むと、

「あー」と驚きの聲を上げました。

「何です？」今度は伍助が不審を
起して聞きました。坊さんは黙つ
てゐます。

「どうかしたのですか、この手紙
が？」

生れついで此方學問といふもの
をしたことがなく、従つて文字も
讀めない伍助は、この手紙にどん
なことが書いてあるか、勿論判り
ませんが、坊さんの顔色の唯なら
ぬのを見て、さすがに氣になつて
來ました。

でも坊さんは、

「いや何でもありません。一寸そ
の手を退けて下さい。」

と伍助の手を拂ひ、最後まで熱
心に讀んでゐます。

その中舟は向岸に着きました。

乗合客はどや／＼と下ります。伍
助も舟を下りて、石原に坐つたま
ま、しきりに手紙を乾しつゝけて
ゐました。

「若し」ふと聲をかける人があり

ます。ひよいと振向いて見ると、
先刻舟を下りて、時間からすれば
もう大分先の方まで行つた筈の、
例の坊さんです。

「何か御用ですか？」

と云ひ乍らも、妙にさつきの坊
さんの様子が氣にかゝつてゐた時
なので、つゞきこれは仔細があ
るな、と伍助は思ひました。

「あなたは、その事を承知でその
お使に行くのですか？」

坊さんはじろ／＼伍助の顔を眺
め乍ら言ひました。

「そのこととは？」伍助は妙な顔
をしてゐます。

「ぢやあなたは何も知らないので
すね。」

「と言ひますと？」

「いやあなたは字が讀めないので
せう。」

「え、字は知りません。」

「どうもさうではないか、と思つ
た。やれ／＼」坊さんはそこにし
やがみました。そして、

「あなたの御主人といふ方はひと
い人ですな。」と言ひます。伍助は
妙な相手の言葉に、

「あなたは又一體何です。だしぬ
けに私の主人の悪口など、言出し
て、——私の主人は情深い立派な
人です。」

かね／＼から大して情深くもな
い主人でしたが、人から悪口され
れば、根が忠義な伍助とてかばり
立てたかつたに違ひありません
「い、え、情深い人ではありませ

ん。情深い人ならこんなことをす
る筈がない。可哀想になあ……」

坊さんは溜息と共に、さう言つ
て、ちつと伍助の顔を眺め乍ら、
一段と聲を強めて、

「あなたは殺され様としてゐるの
ですよ。此の手紙を持つて先方に
行くと、あなたの命はなくなるの
ですよ。先日預けた刀で、この下
郎を試斬りにしてくれ、とさうこ
れには書いてあるのです。」

「まっ！」伍助は餘り意外な坊さ
んの言葉にびつくりして、危く腰
をぬかさうとしました。

「舟に蹴躓いて轉んだのがあなた
の僥幸でした。實は私は此手紙を
讀んで驚いたのだが、あなたが餘
り落着いてゐるから、ひよつとす

ると殺されるのを覺悟の上のこと
かと、黙つて居たのだが、どう考
へてもあなたの顔には未だ死相と
いふものが表はれてゐない。だか
ら一旦行過ぎたもの、どうして
も氣になつて、引返して來たので
す。手紙を届けてはいけません。
早くお逃なさい。そして二度と主
人の所に歸つてはなりませんよ。」
伍助は一言も發せず、じつと唇
をかみしめて俯いてゐました。今
日が今日迄御主人大切と、一生懸
命勤めを勵んだのに、あらうこと
か刀の斬味を試めすのに、自分の
命を役立て様とするとは……情
ない、あんまりな仕打ちだ！……
伍助の胸は一杯になつて、涙かと
めどもなく流れて來ました。

其頃神田昌平橋の附近に、島村彦之丞といふ大身の旗本武家が住んでゐました。伍助が人入稼業の世話で、その屋敷に住みこんだのは、それから間もなくでした。或晩のことです。彦之丞は何か怪しい人聲に、ふつと眼を覺ました。併し其時は、しーんと静まり返つた真夜中の邸の中には、物音一つ聞えて来ません。

「ハテナ、今たしかに人の聲がした様だつたが……」

呟いて耳を澄ましたましたが、矢張り何も聞えないので、さては夢だつたかと再び眼をとちてとろとろとなりました。と――

「いの字こん畜生ッ。」と啜り泣く

様な聲が響いて来ました。「おや」彦之丞は跳ね起きて、左手に枕許の刀を取り、足音をぬすんで聲のする方に、歩き出しました。たしかに仲間部屋の方です。ぬき足さし足廊下を傳ひ、庭を過ぎて、聲の洩れて来る部屋をのぞくと、一人の男が頭には向ふ鉢巻をして、机の上にいるは手習の本を乗せ、指で何か字を書き乍ら、

「いの字こん畜生」と頻りに呻つてゐるのです。それは近頃備入れた仲間の伍助といふ男でした。變なことをするものだ、と思ひ乍ら彦之丞は暫く見て居ましたが、やがて引返して床に入りました。

それから氣をつけて居ると、毎晩伍助は呻つて居ます。到々彦之丞は呼び出して譯を聞きました。伍助は涙を拭き乍ら、例の試し斬りの一件を話して、

「幸ひその時旅の坊さんが通りかかつてくれたから命は助かりましたが、これといふのも私が字の讀めぬ無學から来たものと、自分の無學が恐ろしくもあれば悲しくもなりました。そこで毎晩字の稽古をしてゐるのですが子供の時から人に追ひ使はれてばかり来たせいにか、とんと物覚えが悪くいゐるはの一字が未だ書けないのです。残念でたまりません。」

「はあ、それで「い」の字こん畜生と呻めてゐるのか」彦之丞は感に堪へぬものの如く、

「いや、お前の熱心には私もほと

ほと感心した、よし今から手を取つて私が教へてやらう。」

伍助は有難涙にむせびました。彦之丞はそれから毎晩伍助に手



習の稽古をしてやりました。教へる方も熱心なれば、習ふ方も熱心めさくくと上達する伍助の腕には彦之丞も呆れる程でした。

五年の月日が流れました。或時、將軍家光公は目黒のお鷹場に鷹狩りに行きました。

お鷹場の周囲には、

「將軍御鷹場

これより内に入る可からず」と認めた制札がづらりと並んで建つてゐます。何氣なくその札を見た家光は、

「おゝ」と聲をあげました。餘りに美事な文字だつたからです。

「立派な字だ。この制札は誰が書いたか。」

「はッ、見廻り役島村彦之丞で御座います。」近侍の者が答へます。

「彦之丞を呼べ」鶴の一聲。彦之丞は直ぐ恐る／＼罷り出でます。

「これは汝が書いたか、美事な文

「字ぢや。」

「へへつ、恐乍ら申上ます。これは私では御座いません。組下の足輕、伍助といふ者が認めたもので御座います。」

それを聞いて將軍は、一層感に堪えぬ様な顔をして居られました。間もなく伍助は將軍の思召で士分に取り立てられました。

その事があつてから、又二十年の月日が流れました。

御祐筆頭島村遠江守からお招きを受けた村瀬八彌は、何事だらうと思つて直に邸に参りました。御祐筆頭と言へば、將軍家のお側にあつて書物の役を勤める高い身分で、普通のお旗本など仲々足許

にもよりつけないほどでした。

八彌が行つた時には、大勢の客が廣座敷に一杯坐つてゐました。席が定まると、主人の遠江守が静かに出て來ました。

「皆様をお招きしたのは外でもありません。今日は私の命拾ひをした二十五年目の記念日です。そこで祝ひのしるしに皆様に心ばかりの御馳走を思つてお招きした譯です。」遠江守はさう言つて、正面の神棚から一箇の金巻繪の小箱を取出し、中から古びた一通の手紙を取出して、

「村瀬殿々々」と呼びました。八彌が前に出てゆくと、

「これに御覺えが御座るか。」不密げにさしのをいた八彌は、

忽ちハツと顔色變へて、其處に突伏して了りました。額からは汗が流れてゐます。聲ははせて、「恐入ります。如何様にも御成敗の程を……」

「いや、此事があつたればこそ私は今日の出世を見ました。貴殿は私の恩人です。」

遠江守はさう言つて八彌の手を取り、上席に直して、怪訝さうな顔をしてゐる一同に向ひ、静かに在し日の物語りを始めました。島村遠江守が、彦之丞の家を以て、次第に立身した、かの仲間伍助であつたことは、もう皆様に御判りの事だらうと思ひます。(をばり)



嘘のはなし

殿様は大層賢い方で、そのお姫様は世間にもつらしい美しい方でした。

すると、ある時殿様が、
「私に何でも話を聞かせて、もしその話を嘘だといつたら、私の姫を嫁にやる。」

と、おつしやいました。
さア大騒ぎです。殿様の前へ毎日のやうに大勢の男が來て、いろいろと嘘ばなしをしました。殿様はきまつて、話を聞いてしまふと、「それは本當だ。」

と、しら／＼しい顔をしておつしやいますので、皆ながっかりして歸つて行きました。
殿様は、かうして毎日いろ／＼

の嘘ばなしを聞いて、面白がつてをりました。ところが、ある日、一人の男が御殿へ來て、
「私こそ、本當の嘘ばなしをお聞きに入れます。」

と、いひました。
殿様は大喜びで、
「さア、早く聞かせてくれ。」と、おつしやいました。

「お約束に間違ひはございませんまいな。」
と、男は念を押しました。
「間違ひはない。だが、話の数は三つまでだぞ。三つ話をして駄目だつたら、姫はやらぬぞ。」

そこで、男は話を始めました。
「私の父はお殿様の親友でございましたが、來年死にました。」
「それかどうした。」

「それでおしまひでございます。」
「なんだ話らない。だが、その話は本當だな。」

男はそこで二番目の話に移りました。
「ところで、私の父は世界一の金持でございますました。」

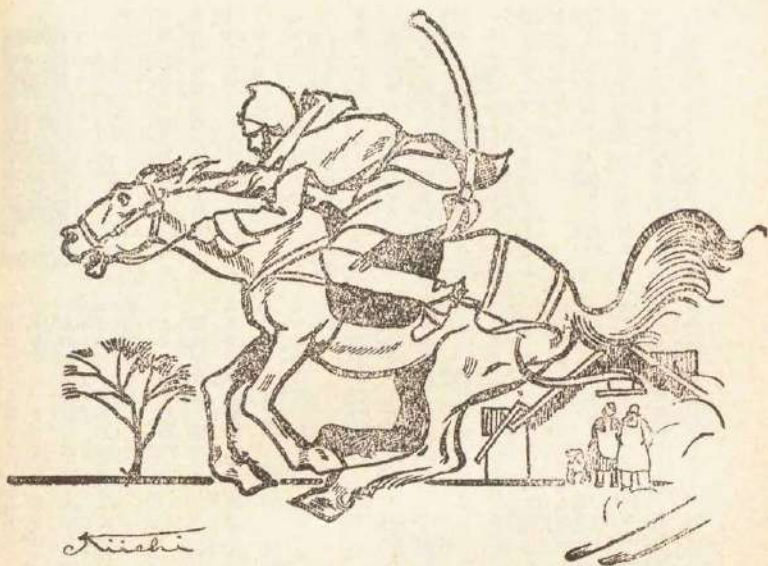
「それかどうした。」

「それでおしまひでございます。」

「それでおしまひか。しかし、それもらつてしまひました。(をばり)」



「本當だな。」
「それは、次のお話をいたします。ところが、私の父は三年前にお殿様に百萬兩、お金をお貸しいました。」
「それからどうした。」
「ところが、お殿様は今もつてそのお金をお返し下しませんので今日はそのお金を返していたときに参りました。」
殿様は困つてしまひました。その話を本當だといへば、百萬兩といふ大金を男に返さねばなりません。また、嘘だといへば大層なお姫様を男にやらねばなりません。殿様は全く閉口してしまつて、頭を白黒させておひでになりました。と、とう／＼しい顔をしておつしやいました。
「それでおしまひ。」
「買ひ男は、逃々お姫様をお嫁にもらつてしまひました。(をばり)」



一王國を争ふ

小島政二郎

岡本歸一畫

二六

八

畜生、うまくと奴等の田舎芝居に引つかい、つたのだ。大勢であの伯爵夫人をいぢめたのも、戸口でのあの大騒ぎも、初めからのたくらみだつたのだ。この亭主は悪者だ。お芝居はすべて彼奴が組み立てたのに違ひない。

「さうだ。」

僕は、亭主をギエー／＼痛めつけてやつて、あの女の素性や、手紙が何處へやられたか、すつかり白状させてやらなければならぬ。さう思つて、僕は、テーブルの上から劍を掴み取るが早い、部屋を飛

び出した。しかし、僕の怒りを豫期してゐたのだらう。彼等はちやんと用意を整へて待つてゐた。庭の隅に、亭主が喇叭銃を両手に構へてゐる傍に、子供は勢猛な犬の革紐を一生懸命引つ張つてゐた。この二人の両端に、二人の腕番が、手に／＼乾草杖を振り上げて突つ立つてゐた。すると、女房は、亭主のうしろから、大きな角燈を差上げて、狙ひいゝやうに僕の姿を照らして見せてゐた。

「出て行つて下さい。早く出て行つて下さい。」

亭主は、ぶる／＼顫へる聲で叫んだ。

「あなたの馬は戸口の所につないであります。出て行つて下されば、誰も手出しはしません。しかし、少しでも手向つて来て見るがいゝ、そつちは一人、こつちは荒くれ男が三人だ。」

何の男達が恐からう。二本の乾草杖も、喇叭銃も、まるで大風の中の木の枝のやうに、ぶる／＼揺れらごいてゐるぢやないか。僕が恐れるのは、犬ばかり

だ。……僕は考へた。若し今、この肥つちよの亭主の咽喉首へ劍の尖を突き付けて、無理やりに云はせて見たところで、彼が本當のことを白状するかどうか分らない。無駄な時間を費すだけ馬鹿々々しい手間だ。そこで、僕は一層／＼と奴等の頭の先から足の爪尖まで睨め知して置いて、奴等が一層ぶるぶる顫へ出したのをせめてもの腹いせに、ひらりと馬に打ち乗ると、その儘一目散に駆け出した。すると、後の方で、女房の疍高い笑ひ聲が、耳を刺すやうに腹立たしく響いた。

僕はもう覺悟を極めてゐた。

あの手紙は無くしてしまつたが、あの中用の向きは大抵承知してゐた。これから一息に、サククス。フェルスタイン親王の許へ駆けつけて、丁度皇帝がさうしろと命令されたもしたやうに、僕自身の口から直接に申し述べよう。それは實に、大膽極まる危険な道方には違ひなかつた。なぜと云つて、若し

云ひ過ぎたりすれば、拒絶されるおそれがあつたから……。しかしもうかうなれば、一か八かだ。全獨逸國の運命が、今、僕の雙肩に懸つてゐるのだ。さう思ふと、實に、慎重な態度を取らなければならぬ。僕は大きな力を全身に感じた。心は寒いばかりに引きしまつた。

九

僕がホフの町へ乗り込んだのは、もう真夜中だつたが、街々のどの家も起きてゐるらしく、あか／＼と燈火が窓に映り、辻々には、何と云ふことなしにざわ／＼と人々の影が行き來してゐた。いつもなら寢静まつてゐる今頃、この落ち着きない有様は、明らかにこの城内の人々が、今や非常に重大な問題で徹宵興奮してゐる證據だと、直ぐに察しられた。僕が、その群集の一ぱいに溢れてゐる街中を通り抜けようとした時、四方八方から漫罵を雨のやうに浴せられた。しかも一度などは、大きな石が耳許をかす

めて、ビュツと飛ぶやうな目にさへ逢つた。しかし、僕は決して馬の足並を亂しはしなかつた。堂々と宮殿を目指して真直に進んで行つた。

何と云ふ美觀だつたらう。宮殿の窓と云ふ窓は残らず、地下室から屋上まで明々と燈火が輝いて、大きな城の形が、暗い夜空をぼーッと隅取つてゐた。黄い光の中には、黒い人影がチラ／＼と右往左往してゐるのが、遠くからよく見えた。城の前の廣場は晝間のやうに明るかつた。その中を僕の馬は悠々と進んで行つた。僕は門の處で、馬丁に馬を預けると、その儘大きな足取りで胸を張り使者らしい威嚴を作つて、一瞬も躊躇する事の出來ない用件で、すぐ親王殿下にお目に掛りたいと丁寧申し入れた。

通された廣間には、大勢の人が寄り集つて、何か大きな問題について會議を開いてゐるやうな様子だつた。澤山の人ががや／＼と云ひ争つてゐるのは開戦すべきか否かの會議らしかつた。僕の姿を一目見

るが否や、人々はビタリと口を噤んだ。僕は靜かに用向きを家令に傳へた。家令は、憎々しくさうな眼付をして、僕を見上げ見下し、不性無性にある小さな部屋へ僕を案内して、何も云はないで無禮にも去つてしまつた。家令の様子に、廣間全體の會議の空氣に、僕は或物を直感した。

「この様子では、僕がどんなに頑張つても、陛下と佛蘭西との爲に彼等を動かすのは、ちよつとむづかしいらしいな。」

僕は親愛なる陛下を思ひ、同胞を思ひ、心暗く、その小さい部屋の中を忙はしなく行つたり來たりしてゐた。すると、かなり長い時間を放りっぱなしにして置いてから、さつさの家令がやつと顔を出した。

「僕は大変急いでゐるのですが……。」

佛蘭西の爲、腹立たしい興奮をぐんと怵へて、下手に云つた。

「親王殿下には、今ちよつと手離す事の出來ないこ

とをしてをられますから、貴下の御用向きは妃殿下が代つてお聞きなされます。」

彼は自分の云ふべきことを云ふと、無表情に去らうとした。妃殿下？ 妃殿下などに逢つて何になる。妃殿下にこの用向きを云つて何の足しにならう。妃殿下こそは、心の底から獨逸の味方であつて、夫た親王殿下の心を離へさせ、この王國を佛蘭西に反對させようとしてゐる常人ではないか。妃殿下なんか逢つてたまるものか。

「我輩は親王殿下にお目に掛りたいのだ。」

僕は、思はず大きな聲で呟鳴つた。すると、思ひがけず扉の蔭から、

「いゝえ、お目にかゝるのは、妃殿下です。」



「して、貴方は、親王にしろ、妃殿下にせよ、何用が、ありなのですか。」
 その聲を一言聞くと同時に、僕ははつとして目を見張った。彼女の顔を一目見るが否や、僕はもう、かつとしてしまった。體中の血が怒りに燃え立つた。忘れてなるものか。高貴な姿、女皇のやうなこの顔付、そして、一度見た者には、永久忘れつこのない、ガロンヌ河の水のやうに青く冷たいその瞳。
 「時間がないのです、あなた。」
 彼女は、じれったさうにかう叫ぶと、靴の裏でとんと床を鳴らした。「さあ、何の御用なのです？」
 「何を僕があなたに申し上げる必要があるのです。云ふことがあるとすれば、僕はあなたから、女といふ者は絶対に信用

すべからずと云ふことを教へられたぐらゐのものです。あなたは、僕を永久に踏み付け、傷つけたのです、それだけです。」

彼女は、細い眉根を寄せて、従者を見た。

「何か囁語でも仰しやつて入らつしやるのではありませんか。それで無ければ、何か大間違ひをして入らつしやるのでせう——暫く御休息でも——。」

「あゝ、よくもよくも、そんな白々しいことが云へるものですね。」僕は叫ぶやうに云つた。

「ぢやアあなたは、何か妾にお會ひになつたことでもあると仰しやるのですか。妾は忘れしましたか……。」

「仰しやるな。もう、僕には、我慢が出来ない。僕は——僕は——あなたが二時間程前に、僕のものをお盗みになつたことを云つてゐるのです。」

「何と云ふ失禮な……。」
 彼女は、上手に怒つた風を裝つて叫んだ。「あな

たは使節として入らしたのだと存じますが、使節がそんなことを口になさるものですか。」

「あなたは上手だ。空惚けるのが上手なのは、もうよく分りました。」しかし、僕は云ひ直して「妃殿下、一晩の間に二度も、私を馬鹿にしないで下さい。」

僕は、いきなり身を屈めて、彼女の服の裾を掴んで云つた。

「あんなにすばやく、あんなに見事に僕をやつつけてしまつたのですから、もう、いゝではありませんか。」

すると、彼女の象牙のやうな兩頬が、ふいにさつと赤くなつた。それは、雪をいたゞいた高山の上に、曉方の光が仄にさしたやうだつた。

「お控へなさい——。ローゼン、衛士をお呼びなさい。さうして此男を、こゝから連れ出さしておしやひなさい。」と彼女は叫んだ。(つゞく)

百日紅(推應)

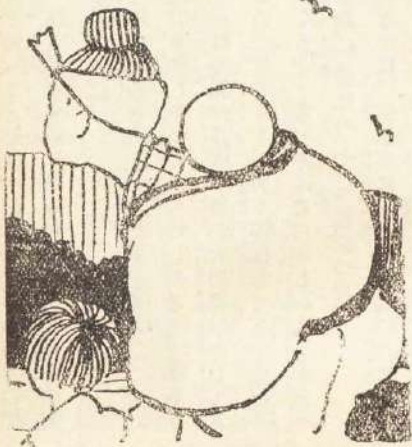
群馬 青柳花明

お寺のお庭の

さるすべり

花がくすくす 笑ひます

くすぐりましよよ
くすぐろよ



くすぐりましよよ

くすぐろよ

みんなをくちゆくちゆ

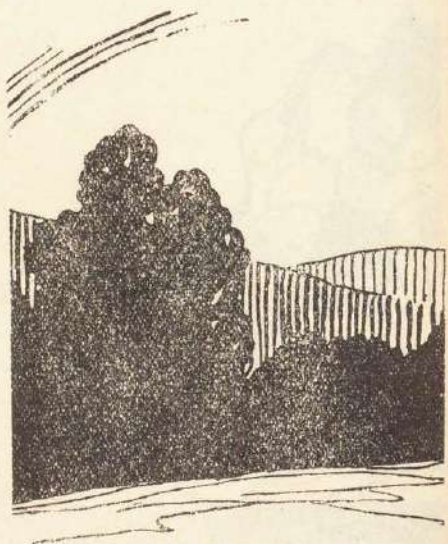
さるすべり

花が散つたら

よしませう

お空とお池(推應)

東京 柴野民三



お空のお月さんに

おいでくしてる

お空のお月さんは

大人のお月さん

お池のお月さんを

ニコニコ見てる

虹の橋(推應)

神奈川県 中村正道

うらのお山にのぼつて

姉さん呼んでゐる子供

空には七色 虹の橋

お池のお月さんは
子供のお月さん

向ふの向ふの西山は
 オーイオーイと日暮てく
 山から山へ虹の橋
 たれがあがるか高い橋



村の子守や子供たち
 赤いぞんぞはいてながめてる

赤いとんぼよ (推 磨)

大阪 宏

文

赤いとんぼよ
 なぜ／＼赤い
 紅屋の紅壺
 はまつたの

おしやれとんぼよ

なぜ／＼赤い

赤い夕陽でそまつたの

まつかなの

草 夕 顔 (推 磨)

東京 河邊 すみ子

草夕顔が
 脊のびした
 垣根の上まで
 脊のびした

草夕顔は

脊のびして

誰れか来るかと

のぞいてる

赤いとんぼよ
 なぜ／＼赤い
 生れた時から





空の御殿

霜田史光
川上四郎 畫

三八
何かしら濱の方でがや／＼と騒
騒しい人聲がしますので、澄子は
讀みかけの「金の星」を下に置いて
傍に縫物をしてゐる母さまに向つ
て云ひました。
「母さま、何んでせう。大分濱の
方で人聲がするやうですわ。」
「さうねえ、お前行つて御覽。」
と云ふ母さまの言葉を待ち兼ね
たやうに、澄子は、
「では、すぐに歸つて來ますから
ね。」と云ふ聲もそこ／＼濱の方へ
駆け出して行きました。
此處は日本海の前にした越後の
海岸で、澄子は父母と一緒につい
近頃東京から越して來たばかりだ
つたのです。澄子は賑かな都から

急に田舎に來たのですから、寂しくなりませんで
したけれども、生れ付き海が大好きでしたから、一
日の中でも程度となく海へ出て見ると、青々とした
海原に大波小波の寄せては返す景色を見て、獨り暗
暗とした心持になつて、そればかりを楽しみとして
ゐるのでした。

澄子が急いで濱へ出て見ますと、濱には村の人達
や子供などがもう一杯集つてゐました。そして何か
しら空の方を指してがや／＼と話をしてゐます。

澄子は呼吸せき切つて駆けつけて、漁師の小父さ
んに訊ねて見ました。

「小父さん、何か變つた事があるのですか。」

「おや、澄子さんかね、あれを御覽なさい。空に御
殿のやうなものが見えますア。皆であれは多分龍宮
が天氣の加減で空に映つてゐるのだらうと云つてゐ
た所ですよ。」

と云つて漁師の小父さんの指す空の方を見ますと

成程青い海の上の空が、霞のやうに少しぼつとなつ
た所に、うつすらと御殿のやうな街のやうなものが
見えました。澄子は、何んと云ふ不思議なものであ
らうと、暫らくは愕いて見てゐましたが、ふと氣が
ついて人達の話す話を聞いて見ると、次のやうな
ことを云つてゐるのでした。

「何んにしても珍らしいことだ。空に御殿が見える
なんて、本當に龍宮が空に映つてゐるのだらうか。」

「訖度さうだよ、あんな立派な御殿がどこにだつて
あるものかね。」

「私はこれで生れてから三度見た。然し今度のが一
番はつきりしてゐるし、その上何んとなく立派なや
うだ。」

「何んでもあの空の御殿は幸せの御殿だと云ふこと
だよ、あの御殿へ行けば心配事や苦しい事もないし
病氣も不幸もないのださうだよ。」

「それは本當かね、私も行きたくなつたなア。」

「所がお前のやうな心の悪い者には行かれないよ。あの御殿へ行かれる者は心の清い真心のあるものだけださうだよ。」

その時また別な聲が横槍を入れました。

「嘘だ、そんな事は空嘘だ。あれは屋敷と云つて天氣の加減で陸地の街が映るんだ。幸せの御殿だなんていゝ加減なことを云つて人を瞞してはいけなうよ。」

「あなたは学校の先生だね、学校の先生は今の學問の事ばかり信じてゐるから駄目だ。この世の中には學問ではわからない種々な不思議なことがあるのを知らないのだ。確かにあれは幸せの御殿に違ひない。何しろ先祖様から云ひ傳へて來たことだからね。」
澄子はそんな話を脇で聞いてゐると、どちらが本當だかよくは解りませんでした。若し幸せの御殿だとしたなら、自分も行つて見たいものだと思ひました。

そのうちに日が暮れかかつて御殿の姿も消えてしまひましたので、人々は皆その家へと歸つて行きました。

やがて海の向ふへ真赤な夕日が沈む頃、海はまるで血を流したやうに赤く染まりました。その綺麗なことは澄子が今迄鎌倉や大磯で見てゐた太平洋の海の遠く及ぶ所でない、つく／＼思ひました。

澄子は思はず長居をしてしまつたので、早く歸つて母さまに今日の不思議なことをお話ししようと、夕日に追はれて波の砂の上に長い影を曳きながら家へ歸つて行きました。家には母さまが澄子の歸るのを待つてゐました。其處で澄子は濱で見た珍しい話をして、そして人々の話してゐたことまで話してから、

「ねえ、母さま、本當に幸せの御殿なのでせうか。」と訊ねました。
「母さんはよく知らないけれど、さうかも知れない

ね、この世の中にはさうした御殿はないから、空の方にもあるかも知れませんが。」と母さまの云ふのを聞いて澄子は曇みかけるやうに、

「そして心の清い真心のある人はあそこへ行かれるんですつて話してゐましたが、それも本當でせうか。」
「その御殿が本當に幸せの御殿なら、その事も多分本當でせうよ。」と云つて母さまは急に思ひついたらしく、机の上の聖書を取り上げて、

「澄子さん、聖書の中にはかういふことが書いてありますよ、心の清き者は幸なり、その人は神を見ることを得なければなり」つてね、ですから心の清い真心のある人は幸せの御殿へも行かれるでせうよ。」

澄子はそれを聞いて幸せの御殿のことを本當だと思ひました。そして自分もどうかして心を清くして真心を持ち、あの御殿へ行つて見たいものだと思つたのであります。

「母さま、心の清い、真心のある人間になるのは、

どうしたらいいの」と澄子はまた訊ねました。

「それには何よりも神様を信じてお祈りするが一番いいのですよ。」と母様はしみ／＼と申されました。

それからの澄子は一生懸命になつて朝夕神様にお祈りをいたしました。

「神様、どうぞ私を心の清い真心のある人間にして下さい。そして幸せの御殿へ一度でも宜しうございませうからやつて下さいませ。」

澄子のかうしたお祈りの言葉を聴いて母さまは、
「お前はいま不幸でもないのにどうしてそんなに幸せの御殿に行つて見たいのですか。」と訊ねました。

その時澄子は、
「でも私はもつと幸せになりたいのですもの。そして母さまも父さまも皆んなでもつと／＼幸せになりたいのですもの。」と申しました。それを聴いて母さまも成程と思つたのでせうか、その儘黙つてしまひました。



空の御殿を一度見てから、澄子は毎日のやうに濱へ出て見ましたけれども、中々二度と見ることは出来ませんでした。けれどもどうかして幸せの御殿へ行つて見たいものだと思ふ考へは日に日につものつて今では夢にまで見るやうになりました。

或夜のこと、澄子は夢の中で、海岸の崖の上に立つてゐました。その時空にはあり／＼と幸せの御殿が映つて見えました。そしてその黄金で輝いた門からは美しい女王様が出て来て、澄子を手招きしてゐるやうに思はれましたので、澄子はたうとう我慢が出来ないで、その御殿を目がけて崖の上から飛びました。すると、不思議にも羽が生えた様に澄子の體は幸せの御殿に着いたのであります。やれ嬉しやと思つた時に、惜しい所で其夢は破れてしまひました。その翌日のことです。濱へ出て見ますと、先日のやうな霞がかゝつたやうな空合になつて、やがてぼんやりと幸せの御殿が空の方に見ええました。澄子の

心はどんなに躍つたことせう。若しも自分が行かれるならば、あの城へ行つて父さまや母さまの幸せも女王様にも願ひして來たいなぞと、獨りで考へながら、空の向ふに見える幸せの御殿を眺め眺めして濱を歩いてゐますと、いつの間にか澄子は海を見下す崖の上に立つてゐました。ふと氣が付いて見るとそれは昨夜夢の中で見た崖とそっくり同じでしたから、そのあまりに不思議なことに澄子は驚いてしまひました。これは屹度あの御殿で女王様が私を招いて下さるに相違ない、この崖が昨夜の夢で見たものと同じなら、今が此處から飛ばば昨夜の夢のやうに幸せの御殿に行くことが出来るだらう、と思つた澄子は、決心して心の中で「父さま母さま、私は一寸の間幸せの御殿に行つて参ります。」と獨り言を言つて

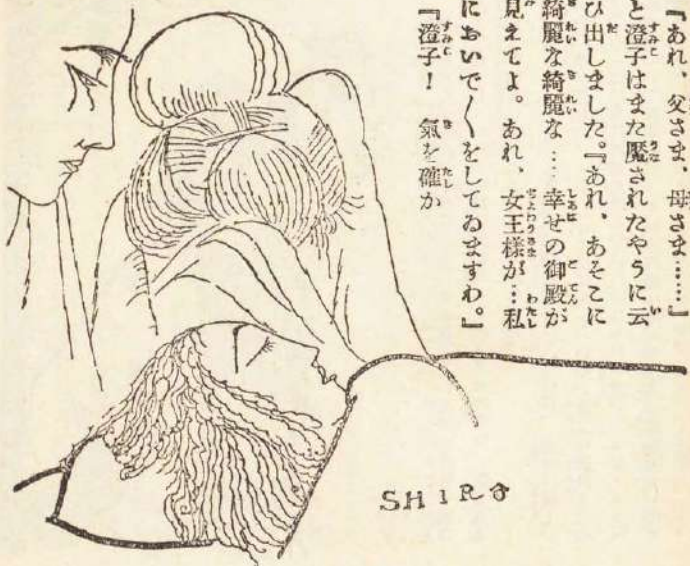
その崖の上から御殿の方を目がけてはつと飛びました。
澄子は果して幸せの御殿に着くことが出来ました
でせうか。

あゝ、可哀さうに、それは駄目だったのです。
暫らくして波打際に倒れてゐた澄子は漁師に見
られてその家に擔ぎ込まれました。澄子は岩に體を打
ち當てたと見えて大怪我をしてゐました。そして
虫の息だったのです。

それを見た澄子の母さまも父さまもどんなに驚き
どんなに嘆いたこととせう。早速お醫者を招んで來
て手厚い介抱をいたしました。澄子の挫けた手や足
をさすりながら、母さまは嘆いて云ひました。

「昨夜の夢のことを今朝お前は話して呉れたが、た
うとう昨夜の夢のとほりに崖の上から飛んだのだね
然しまあ何んと云ふ情ないことになつてしまつたの
とせう。幸せの御殿は矢張りなかつたのですね、そ

「あれ、父さま、母さま……」
と澄子はまた魔されたやうに云
ひ出しました。「あれ、あそこ
綺麗な綺麗な……幸せの御殿が
見えてよ。あれ、女王様が……私
においで〜をしてゐますわ。」
「澄子！ 氣を確か



れを私があるのかも知れないと云つた爲めに、こん
なことになつてしまひました。あゝ母さんが悪かつ
たのです。澄子さん許して下さいよ。」

母さまはさう云つて泣きました。澄子の父さまは
「だから私は幸せの御殿なんてこの世にあるものぢ
やないと始終云つてゐたではないか。あれは盛氣樓
と云ふものだ、それがあるかのやうに澄子に信じさ
せたのはお前が悪いからだ。」と母さまを叱りました
すると母さまは益々悲しくなつて、

「赦して下さい、赦して下さい。」と澄子の手にすが
つて泣くのでした。

澄子は虫の息でぼんやりとそれを聞いてゐましたが
「母さん、幸せの御殿は……矢つ張り……本當にあ
るのですよ……」と切れ切れに申しました。その聲
はもう力のない、如何にも苦しうな細い聲でした。

「澄子、しつかりおし、屹度治るからね。」と父さま
は傍から澄子に元氣をつけました。

「何も見えはしないよ。」

「嘘よ、嘘よ、私にははつきり見えますわ。あれ、
あんなに黄金で光つた御門、まア女王様のお着物の
立派なこと……あら、また女王様は私においで〜
をしてゐますわ、父さま、母さま……私幸せの御殿
へ行つて來ますわ。」澄子の聲はもう細くなつて虫
の鳴く聲のやうでした。さう云つたと思ふと可哀さ
うに、澄子はたうとう死んでしまつたのでした。

母さまはもう嘆く言葉も出ないので、黙つたまゝ
はら〜と涙を流して兩手を合せてゐました。

生きて行かれなかつた澄子は、死んで幸せの御殿
に行くことが出来たでせうか。

澄子が幸せの御殿へ行つたなどとは誰一人信する
ものもありません。けれどもそれは生き残つたこの
世の人が考へることですから、本當に澄子が幸せの
御殿へ行つたか行かないかは、澄子自身より外には
誰にも判らう筈がないのであります。(をはり)



鍛冶屋の子

(伊太利英雄ムツリニの生ひ立ち)

三井信衛

寺田眞作畫

僕等と共に同じ今の時代に生き、その勇ましい名譽を世界の涙の涙まで轟かし、つある鐵腕の大宰相ムツリニの名を、親愛なる少年少女諸君は知つてゐられるであらうか。
ムツリニ 其名が諸君の耳に入るには、余りに新しい人物に違ひはない。しかし今の世に生き、いや、第二の國民となつて、海に陸に空に雄飛活躍しなければならぬ諸君が、ムツリニを知らないでは恥辱だ。それは汽船に乗りながら、海を見ないのと同じことである。

ムツリニこそ、遠い羅馬の時代に鎧と剣とを振つて戦つた大英雄のシーザーにも、十九世紀の天地を震動したナポレオンにも費へればならぬ現代の英雄である。
しかも、彼は今、僕等と共に、同じこの空気を吸つて、伊太利の一角に生きてゐるのである。その英雄の逞しい、愛國の血の熱く通つた大きな手を、握手しようと思へば、力一杯握手することも亦出来るのだ。
今や彼は、伊太利の國柱とも云ふべき、絶大の偉力を凝つた大宰相

相である。しかし今から三十余年以前、彼は伊太利の東海岸、フォゥリ縣のプレッタビオといふ村にある小さな鍛冶屋の息子であつた。

一 小さい鍛冶工

ちいん！ かあん！
ちいん、からあん！
兩足を、根の絡り上つた松の樹のやうに、八の字にふんばり、兩手の指でも廻し切れない程太つた二つの腕を、癩のやうに細かく膨らせながら、全裸になつた父のアレッササンドロは、大きな鐵の槌を、天井に着く程振上げ、溶岩のやうに眞鍮に溶けた鐵塊の上を目がけて、クルリと廻しては「ヤッー！ トン、と打つてゐます。
螢のやうな碧い輝、鱗の様な金色の飛沫が、バチ、バチバチと音を立てながら四方に飛びます。
『これや、ベニトオ！ 何をしてゐやがるんだ。何處へ行つた。』
槌を熔爐の縁に立て、くるりと後を振向いた父の半身は、
ゾオ、ゾオウ、と音を立て、思ひ出したやうに燃え上る幽藍のやうな鐵の火に、直背に、眞赤に、地獄繪のやうに浮

ぶのでした。
『こゝにゐるよ、お父つあん、水を飲みに行つてたんだ。』
階段の横の濡り戸を開けて、父の側に向け寄つたベニトオは、熔爐の側にあつたもう一つの槌を手にとつて、振り上げて見つけたけれど、魅のやうに疲れて、思はずフラ、フラと、槌の方から前にのめりました。
と、さう氣がついて「これではならぬ」と兩手と體を踏はつて見たが、その時はもう遅く、槌はあらゆる爐邊の外へ、力一杯打ちのめしてゐました。
『何て態だ！』
言つて、父はベニトオの方を、大きな下顎を引くやうにして睨みました。
しかしベニトオは、人一倍大きな目に、ほんの、ほんの有るか無しかの涙を浮べて、右の手で頬を確と抑へてゐました。
父の叫ぶ前、もう父の平手は、頬に飛んでゐたのです。
幸か不幸か、ベニトオ。ムツリニは、嚴しい『スバルタ人』のやうな父と、地獄のやうな熔鐵爐とを、生れながら持つてゐたのでした。
彼の家は淋しい村の鍛冶屋でした。幼い彼の夢を醒すもの

は、赤ん坊の時分から、決して森に轉る小鳥の聲や、母の唄聲ではありません。とんでん、かん、騒しい槌の響と、暴風雨のやうな轟の音でした。

小さい、小さい時から、彼は父から、撲つて育てられました。さうして飽くまで、人に負けてはなるものかと云ふ、依固地と見える程の強い信念の持主となりました。

父の商賣は鍛冶屋でしたが、母はロオザと言つて、一階の一室を教室にし、村の少年少女達を集めて、毎日鞭を振りく教へる事を樂みにしてゐました。

ですから、村の人達から、大變崇められてゐました。けれども父は、毎も母や村の人達に向つて、

『お前は、獅子が自分の子を、どう云ふ風にして育てるか、知つてゐるかね？ 獅子は自分の子が生れて三日目に、高い崖の上から谷底へ突き落すのだ。そして自分の子の膽力を鍛へるのだ。俺は、彼奴（ベニトオ）をさう云ふ風に育てるつもりだ。』

と言つてをりました。

ベニトオには、アナルドオと云ふ弟が一人ありました。二人が喧嘩をすると、父は何方かに勝負がつくまで、喧嘩を

したいと望んでゐたのでせうか。

父は貧乏な人たちに心から同情してゐました。

多くの勞働者は皆、貧乏で困つてゐました。

働いても、働いても、いつまでも勞働者は貧しいのです。財産のない者は、幾ら正直にしても、幾ら骨身を惜まず働いても、いつまでも貧乏です。用がなくなると乞食のやうに、工場から追ひ出されてしまふのです。さうして、自分で働いて得たお金ではなくても、たゞ、たゞさんのお金のある人は、貧しい人たちが奴隷か豚のやうに追ひ使ひました。お金はなくとも、働かさへすれば幸福に過せるやうな世の中にした。——それが父の一生を貫いた望みでした。ベニトオを、その望みのために働く、意志の強い、嵐にも雨にも何んな武器にも、びくともしない人間にしたかつたのでした。

二 負 け 魂

今日は、海のやうな、紺碧の空が、プレッタビオの村を、すつかり包んでゐました。あんまり空が晴れ渡つて碧いので遠くに見える家と空が、一つに喰附いた繪のやうに見えました。

中途で止めさせませんでした。力が出なくなつて、槌を落したりすると、すぐに、父の堅い髭の皮のやうな手が、ベニトオの頬を打ちました。蹄場の人魂のやうな火の塊に、もし怖氣がついて顔を反けたりなぞしたなら、反けると同時に彼の顔には、火の塊よりもつと痛い父の掌が飛んでゐました。

『そんなにあの子を、叩いたりなんかならなくとも、言つて聞せばわかるぢやありませんか。』

見るに見かねて或日蹄場で、母のロオザはさう父に言ひました。

『いや、いや。』

父はしかしさう答へて、千切れるほど首を振りました。

『世間の奴は子供の育て方を、みんな間違つてゐる。世間の奴の育て方は、平々凡々とした人間を拵へるためだ。俺は彼奴を月給取や只の役人で、一生を終らせたくないのだ。それには特別の育て方が必要だ。世間に出て、人から撲られないやうにするには、小さい時分から親が代つて撲つてやるに越したことはない。』

さう云ふ父のアレッサンドロは、ベニトオを何んな人間に

空が餘りに碧かつた爲めか、ゆつたりと垂れた方々の葡萄の果も、やつぱり碧く見えました。

恰度さういふ晴々とした日に適しいやうな一人の旅商人が車を引いて村に歩いて來ました。

車の上に積んでゐるのは、珍しい穀打の機械で、一方から麥を入れ、一方でクル、クルと把手を廻すと、端の方から、先に入れた麥が粒になつて出て來る。恰度今はこの邊りが麥の收穫をしてゐるので、さう云ふ機械を賣りに來たのでした。村の若い百姓も、百姓のおかみさんも、藍色や桃色の頬冠りをして、彼處此方から、その珍しい穀打機械を觀ようとして寄り集つて來ました。

クク、ククウ、と言ふやうな、家鴨の啼聲のやうな響を出して、把手が二三遍廻ると、雲が家の底を蔽くやうな音を立て、恰で生きた卵のやうに、粒が撥ね返つて落ちて來ました。その底に大勢の人が、手を敲いてゐます。大きな目を、把手の廻るにつれ、同じやうにクリ、クリ動かしながら、見物の一番前に立つて、ベニトオも眺めてゐました。

『ベニトオ！』と言つて、やつと後から呼んだ者がありまし

た。背仲をして振向くと、それは彼より四つも歳上の少年で

した。

『何だい？』

ベニトオは答へました。

『そんな物を見てないで何か面白い事をして遊ばないか？』

『あゝ、遊ばう。』

ベニトオが人浪を押分けて、その少年の處へ行くなり、目

にも止らない程の速さで、少年はベニトオの横面を、撲りつ

けたのです。

『な、なにをする？』

言ふ暇もなく、ベニトオは二つの眼が、一尺先に飛んだか

と思はれる程、痛さを感じて顔を蔽ひました。その際に先の

少年は、人浪を押分け、先刻ベニトオの立つてゐた、一番い

い場所で、何咄はぬ顔をして殺打機を觀て居るのでした。

さすがのベニトオも呆氣に奪られました。口惜し涙は、出

すまいと何んなに焦つても、汗のやうに彼の頬べたを傳つて

來しました。然しベニトオは唯つた十七で、相手は四つも歳上

で、それに力が強いのです。どうする術もなく、彼は左手を

ズボンの衣兜に、握むやうに入れ、右の手で時々、溢れる涙

を叩くやうに拂ひながら、家へ小走りに歸りました。

『何で態だい！』

言つて、又もや平手で、赤く腫れたベニトオの頬を、も一

つその上に、『ビヤリ』撲りつけたのでした。

『あッ、お父さん……』

彼は踏きました。

『喧嘩に敗けて來やがつたな？ 馬鹿奴、さあ行つて勝つて

來い。今度泣いて歸つたら家へは入れてやらないぞ。もう一

度行つて來い。』勝つて歸らなければ容赦をしない、さう言ふ

やうに、父はまだ手を振上げてゐる態でした。

バラ、バラ、音のする程滾れる涙の中に、ベニトオは齒を

喰ひしぱり、仕事場の隅に轉つてゐた石塊を拾ひ、荒砥石で

それを削り出しました。瞬く中に石の尖は、手裏劍のやうに

鋭りました。彼はそれを逆手に挿んで、衣兜の中に隠し、村

の家並を幾つか曲るのもどかしさうに、一つ處を隠めたま

ま、前屈みに駆け續けて行きました。いつか先刻の旅商人は

クウ、クウと把手の音をさせ、車を曳きくもう村の餘程中

へ入つて來てゐました。側には歳上のあの少年が、未だ齒か

ずには口を開いて見てゐるのです。ベニト

オは、後から廻つて、

『先刻は何をしやがつた！』

と叫びました。少年が此方に向くなり、ベニトオの衣兜か

ら、鋭つた三角形の石が猛獸の牙のやうに飛び出しました。

土を蹴つて飛びついたベニトオは、相手の少年の肩間の邊り

に、石を打ちつけました。少年は肩間を押へて、弓狀に後へ

下り、そしてその儘向を變へて、幾度も後を振り返り、村

の外へ遁れて行きました。

『勝つて來たよ、お父さん！』

ベニトオは少年の落して行つた血の滴を踏みながら、さう

言つて、糶場に戻つて來ました。

振り返つた父の、火に爛つた横顔は、先刻とは別の人かと

疑はれる程、得も言へない笑ひが、一杯に張り詰めて、恰で

顔の皮が裂けてしまひさうに見えてゐるのです。

三 大膽な計劃

さう言ふ父に、大きくして貰つたベニトオですから、彼の



身體の何んな處を叩いても、カンと音がするやうな、恰で鐵でも着けてゐる程の頑丈な身體となりました。さうして、人に負けると云ふ事が、何よりも彼よりも嫌ひになりました。

ベニトオが二十歳になる一寸前、家は鍛冶屋の外に、宿屋も營むやうになりました。そこへは重に、貧乏な労働者が泊りました。父は労働者に、心から同情してゐました。若しお客様が一時に二人も三人も来て、もう泊る部屋がないと、父はいつも、その中の労働者だけを泊めてやつて、お金のある人は、もつといゝ宿屋に行つてお泊りなさいと言ひました。若し貧乏な家のない人がやつて来ると、父はその人を毎も無代で泊めました。

日が暮れると、ムツソリーニの家には、村の働き手が、次に遊びに来て、晝間の『テン、カン、テンカン』の音が、夜は津浪のやうな哄笑の聲に變りました。然し、ベニトオはその人達の集りに出て、話したり笑つたりしてゐる中に、労働者の多くが、どんなに貧乏で困つてゐるか。何んなに雇主が、同情もなく遇つてゐるか。しみ／＼それを知らねばなりませんでした。



小學校を卒業したベニトオ・ムツソリーニは、十八の時まで、母のすゝめで、師範學校に通つてをりました。そして彼は、外の村へ出て、その村の學校の先生となりました。けれどもムツソリーニは、何うしても外國へ行つて、勉強したくでなりませんでした。と言つても、家は貧乏だし、給料は少し、どうする事も出来ないのです。彼はそこで、内職をしたり、三度の食事を二度にしたり、態々の儉約をして、漸つと旅費は貯りました。ムツソリーニが、外國行の話をすると、何事も子の自由を尊び、孤立奮闘を主義としてゐた父のアレッサンドロは、立所にそれを許しました。しかし父は、ベニトオに旅費があるのか、又何處へ行くのか、何年居るつもりなのか、そんな事は何一つも訊かなかつたのです。偉大な、豪膽な、荒獅子のやうな性質を持つた父は、常に言つてゐたやうに、獅子がその子を深い谷底に落して、身を鍛へさせると少しも遠ひなく、我が子を遠い他國へ突つ放すやうに出したのです。

『行つて來ますよ。』

『あゝ。行つて來るがよい。』

トンカン、トンカン、くるり廻して、又トンカンと打つ。

父は鐵槌の振り下しを、少しも想めようとせず、ベニトオの方さへ見向きもしないで、ほんの二哩か三哩の隣り村へ行くやうに、

『行つておいで』と、造作なく答へるのです。

種々の音は、次第に遠くなつて、立停つて耳を停けて見ても、秋の夕に蚯蚓が鳴く程に、ほんの時偶、チ、テッチとしか聞えて來ません。

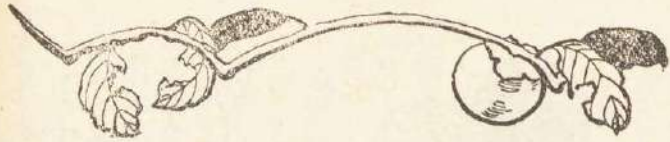
遠がにムツソリーニの、人より大きな二つの眼も、誰より厚い二つの唇にも、温んだものが見えました。

彼は走るやうに、村を出たのです。だが、何處へ行かうと云ふのでせう。彼は獨逸へ行きたかつた。佛蘭西へも、西班牙、和蘭へも……

けれどムツソリーニは、伊太利と瑞西との國境へ出る程の旅費しかないのです。

そこから向方は、この鐵のやうな體一つを資本に働かながら行かう。

それが彼の大膽な、方向見ずな、桶ろしい力と決心なのです。



童 心 句

野口雨情選
林 晋 雨
○あたいだよ あたいが大将になるんだよ
評、ヤンケンゴンできめようヨ。

東京 猪 股 夏 雄
大馬が蠅一匹に困つてゐる

東京 増 盛 梅 吉
うら山でからすないたら日が暮れた

福 島 瀬 賀 太 郎
○雪ふつて赤いポストも白くなる
評、ポスト「白いマントを着たんだよ。」

東京 永 井 重 雄
水たまりあら〜雲が走つてく

宮 城 清 水 は つ
火をたいて始めて盆の気分かな

千 葉 大 川 政 雄
ほうたるのまねして星がとんで見た

東京 一の瀬ゆきみつ

○補苻棚月がひとりでのつて居る
評、補苻の書をしてるのよ。

東京 吐 詩 雄 作
傘さしたお月さん空は雨ですか

東京 宮 内 清 二
行つて見なひよこが三匹うまれたよ

岡 山 永 瀧 政 子
漁師の子かめをとらへて龍宮へ

神奈川 新倉しげる
夕焼が馬のお目目にうつゝてる

東京 上 田 弘 一
噴水や風に吹かれて花が咲く

福 岡 今 井 秀 子
桐の葉が交番の前に落ちてゐた

京 都 三 上 良 夫
○野の蔭で鎌を砥いでる三日月さん
評、きつと芒を刈るのだから。

秋 田 兒 玉 新 一
こうさがわるい葉食べて死んじやつた



長 野 三 津 正 二
煙突のけむり長々雨の空

埼 玉 高 野 房 一
池の中大きな顔が笑つてた

山 梨 村 田 春 雄
○お月さんお家は圓いお窓だね
評、月「なんでも窓から見えてゐるよ。」

神奈川 中 里 素 行
影法師お日様ないときやどうしてる

兵 庫 大 島 知 恵 子
○たゞ一つ飛行機のゆく高い空
評、素直な機能的童心句です。

東京 小 林 一 路
ゆり折りに今日もみんなでいつたのサ

福 島 新 國 勝
小うさぎはカチ〜山を思ひ出す

東京 河 邊 す み 子
白い月夜明けの空にのこつてる



兵 庫 本 山 な ぎ さ
お月さんをお池のふんすい洗つてる

東 京 田 中 平 作
赤蜻蛉とまりそねしとせ哉

山 梨 中 山 俊
寫生する小供や熱き石の上

東 京 矢 作 八 重 子
○秋風が木の葉を黄色く染めていつた
評、一枚々々染めてゐた。

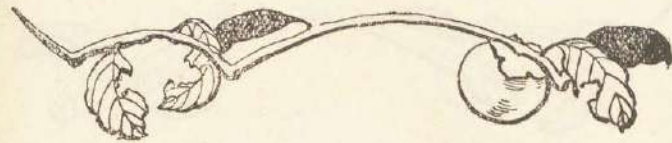
福 島 大 内 憲 二
朝顔のつぼみで何か書きたいな

大 阪 笠 井 正 己
池の鯉びんとはね飛ぶ雨上り

群 馬 音 柳 花 明
○雨蛙よくもふくれる唄ぶくろ
評、雨蛙「このどにとつさり唄がためであ
るんだよ。」

京 都 松 田 宵 明
鼻が目をさましたよ月が出た





新潟 間宮勝三郎

朝早く雀の學校始まつた
新潟 小林 秀雄

夕風やとんほと一しよに吹いて来た
名古屋 鳥本 夫二

○鈴虫が鈴を鳴らして子に聞かす
評、鈴の振り方上手になれ〜
京都 若山 泰

手毬ころ、ころころころころころころ
秋田 春日伊紀子

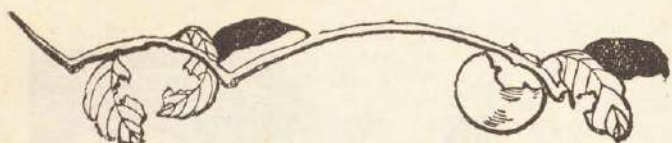
秋の風ふくや八月の末さびし
東京 中村 武男

瓜鈴さん夢がさめたか鳴りだした
埼玉 逸見 子鳩

青草で眠つたとうがん高いびき
秋田 今野 鐵雄

暑い日に動かぬ水が光つてる
東京 山本 鈴吉

五六
茨城 内田みわ路
○むら雀紺のやうに飛びたつた
評、雀の航空分列式。
神奈川 池田 又雄
にはのすみこうろぎの聲淋しそに
東京 河合英太郎
紅とんほ高く飛んでる秋の空
秋田 近藤恭太郎
○目をあけてそつと又ねる小猫かな
評、きつと夢のつづきを見てゐるのでせう。
東京 篠崎 雀聲
寒いのに今夜も夜廻り鼻さん
群馬 西澤 秀二
くものすに露の子供がやすんでる
兵庫 朝比奈 豊
○白雲がお山枕にねむつてる
評、白雲「ア、れむい〜」
福島 瀧田 望月
岩かけて小盤ブツ〜サイダのむ



東京 山田 三津夫
赤とんほ目玉クリ〜秋かなあ

東京 稻垣 秀坊
すいつちらが葉露をすつてすいつちらん

○雨降つてどぶがゴツクリ水飲んだ
評、うまいな、この調子、この調子。
東京 狩野忠信生

京都市 松尾 文雄
繩飛びをするに明るい月夜です

東京 土屋 寛
どつこいしよ陸へ上つた青蛙

○小さい子からだかくれる大日傘
評、ミニの子だけが當ててこらん。
東京 伊藤ゆかり

東京 板谷 令子
山登りあゝいよきもち雲の上

長野 和地きよ詩
星の子が水浴びて居る天の川

神奈川 幹 葉津子
いと細き莖にとんほのとまりける

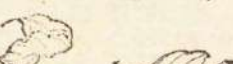
熊本 山村 カエ
いもの葉のつゆがキラ〜光る朝

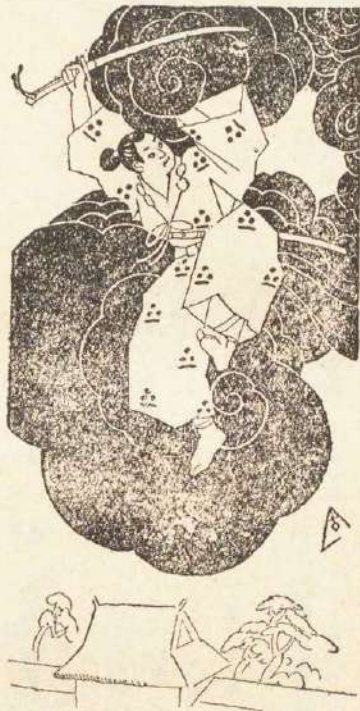
三重 紙 百合
兄さまに好きなお芋を送ります

秋田 梅田雄太郎
風鈴の中で風たち鬼ごっこ

東京 福田伊之吉
○お月様半分たれかにかじられた
評、半かけ月「ふくろの子供にかじられちゃった」
埼玉 岡田 落木
くつわ虫くつわがあるなら見せとくれ

五六
茨城 内田みわ路
まひるどきどんぐりころろ坂の道
茨城 内田みわ路
○蝶々が花のおつばいのんでる
評、ホントにおいしさうだな。
茨城 内田みわ路





頼光の四天王

(渡邊綱の失敗)

川崎春二

羽鳥古山畫

— (前號までの梗概は) 一三〇頁にあります

頼光が渡邊綱をはじめ四天王の人々を従へて、京都にのぼつて來てから間もない頃、都の内外には容易ならぬ騒ぎが持ちあがりました。

それは老若男女の區別なく、人間が何處へ行つてしまふのか、粉失してしまふといふ怪しい出來ごとなのでした。それも二人三人が見えなくなつたといふのではなく、一日おき二日おきには必と何處かの者が、消え失せてしまふことなのでした。

ある若者などは、友達と道を歩いてゐる間に、何時か姿が見えなくなつたとき死んだか生きたかわ

からぬといふし、ある老人は、また、便所へ這入つたさきりつひぞ出ては來ない。不思議に思つて中を見るところなくなつてをり、ある娘は、三四人の朋輩と話をしてゐながら、シャボン玉でも掻き消すやうに姿を消してしまつたと言ふのです。

「昨日は四條通りの紺屋のおかみさんが、魔ものにさらはれたといふのに、今日はまた向ふの辻の米屋の子供がさらはれたさうだ。」
「いよく物騒な世の中になつてしまつた——」

「頼光さまが、東國から歸つて來なされたといふに、これはまた何とつり合はない話ではないか。」
「一體、武勇のほまれの高い頼光

さまは、何をされてゐられるのだらう——」

「鬼神でも取りひしぐといふ、頼光さまの四天王たちは何うしてゐるのだらう——」

京の街の人々は、かうして何もの、仕業ともわからない怖ろしい出來事におびえ、頼りに思ふ頼光や四天王のめん／＼が、何うしたといふ噂も聞かないのを、もどかしくも腹立しくも思ふのでした。

このやうな噂を聞くといふことは、頼光や四天王をはじめ、源氏の家人たちにとつては、どんなに辛かつたかわかりませんでした。しかし、朝廷の守護を言ひつかつてゐる頼光は、御所の方に萬一ものことがあつてはならない上に

宮仕へをしてゐる高い位の役人達が、頼光を引きつけて置いて嚴重に守らせてゐるので、その噂の魔もの退治に向くことが出來ないのでした。

もはや京の内外、五里七里の場所では日が暮れてから出歩く者としては、人つ子一人なくなつてしまひました。——華やかなもの、美しいもの、賑やかなことを直に思出させる程であつた京の町の夜が今ではもうひつそり閑！として怪物の棲家のやうにさへ思はれる程になりました。

二

京の町は日毎に淋れて行きました。

國々の剛勇の名ある武家たちは朝廷から呼びよせられて都に這入つて來ましたが、この怪しい人間の紛失は止みません。そればかりか、近ごろでは町人や百姓ばかりでなしに、藤原何某といふ公卿が見えなくなつたり、伴何某といふ役人の娘が失せてしまつたりしました。

頼光はいよ／＼我慢が出来なくなつて、

「——たとひ、源氏の一族郎黨の生命にかけても、必と怪物の正體をさぐり出して退治いたしますから、御所の守護をしばらくの間なりと、他の武將たちに代つていたさせ、私どもの一家一門を京の町町にお遣はし下さるやう……」と、

度々朝廷に願ひましたが、もうすつかり怖ぢ氣づいてゐる宮中の公卿達は許して呉れませんでした。

「其方たちが今御所の守護をとくやうなことがあつたら、怪物どもは忽ち宮中にまでその魔の手をのばすに相違あるまい。京の内外のことは、諸國の武士どもに任せて置いてよろしいから、其方は一族郎黨をつくして御所の守護を嚴重にいたせ——」とばかり申しました。

頼光も今はほと／＼困つてしまひました。そのまゝにして置いたのでは都の人々の迷惑は言ふまでもなく、いやしくも京都の守護職として人々の難儀を打棄て、あくといふのは、一つには自分の職務

をほんたうにつくさないことにもなり、一つには六孫王このかたの源氏の武名をけがすことにもなりません。

いろ／＼と考へた末、頼光はせめて渡邊綱だけでも、自分の名代として京の町へやつて、怪物の正體を見とけさせようと思ひ立ちました。

「——度々ご命令にそむいて願ひ申しあげて恐入りますが、私の郎黨の中渡邊綱だけなりと、御所の守りから離れることをお許しにあづかりたく存じます。綱は私の郎黨中、第一の剛の者であり、かつまた一番に心利きたるものにござります。私の名代として綱を夜の街に遣はしたと聞けば、京の人々

も幾分か心強く思ひませうし、京都の守護職としての私の任務も幾分か果せるといふことにもなりません。せめて、このことだけなりとお許しがいたゞければ甚だ仕合でござります。」

かうして條理をつくした頼光の願ひを、朝廷でも許さないといふ譯にはまゐりません。

「——その代り、御所の守りは一層注意していただきますやうに……」といふことで、やう／＼それだけは聞き届けられる事になりました。

三

頼光は非常に喜んで自分の陣屋に歸り、源五綱をよんで朝廷から許しのあつたことを語り、いろ／

ろと申しふくめました。

「予の名代としてまゐるのぢや。決して源氏の家人が行くなどと思ふな。予の名代と言へば京都の守護職であり、且つ源氏の大将であるから、自分自身を十分に重んじなくてはならない。大将の威嚴がそなはつてをれば、如何なる妖怪變化といへども害を加へることは出来ないものである。その方の譽れは、この頼光の譽れであり、源氏の譽れである。また、その方の耻辱は頼光の耻辱、源氏の耻辱である。予の佩刀をしばらく其方にあづける。予を守つたやうに、その方が佩せばまたその方を守つて呉れるであらう。心して、參るやう……」

頼光はかう言つて、日頃から自分が肌身はなさず佩してゐた源氏の寶刀「鬚切」といふ二尺七寸のわざものを源五に貸し與へたのでした。

「——かしこまりました。如何なる妖怪變化があらはれても、この寶刀が私の腰にあればすこしも怖れることはありません。たとへば天魔、鬼神にもせよ、出會ひ次第かならず、生捕つて御覽に入れませう。この源五が手にあまるやうでござりましたら、國中の武士の何人であつても生捕することはむづかしいでせうから、その時にはこの寶刀「鬚切」で斬り伏せてしまひます。何うぞ、お心やすく思召し下さるやう——」

源五綱は、頼母しい覺悟をもつて、主君の名代を引きさうけたのでした。

綱は夜になると、わざと二人だけ郎黨をしたがへたきりで、愛馬「月影」に打ちまたがつて、そつと京の街へ出て行きました。日が暮れてから、まだ何程も時がたつてゐないのに、京の街々では皆大戸を深くとざして、外を出る者として、一人もありません。方々の國々から、名の聞えた武士たちも随分召し集められてゐる筈であるのに、大勢で隊をくんでねり歩いてゐる武將の外、二人や三人で妖怪變化を待つといつたやうな者には、すこしも出會ふことが出来ませんでした。

——諸國の武家たちは、悪鬼をおそれてゐるのではあるまいか。合戦にも出るやうに、隊をくんで押し歩いてゐては妖怪變化に會ふことはなるまい——綱は、心の中であらう思ひながら、淋しい場所淋しい場所へと駒をうたせて行きました。

寺院の境内などに沿うた道とか神社の森かげの道とか、さうしたところを片つばしから歩きまはりましたけれども、何等あやしいものには出會ひませんでした。宵から夜更けまで、歩いて歩いてあるき通しましたが、渡邊綱の武勇におそれたか、佩した寶刀、「鬚切」をおそれたか、これはと思ふ物かげにさへ會ふことは出来ま

せんでした。

四

もう、夜も大分ふけてゐました。「あまり夜をふかしては、明日の晩、明後日の晩、いや、何時妖怪變化に會へるかわからぬ、その夜のためによろしくあるまい。今夜は、これくらゐで引きあげることにしたさう。」

綱がかう言へば、二人の郎黨は、「左様にござります。もはや、夜の明けけるの間もないやうでござります。」

「しかし、かうして夜通し淋しい場所を選びに選つて歩いて、何物にも會へないとなりますと、何だか物足りないやうな氣がいたし

ます——」

これを聞くと綱は、「お前たちは急に強くなつた様子ぢやな。先程までは、なかく、臆を

でした。

「渡邊の郎黨中から、選ばれて今夜のお供をいたす吾々を、臆を冷したなぞとは聞捨てなりませぬ。」

「これは成る程、拙者の言ひすぎとして取消しすることにいたす。」

それは恰度、一條堀川の辰橋を渡りきらうとしてゐる時でした。



冷してゐたやうであつたが——」と冗談を言つて「アハアハ、、、ハ」と、大口あいて笑ひました。これには、郎黨たちは大に不平

「ご主人と雖も、滅多に左様なことを申すものではござりませぬ。」綱はまた「アハアハ、、、」と、笑ひ出して、

「おや！」と、綱等主従は眼を見張りました。女は忽ち、近づいて來て馴々しく言葉をかけました。

「—どちらへ、いらつしやるお武家様でござりませう。妾は五條のほとりに住んでゐる者ですが、知合ひの處で夜を更かしてしまひました。淋しくてなりませぬ。すみませぬが、送つて下さる譯にはまゐりませぬか—」

「怪しい奴め！ 遁がすものか！ — 綱はかう思ひながらもやさしく、

「それはお氣の毒なこと、喜んでお送り申しませう— 拙者の馬に召されては如何です。」と言ひざまひらりとばかり飛び下りました。

「はい、有がたう存じます。」

女は、にこやかに禮を言ふのでした。

「さあ、どうぞお召し下され。—」

手をお貸し申しませう。」

綱はかう言ひながら、その女を馬に抱へあげてやる振りをして、「ぎゆうッ」と捕へて了ひました。

すると彼の美しい女は、急に恐ろしい鬼の姿とかはつて、

「ワッハッハッ、、、、、小猿な武士ぢや。吾らの行く場所は愛宕山だ。供をさせるぞ！」と、綱の鬘を冠の上からひんづとばかりひつ掴んで、宙にぶらさげ、ごおラッといふ風と一緒に空高く飛び出してしまひました。— その速さといつたら、二人の郎黨が太刀を抜くさへ間に合はない程でした。

綱はすこしもさわがず「鬘切」の柄を握りしめながら、斬るべき悪鬼の體の向きを考へました。し

かし、なか／＼どの邊に鬼の體があるのかわかりません。

仕方がないので、綱は覺悟をきめました。

綱は「うーん！」と呻りながら「鬘切」で抜打に悪鬼の腕を斬りはなしました。鬼は凄じい悲鳴をあげながら、そのまゝ、愛宕山の方に飛んで行き、綱はドツとばかり何處かの屋根の上に落ちました。そこは、北野神社の廻廊の上だったのでした。

悪鬼の片腕は、かうして綱の手に入りました。

五

「渡邊綱が鬼の腕をとつた！」といふ評判は忽ち都中にひるま



した。

頼光の喜びは、源五にもまして大そうなものでした。でも、悪鬼を片輪にしてしまつたのだから、今後のやうな災難を受けるかも知れないと心配して、播磨守阿部晴明といふ大陰陽師に下つて貰ひますと、

「悪鬼の手は七日間封じて齋みをし、仁王經を誦めば生きかへらなものである—」といふことなので、綱にその通りにするやう言付けました。

綱は自分の家にこもつて、鬼の腕を封じて毎日仁王經を誦んでをりました。

六日目の暮方のことでした。

綱の宿所を、トン／＼叩いてゐる者があります。

「たとひ、どなたが何用で來られようと明後日まで門は開けられませぬ。明後日おいで下され—」

しかし、門の外からは懐かしい叔母の清前の聲がするのでした。

「妾であるぞ！ そなたの手柄を祝ひにまゐりましたのぢや。」

「でも、只今はどなたにも會はぬことにしてをりますか—」

「それを知らないで參つたのではありませぬ。綱よ、妾はそなたの叔母とは言へ、親も同然なもので

はないか。決して、齋みの邪魔にはなりませんね——」

外ならぬ叔母の清前が、わざわざ渡邊の莊から出て来たと聞いては、孝心の深い綱には門をあけない譯にいきませんでした。

「まあ、何といふ、嬉しいことや！ そなたの武勇の名は今にはじまつたことではないが、今度といふ今度は大したものぢや。育ての親として、親身の叔母として、こんな嬉しいことはありません……」

「これも、みんな叔母上様のおかげでござります——」

「かうして、そなたのところに来て見ると、その鬼の手とやらを一目見たうなりました。見せては呉れませぬか——」

「これには源五も困りました。『さき程も申上げました通り、明後日までは封じて置かなくてはなりません。』

「おや、妾が見ても、いけませぬか——そなたと妾は成る程母子ではない。叔母でしかない。本當の母親であつたら、よもやそのやうなことは申すまいに……」

清前は、さめくと泣きじやくりをはじめました。源五は、途々ことはり切れなくなりました。

「叔母上様、どうぞ、お氣を直して下され。一目、ご覽に入れませう——」と、綱は唐櫃の封を破つて鬼の手を取り出し、清前に差し出した。

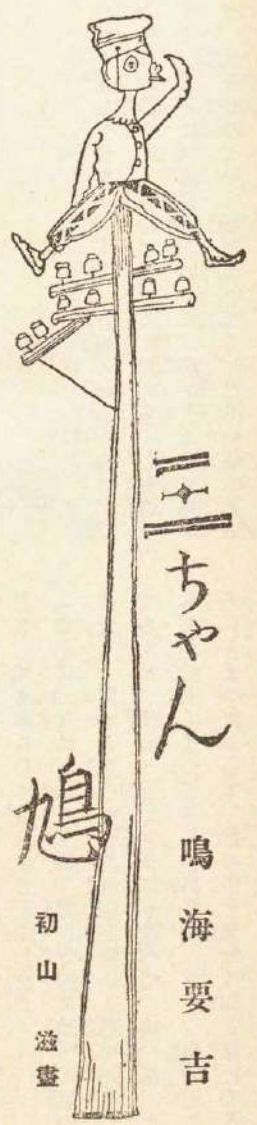
「おう、これは、怖いものぢや——珍しいものぢや——」

清前はしばらくは、ためつ、すかしつ、して眺めてゐましたが、

「妾の手に、よく似てゐるやうぢや——」と言ふかと思ふ間に、清前は急に先夜の悪鬼の姿と化り、腕を引つ掴んだまゝ、破風屋根を蹴破つて、すさまじい響きを殘して飛去つてしまひました。

「しまつた！」源五は、齒ぎしりかみましたが及びませんでした。けれども、この失敗は源五綱をますます有名にしました。——京の町に妖怪變化の噂がなくなつたのも、その時からのことでした。

(つづく)



三ちゃん鳩は、威張屋さんです。お母さん鳩に、「お前は三男鳩の三郎だから、そんな高いところへなどとやるものぢやありませんよ。」

と叱られても言ふことをきかないで、太郎ちゃん鳩や次郎ちゃん鳩の上のづつと高い屋根のてつぺんにとまります。

お詣りの、武夫さんだの、花ちゃんだのが撒いて呉れる豆も、他の鳩に意地悪をして、自分ばかり澤山たべます。

お母さん鳩やお父さん鳩が、

「此の子は、ほんとうに後でどうなるだらう。」

と、大層心配して居ります。三ちゃんは、それでも一向平氣で、わるいことばつかりしてゐます。

或日三ちゃんは、高いところから急に飛んできて、お父さん、母さん。宮の鳩はみんな馬鹿だなあ。たべものをたつぷり食べないものだから、羽もろくにのびないで、高いところなんか飛べやしない。低いところにはつかりゐるものだから、世の中のことをちつとも知りやしない。僕はねえ、今の世の中をす



つかり見ちやつたんですよ。宮鳩といふものは、豆をたど詣りから貰つてたべるんだから、乞食鳩ですよ。よそには傳書鳩といつて、高いところに棲んで、人を使つていゝ物を食べてる、えらい鳩もゐる

んだ。出世さへして歸れば父さん母さんも兄さん達も、喜ぶに違ひないし、宮鳩達に大威張りも出来るんだ。ゆるしを待たないで飛んで行つたつて構ふものか……」

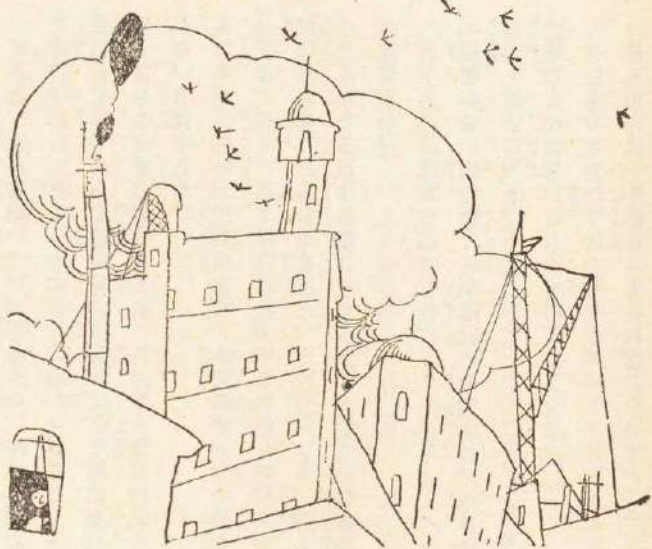
と考へて、三ちやん鳩は翌る朝早く起きて、お宮をあとにして、空高く、東京の町の方指して飛んで行きました。

空はよく晴れてゐました。どこもかもよく見えま

す。
「お宮鳩達は馬鹿だなあ。年がら年ぢう、お詣りの豆ばかりあてにして、お宮の近所にはかりゐて、こない、景色も見ないで、本當に氣の毒なものだなあ。」

と、三ちやんは心で思ひました。

段々東京の町の真中近くへ飛んできました。高い高い、大きい、綺麗な家はみんな三ちやんの眼の下に見えます。東京全體はまるで一目です。



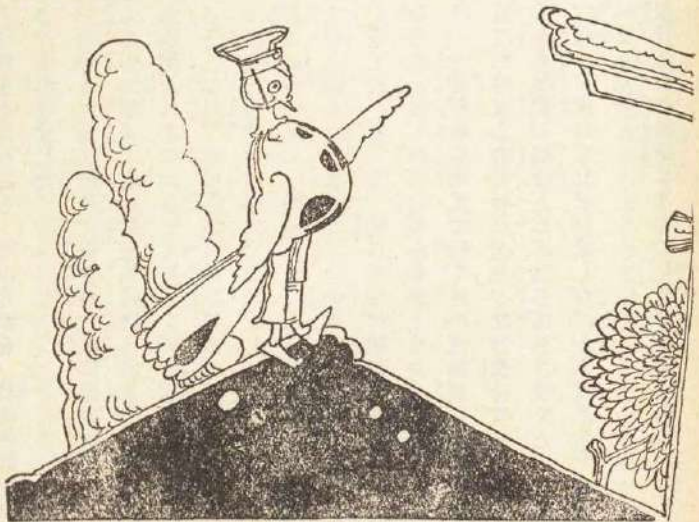
「それさうだらうけれども、その鳩などは生れが違ふのだから、お前など、今から真似してもダメだよ。宮鳩はやつぱり宮にゐて、お詣りの豆をいたゞいてたべてゐた方がいゝよ。」

と、父さん鳩、母さん鳩は口を揃へて、三ちやん鳩をいさめました。
三ちやんは、いろ／＼とわけを言つて、

「僕はどうしても傳書鳩になりたいから、暇をくだ

と、願ひましたけれども、父さん鳩、母さん鳩はどうしてもゆるして呉れませんでした。

「なかに、父さん母さんは、御自分等に比べて僕のこと、弱いと思つたり、智恵が無いと思つたりしてるんだ。僕は、豆をどつさり食べて、鳩一倍、からだか丈夫になつてるし、高く飛んだり、高いところにとまつたりして、世の中を充分に知り抜いてる



「ね、ね。然う意地悪を言はないで、僕をお仲間に入れて呉れたまへ。皆さんのお使ひでも何でもするから。食べ物も皆さんの物は食べないから。」

と、無理に頼んでみました。

傳書鳩等も氣の毒と思つたか、

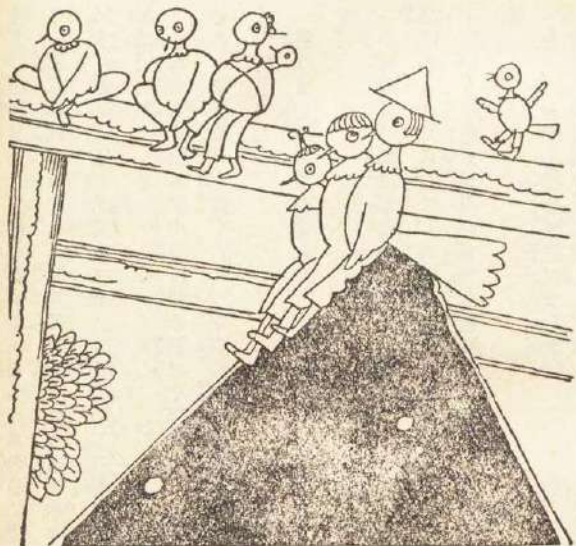
「そんなら邪魔にならないやうについて来たまへ。小父さんは何といふか知れないけれども。」

と三ちやんに申しました。小父さんといふのは、新聞社の傳書鳩を世話する人のことです。

三ちやんも、宮に居た時分のやうに威張る譯にゆきませんから、おとなしく、その傳書鳩の飛ぶ通りについてゆきました。

小父さんが鳩舎（鳩の小屋）に餌をやりに入つて見ますと、全く羽色の違つた宮鳩が、隅つこに小さくなつておましたから、

「ふん。この宮鳩は、迷ひ子になつて来たな。よしよし、傳書をためしに教へて見てやらう。こつち



「あゝ、僕もえらい鳩になつたな。東京の總大將になつたやうなものだ。うれしい、うれしい。」

と、三ちやんはまた思ひました。

すると、或る高い一つの屋根の上の、小さい綺麗な家の中から、何千とも知れない鳩が一時にぱつと飛出して来て、その邊の空の上を、大きく輪に飛び廻りました。その見事なこと、逆もお宮鳩には見られない有様でした。

「さうだ。あれが傳書鳩だな。本當にモダンで仕合せだな。僕も今にあゝなるんだ。うれしいな。一つ頼んでお仲間に入れて貰はう。……もしく、皆さん。みなさんは傳書鳩さんですか。どちらの傳書鳩さんですか。」

と三ちやんはたづねました。

「僕等かえ。僕等は×新聞社の傳書鳩さ。今日は運動してるんだよ。そして君はどこから来たんだえ。宮鳩なんか僕等にまじつたつてダメだよ。」

と三ちやんを相手にしません。

三ちやんは一生懸命にあとに追ひついて、

へきて餌をあたべ。」と、笑ひながら、親切に餌をたべさせて呉れました。

三ちやんはおかげで、毎日毎日他の傳書鳩等と、東京の町の真中の高い空を飛び廻つたり、おいしい餌を御馳走になつたりして楽しく暮らしてゐました。すると、或時、鳩の載る自動車に載せられて、遠い遠い田舎の海邊につれてゆかれました。

海邊についてから間もなく、三ちやんは、他の鳩三十羽ばかりと一緒に、脚に小さな真鍮の環をつけられました。そして、空に一廻に離されました。

三ちやんは、何が何だかわかりませんでしたけれども、一生懸命に飛んで行く他の傳書鳩と同じ方に飛んで行きました。けれども、まだ初めですから、三ちやんは他の鳩ほどはどうしてもうまくとべません。段々に遅れてしまひました。そこで三ちやんは考へました。

「僕はもう傳書鳩になつてしまつたんだから、こん

いで、えらい出世をしたと大層褒めました。

三ちやんは大得意になつて、いつものやうにお宮の屋根のつべんにとまり、お宮の鳩みんなに、傳書鳩の土産話——演説——をはじめました。

「諸君。諸君は丁度井戸の蛙も同じことです。世の中はまだ非常に広いものです。諸君はお詣りの坊ちやんや嬢ちやんをあてにして生きてゐるのは本當に氣が利かないことです。あの東京の真中に立つてゐる大きな新聞社の傳書鳩といふ鳩等を見たまへ。屋上に大きな家を立て、這入り、人間を使ひ、いゝ餌をたべ、旅行の時は自動車に乗るし、脚には環を箱めて、人間にも劣らぬ生活をしてゐるではありませんか。諸君は、一時も早く技を解散して傳書鳩になる考へはありませんか。僕は之から案内をしませう。若し諸君が嫌なら、僕は諸君と之から絶交します。」とやりました。お宮の鳩達は感心して手をばち／＼と叩きました。すると、さつきから、首を傾げて聴

な立派な脚環を箱められたんだ。お宮鳩なんかはこんなモダンな夢にも見たことが無いんだ。俺も出世したなあ。一生懸命にあとの傳書鳩について飛ぶのは馬鹿らしい。それより、ゆつくり飛んで宮へ歸つて、みんなを一つ驚かしてやらう。」と、斯う考へたのです。その脚の環は、モダンでも何でもなくて、お使ひの手紙なのを少しも知らないのです。

他の鳩が見えなくなつたのを幸ひに、自分の宮の方を指してどん／＼三ちやんは飛んでゆきました。

三ちやんはやう／＼自分の宮を見付けて飛んできました。そして、宮へ這入るなり、脚の環を「之見よ」と言はぬばかりに、何遍も何遍も、脚をのばして見たり、嘴で環のあたりを搔いてみたりしました。そして、大威張で宮のお庭の中を飛び廻りました。

お宮の鳩達は、三ちやんが、脚環を箱めてえらいモダンになつて歸つて来た大評判をしました。お宮の鳩も母さん鳩も見さん鳩達も少しも怒らな

いてゐた一羽の年寄鳩は、そこに進みで、

「ちよつと、三ちやんのモダン先生に伺ひますが、傳書鳩といふのは、手紙をお使ひするのだとかい

てゐましたが、三ちやんは何遍位お使ひをしましたか。」と、ききました。

「お使ひなんか、そんな卑しいことをするものか。いやしくも傳書鳩ともあらうものは、自動車に乗つて、脚環を箱めて……」

と、鼻うごめかしながら言ひました。

「その脚環についてゐるものはそれはお使ひの手紙ぢやありませんか。」と、年寄鳩がいひましたので、みんながその脚環をよく見ますと、成るほど、環のところこゝろに小さく紙を巻いたものものがついてゐます。そこで、みんなが氣がついて、くす／＼と笑ひました。三ちやんも、はじめて氣がつき、皆んなに耻はかしくなり、こそ／＼と宮の後の方からどつかへとんで行つてしまひました。

(をはり)



童謡

野口雨情選

(大人篇)

からすうり

小堀 義夫 (静岡)

青い提灯

からすうり

お春戸の竹やぶ

やぶすいめ

すいめの提灯

からすうり

ぶらりり

ぶらりりと
やぶの中
ゆらゆら揺れてる
からすうり

むちなな嫁入

村山俊太郎

むじなの嫁入

青い灯がとろり

二さをたんすは

お明でほろろ

嫁さんもみちを

頭にしてお

ほろろほろろと

お明で通つた

鳴いてるよ

和氣伊勢雄 (東京)

海にや
千鳥が鳴いてるよ
母さんこひしと
鳴いてるよ

山にや

阿呆鳥鳴いてるよ

お家忘れたと

鳴いてるよ

赤とんぼ

篠崎 雀聲 (東京)

紅がらとんぼ

赤とんぼ

よそ行き

べゝ着て

どこへ行く

紅がらとんぼ

七四

赤とんぼ
よそ行き
べゝ着て
あてかけだ

お背戸の夕やけ

大島知恵子

お背戸の夕やけ

まつかだぞ

ちぎれた雲が

もえて居る

お背戸の夕やけ

まつかだぞ

田圃

廣瀬 正 (茨城)

千萬とんぼが

親不知

茶木 七郎 (神奈川)

夜行列車は

富山行き

白くながれる

天の川

どつかあの邊

佐渡だろと

窓からのぞけば

親不知

波はドッドと

云つて居る

山道

武田 幸一 (福岡)

お馬が行きどす

山の道

七五

飛んで行く
風吹く
田圃
牛が啼く
牛はひかれて
歩いてる
ころころ
ならず
草のかげ
盡こほろぎは
ひとりだよ

日暮れの町

一の瀬ゆきみつ (東京)

山も寒い

町まで寒い

夜も寒いが

日暮れも寒い

赤まだら 青まだら

床屋の店よ

頭かへた

村の子が

とび出てさつさと

駆けてつた

「風も寒いが

頭も寒い」

さつさとさつさと

駆けてつた

寒夜

川口 茂一 (山口)

こん／＼小雪の

降る夜さは

兎も寒がる



淋しがる
さら／＼姿のふる夜さは
小馬も寒がる
ひもじがる

かた／＼雨戸の
鳴る夜さは
私も寂しゆうて眠られぬ

チラホラ桔梗が
咲いてます
すゝきのかげから
鈴虫は
お馬の鈴の音
きいてます
鈴の音しやんしやん
くだり坂
かつぼく／＼いそいで
行きました

半かけお月さん

林 宵雨 (東京)
半かけお月さん
草の上
ちらちら揺れ揺れ
夜が更ける

夜更にやお月さん
草の草の
甘いお露を
たんとなめる
なめればお月さん
まるくなる
半かけお月さん
まるくなる

お寺の晝時

賤機多味男 (静岡)
お寺の庭は
廣くつてサ
あつちでもこつちでも
蟬がなく
お寺の中は
うす暗くつてサ

初秋

鈴木 徹夫 (愛知)
ツクツクオーシの
聲きいな
あの聲
あの歌
秋がくる
ツクツクオーシの
なく柳
あの枝

七六
葉の色
秋がくる

よしきり
目良いさ緒 (千葉)

よしきり
キチヨ キチヨ
あしの葉ゆれる
川を
川船
走つてく
さーらり
あし原
風吹きやゆるる
水面を
水の輪
ゆーらりゆーらり

ころころ蛙

西東十四春 (佐賀)
下田 水田の
ころころ かはず
ころころ うがひ
なぜなぜ なざる
せりだ 馬ぜり
しらんで たべた
蓑 蟲
笠原 枡火 (東京)
蓑蟲蓑着て
ぶらぶらぶら

新倉しげる(神奈川)

田舎の小供は
麦粉うり
十二になれば
籠背負つてく
天氣に蓑着て
ぶらぶら
天氣に蓑着ちや
可笑しいな
なぜなぜ蓑着る
可笑しいな
蓑蟲小坊主に
聞いてみな
お頭を出したよ
聞いてみな
麦粉うり
新倉しげる(神奈川)
田舎の小供は
麦粉うり
十二になれば
籠背負つてく

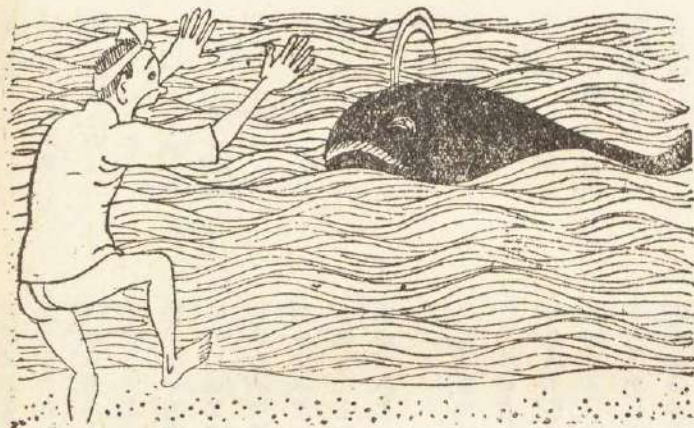
田舎の小供は
麦粉うり
姉様かぶりで
町に行くく



田舎の小供は
二人づれ
一つ日がさで

鳳仙花

上田 弘一 (東京)
ならんで咲いてる
鳳仙花
こゝは葉のかげ
花のそば
こゝを通るにや忍び足
かけたす子供は
まわつてきな
かけだしや
ばつちりこと
おどろいて
鳳仙花の子供が
とび出るよ
とび出るよ
七七



（薦 推） 鯨が來た
茶 木 七 郎

七八
嘉永六年にペルリが黒船を引いて來た久里濱へ、昭和二年七月十八日の夕方、鯨が九匹もやつて來て村の人を大騒がせに騒がしたお話です。

七月の太陽は何時もの様に久里濱の海を照らして居ました。が、だん／＼と光を弱めて西山に傾きかけた頃です。濱で網をつくらつて居た二三人の漁師が、沖の方から岸にむかつて九つの黒いものが矢の様に走ってくるのを見ました。近づいて來るのを見れば、それは船の様に大きな黒い九匹の鯨でした。

『鯨だ、大鯨だ、九匹。』

さあ、小さな久里濱の村は黒船の來た時の様なきわきです。なにしろ、こんな東京灣内の小さな村などに、鯨の來た事などは昔から一度もなかつたのです。ところが、突然鯨が九匹も現れ、おまけにそれが頭をならべて、岸にむかつてくるのですから、村人の驚ろきも騒ぎもむりはありませんでした。もう濱邊は、村中の人々で一杯です。九匹の鯨は岸から半町ばかりのところまで來て、その邊でポツカリ／＼浮いたりブクツともぐつたり、シュー……と潮を吹いたりしはじめました。

『バンヤーン！』

忽ち其の船はひつくり返されてしまひました。その内に今度は他の船から、大イカリをぶつけました。やつぱり手ごたへはありません。鐵砲をうつてもだめです。その内に一艘の船が、太い繩を鯨の尾にしばりつけました。

『しめた、そら引け。』

人々は、鯨を海岸へ引きあげてしまはうと思つたのです。鯨の尾にしばりつけた太い繩は、陸地にをる二百人ばかりの若い村人に引ばられました。繩はツとまつすぐにのびました。

『よーしよ、よーしよ。』

二百人のかけ聲は大變です。丁度此の時、水平線の一方から、黒雲がムク／＼とわき起つて、たちまちの内に、ピカ／＼、ゴロ／＼／＼と大きな／＼雷がなりはじめました。あたりはだん／＼くらくらになりました。大粒の雨はポツリ／＼とふりはじめました。雷の音の中で、ヨイシヨ／＼といふ二百人の騒聲が盛んに聞えます。でも鯨はいつかう平氣で、一寸尾をふると、悲しいかな、二百人の若い村人がみーんなコロ／＼ところがつてしまふのです。ワツシヨ

『鯨を捕へる、捕鯨用意』

皆なの口からは、こんな言葉が 나왔ましたが、なにしろ、鯨を捕るやうな、機械が一つもないのですから、どうする事も出来ません。

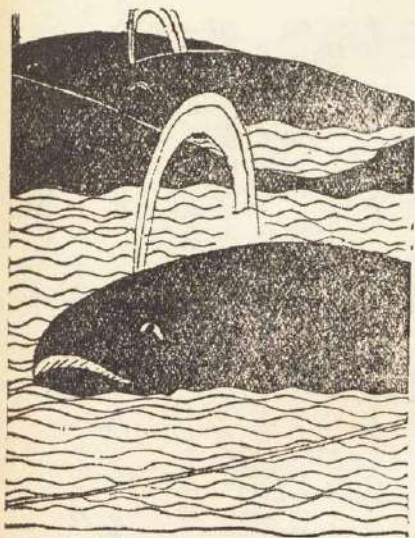
『一匹捕れば七村大當りだ。九匹取れば、大したものだ。一匹でも二三千圓だ。かまはないから、やつてみる。』

と、いよく、鯨捕りの用意がはじまりました。蒸氣船が二艘、テンマ船が五隻、他の船が三十艘ばかり、村中の船はたちまち用意されました。太い繩を持つもの、大きなイカリを持つもの、鐵砲を持つもの、中には、鯨を持つものもあつた。

『それーツ！』

と四十艘ばかりの大小の船は、先づ最初に、一匹の鯨をかこみました。鯨は、相變ずのんきに潮等を吹いて居ます。時時鯨がブクツともぐると、四十艘もの船が大ゆれにゆれて、小さい船などは引つくり返りさうです。鯨をかこんだ船はただワァー／＼云つてるだけで、どうする事も出来ませんでした。が、その内に一艘の船が、いきなり鯨の脊中に船をぶつけました。

ワツシヨ〜、ブツッ！ワァー、とう〜繩は切れてしまひました。
直ぐに第二の繩が結びつけられました。その繩は、海軍でつかう針金のワイヤーでした。
ワツシヨ〜、第二のワイヤーも切れてしまひました。
第三のワイヤーがむすばれました。ヨイシヨ〜、相變ず鯨は平氣です。



雷はます〜ひどく、雨もまじつて來ました。もう村人は必死です。ヨイシヨ〜コロ〜。村人はいくたびもころがされましたが、とう〜、ワイヤーをベルリの記念石碑の大きな土臺にしばりつけて、ヨイシヨ〜引つぱりはじめました。
今度は鯨がよわりはじめました。そして、とう〜力が盡きて陸地へ引きあげられてしまひました。その間に他の八匹は、沖をさして逃げてしまひました。

「あーヤツと一匹とれた。」

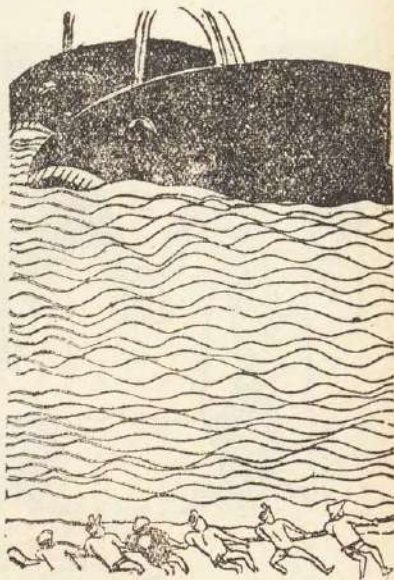
人々は太い溜息をつきました。

みなさん、これだけの話では別に大した事ありません。

どうかこの次のお話を聞いて下さい。

鯨は、大變に氣のやさしい、友達おもひの黙なのです。だから、村の人が、

「あーあ、八匹にがして残念だった。」と、残念がつて度た、その翌る日の十九日の朝、本當に本當に、村の人は本當に驚ろいてしまひました。久里濱のベルリの石碑のあたり、一杯に、七匹の鯨がゴロリと横になつて、フウ〜と苦がつて



居たのです。

「オヤ、夢かな。」

夢ではありません。本當の事なのです。昨日逃げた八匹の中七匹の鯨は、友達が一匹つかまつたのを知つて、助けに來たのです。その内の一匹はどうしたのだから知りませんが、とにかく七匹の鯨が、友達のを慕つて來たのです。そしてあんまり勢ひよく、岸に向つて來たものですから、七匹が七匹とも、砂地の浅い所にのりあけてしまつたのです。船が

暗礁にのりあけた様に、七匹の鯨が七匹とも控確してしまつたのです。

村の人がそれを見つけた頃には、七匹ともまだ生きてゐて、潮を吹いて居ました。そして、友達思ひの七匹の鯨の目には、泪がたまつて居たさうです。

併し、とう〜此の可愛想な鯨も、十九日の夜までには、水の温いたため、みんなゴロリと枕をならべて死んでしまひました。

鯨の中で一番大きいのは、長さが十間半ほどありました。

他の七匹はたいがい八間ぐらゐるものでした。

何故、鯨がこんな所に來たかと云ふ事については、色々わけを云ふ人がありますが、シヤチ（サカマタ）に追はれたのだと云ふのと、水雷演習の水雷の爲にやられたのだらう、と云ふのが本當の様です。

そして、二十日、二十一日、二十二日などは、東京、横濱、横須賀の近郷からの見物人で、毎日〜おすな〜の大にぎわいでした。

(をばり)

(作者住所、横須賀市沙入六)



魔法くべら

高橋里江

岩岡とも枝登

(前編までの梗概) イレガン王子は、魔法使ひに捕へられて、森の奥へ連れてゆかれました。そこには、やはり遠い國から捕へられて来た、ミゼリと云ふ女の子がゐて、いろいろと王子を慰めてくれました。或日の事、魔法使ひは、王子を森へ連れて行つて、今日中にこの木を皆んな伐り倒してしまへ。もし出来なければお前を殺してしまふぞと云ひました。

一、ミゼリの親切

後には王子一人、やつとこさで、持ち上る事の出来る程、重い大きな斧を持つて、森の中へ残されました。王子は、すぐ仕事にとりかゝりました。重い斧を振りあげて、一生懸命に、樹の根へ打ち込みました。けれども、その度に、木の皮が少しむけるか、木片が少し飛ぶ位で、せつせ、せつせと、お森までかゝつて、まだ一本の木も倒す事が出来ませんでした。手が抜けさうに、だるくなるし、額からは

汗が滴の様に流れて来ました。

「あゝ！この調子では、晩までかゝつてもこの木一本が、倒せないかも知れない。」

イレガンは、すつかり失望して終ひました。

「もう駄目だ！」

王子は、死ぬ覺悟をきめて、其處へ坐り込んで終ひました。

その時、彼方の方から、侍女のミゼリが、お晝の、御辨當を入れたバスケットを、ぶらさげて、ちよここ、ちよここ、歩いて來ました。

「王子様、何うして、そんな悲しそうな顔をしていらつしやるの？」

ミゼリに聞かれて、イレガンは、魔法王に云ひつけられた事を、すつかり話しました。

「とても、とても、僕には出來ない。晩までかゝつても、一本だつて切れさうにもないんだもの。私は、殺されて終ふんです」

「あら！そんな事なら、なんでもなわ！わけないんですもの。少しも心配する事なんかありませんわ！」

「ほんとうですか？では僕を助けて下さいますか？」

「え、でも、若し私、お手傳ひしたら、姿を、覺えて居て下さる？」

「忘れません！一生忘れません！」

ミゼリは、うなづきました。そして、もう心配はいらないからと云つて、坐つて、お晝當をたべる様にすゝめました。

二人は、其處へ坐り込んで、長い間、おしやべりをして居る間に、すつかり、仲よしのお友達になつて終ひました。

夕方近くなると、ミゼリは、もう歸らなければならぬ。そろそろ、魔法使ひの婆さんが、眼を覺す時分だから、と、云つて、立ち上りました。

「いつでも、今時分まで、お婆さんは晝寢をするのよ。そして、御婆さんの晝居の間、姿、側へすわつて、御婆さんの髪を、なでて居てあげるの。それが婆の役目のよ。だから、今日は、代りに黒猫に頼んで置いたからいゝの。歸つてから、黒猫に、タリム

の御歸走をしてやれば、御婆さんに云ひつけないの。あ、そう、御仕事をして終ひませう。」

ミゼリは、さう云つて、自分のエプロンを取つて、ビニール、ビニールと振り乍ら、

「シッ！シッ！シッ！」

すると、何うでせう！見る／＼中に、森の中の、樹といふ樹は、一本残らず、バタ／＼倒れて終つたではありませんか！

ミゼリは、それを見ると、どん／＼走つて幸ひまだ、すや／＼と、晝寢を續けて居るお婆さんの側へ、歸つて行きました。

お婆さんが沈んで終つてから、王子の働き振りを見に、魔法使ひがやつて來ました。そして、すつかり刈り倒された、森を眺め乍ら云ひました。

「ほら、見事々々、思つたよりよく働いた。だが怪しいぞ。誰かに手傳つて貰つたな！」

その日は、イレガンも無事に城へ歸つて、おいしい晩飯をたべて、ぐつすり寝る事が出

来ました。

翌る日、夜が明けると、魔法使ひは、イレガンを呼び起して、羊小屋へ連れて行きました。

その羊小屋は、出来てから、何百年経つたか知れない程、古ぼけたもので、踏みつけられた、きたならしい塵芥が、セメントの様に固く凝結して居ます。

「今日中に、精霊にこの小屋を掃除して置くんだ。晩までに出来なかつたら、私はお前の首をねち切つて終ふぞ！」

かう云つて、魔法使ひは行つて終ひました。後には、王子がたつた一人、やつと持ち上る事が出来る程、重い、大きな、鉄を持つて小屋の中へ残されました。

王子はすぐに、仕事に取りかかりました。併し、お退までかゝつても、たつた一所だけの掃除も出来ませんでした。

「もう駄目だ！」
王子は、今度こそ、殺されてしまふのだと

程綺麗になつた羊小屋を見て、
「ほゝう見事々々、思つたよりよく出来た。

お前は、普通の人間よりは、いくらか利巧の鐵だな。併し、怪しいぞ、確かに誰かに手傳つて貰つたらう！」

と云ひました。
が、その日も、王子は無事に歸つて、温かい晩御飯をたべて、寝る事を許されました。

次の日の朝、魔法使ひは、イレガン王子に云ひました。
「御前は、二日とも、儲しい仕事を、仲々見事にやつてのけた。偉いものだ。その代り、今日は、一番やさしい仕事をさせよう。何んでもない事だ。たゞ私の種馬に乗つて、洗滌まで行つて来ればよいのだ。馬へ乗る事位

お前は慣れて居るだらう。」
王子は、馬へ乗るのが得意でした。それでよるこんで、馬屋へ行つて見ました。馬屋にはたたくさんの馬が、ずつと並んで、つないで

ありました。
けれど、一番彼方の端に、驚いである、魔

思つて、悲しきうちに、其處へ坐り込んで終ひました。間もなく、ミゼリが、お靈の御辨當を持つて来ました。そしてこの話を聞くと、

「若し、妾が、お手傳ひしたら、妾の事を覚えて居て下さる？」
と、云ひました。

「忘れません！ 一生忘れません！ もう一度助けて下さい！」
王子は云ひました。

「きつとね。では手傳つてあげますわ！ この羊小屋は、もう三百年も掃除しないんですよ。中々、綺麗にならないのよ。」

さう云ひ乍ら、侍女のミゼリは、鐵の柄を三度叩いて、
「お前へ！ 急いで仕上げよこの仕事
鐵よお前へ！ 侍女のミゼリが頼みます

と、歌ひました。
見る／＼中に、鐵は動き出して、積み重つた、三百年の塵芥を、むく／＼とへがし初め

魔法使ひの、御氣に入りの種馬に鞍を掛ける、立派な馬は一匹も居ないので、すぐにそれと分りました。

王子は、ずん／＼歩いて行つて、見るから勇しい、灰色の大きな種馬の前まで来ました。種馬は、空つぽになつた金のかいげ箱の前に立つて居ました。鐵の鎖で繋がれて居ましたが、今にも引き切つて終ひきうに、跳ね廻つて、ボカッ！ ボカッ！ と、石を敷きつめた床をける、その度に、火花が散つて、とても、例へよれさうにもありません。

しかも、イレガンがやつて来たのを見ると耳をさか立て、鼻から、炎のやうな荒い呼吸を出して、今にも飛びつかうとします。

王子は、随分驚馬を、手なづけた事がありませんが、こんな烈しい馬は、見た事もありませんでした。ぎり／＼、ぎり／＼齒を鳴らして、すきがあつたら、噛みつかうとしました。

くる／＼、くる／＼、跳ね廻つて、すきがあつたら王子をけり殺さうと、ねらつて居る様

ました。
「大勢々々、とても此處には居られないわ、さあ、先方へ行きませう！」
ミゼリは王子の手を取つて、魔法の城の庭へ連れて行つて呉れました。そして其處になつて居る、王子の見た事もない、木の實をとつて喰べさせて呉れたりしました。

それから、夕方近くなるまで、二人は、其處へ坐り込んで、そしておしやべりを續けて居ました。
二人は愈々仲よくなつて、お互に信實を盡し合ひませうと、かたい約束をしました。
魔法の城の奥さんが、起きる時分に、ミゼリは急いで歸つて行きました。

王子は、ミゼリに分かれて、また、羊小屋へ歸つて行きました。見ると、あのきたならしかつた羊小屋は、綺麗に掃除されて、まるで、新しく建てた、ぜいたくな人の家の様に、びかびか光つて居りました。
お日様が、沈むと、イレガンの働か振りを、魔法使ひがやつて来ました。見ちがへに見えませんでした。

「まあ！ 今までの仕事の内で、これが一番大變よ！ でも、妾、御手傳ひ出来ると思ふわ！」

ミゼリは、さう云つて、また、前の様に、王子を助ける代りに、生涯、自分を見守るな

いで、誠のある交りを續けて呉れと頼みました。
もちろん、王子は、即座に、それを誓ひました。王子は、そんな、御禮の爲ばかりではなく、こゝろから、ミゼリを、愛しもし、敬ひもして居たのでした。

そこで、ミゼリは、一束の蘘を、荒馬の

に見えました。
王子は、驚いて見たり、竊して見たり、いろ／＼な事をして見ましたが、お霊までかゝつても、未だ、何うする事も出来ずに、馬小屋の前に、立つて居るばかりでした。

因り切つて、居る所へ、侍女のミゼリが、お霊の御辨當を持つて来て呉れたので、王子は喜んで、今度の癖かしい仕事の話をしました。

「まあ！ 今までの仕事の内で、これが一番大變よ！ でも、妾、御手傳ひ出来ると思ふわ！」

ミゼリは、さう云つて、また、前の様に、王子を助ける代りに、生涯、自分を見守るな

いで、誠のある交りを續けて呉れと頼みました。
もちろん、王子は、即座に、それを誓ひました。王子は、そんな、御禮の爲ばかりではなく、こゝろから、ミゼリを、愛しもし、敬ひもして居たのでした。

そこで、ミゼリは、一束の蘘を、荒馬の

に見えました。
王子は、驚いて見たり、竊して見たり、いろ／＼な事をして見ましたが、お霊までかゝつても、未だ、何うする事も出来ずに、馬小屋の前に、立つて居るばかりでした。

因り切つて、居る所へ、侍女のミゼリが、お霊の御辨當を持つて来て呉れたので、王子は喜んで、今度の癖かしい仕事の話をしました。

「まあ！ 今までの仕事の内で、これが一番大變よ！ でも、妾、御手傳ひ出来ると思ふわ！」

ミゼリは、さう云つて、また、前の様に、王子を助ける代りに、生涯、自分を見守るな

背中へ乗つけて、そして云ひました。

静かに、静かに、種馬よ。
静かに、立つておみでなら、
豆が三升、小袋が三升、
林草、山程、喰せましょ！

急ち、荒れ狂つて居た種馬は、小羊の様に
おとなしくなつて終ひました。
そこで、侍女は、馬小屋から一番上等のか
いばをもつて来て、桶へ入れてやつて、種馬
を繋いだ、鐵の鎖について居る、南京錠へ
ふーつ、ふーつと、七度、呼吸を吹きかけま
した。
と、大きな南京錠は、がたりと外れて、
其處へ落ちて終ひました。
そこで、ミゼリは、また云ひました。

ハイ！ドウドと 馳けて行け！

イレガン王子は、ひらりと、馬の背中へ飛
び乗つて、洗ひ場まで行つて、間もなく元の
小屋へ歸つて来ました。

ミゼリは、また、七度、南京錠へ、ふー
つ、ふーつと、呼吸をふきかけると、錠は、
がちりと、元の様に、かゝつて、なにもかも
元のまゝになりました。仕事がすむと、ミゼ
リは、大急ぎで、魔法婆さんの所へ、馳けて
歸りました。

入れかわりに、魔法使ひの王様がやつて來
て、イレガンの仕事振りを見て云ひました。
『よし、けふも、お前は私の云ひつけた
事を、見事にやつてのけた。もういゝから、
歸つて御飯を御上り！』

二、喪て喰ふ相談

魔法使ひの王様は、氣味の悪い程、機嫌の
いゝ顔をして、歸りましたが、お母さんの魔
女と、内籠の相談をしに、二階へ上つて行

きました。

魔王の容子を見て取つた侍女は、これは油
斷がならないと思つて、そつと、壁に耳を押
しつけて、二人の話を聞いて居りました。

『ねえ御母あ、何うも、あの侍女のミゼリは
利巧になり過ぎて、少し、手におへなくなつ
て來ましたぜ。それにさ、いつの間にか新米
の小僧と仲よしになつて、すつかり、組んで
居りますよ。それでなくて、仲々、あの小僧
に、あゝなんでも出来る筈がない。』

お母さんの悪態は、魔王の愚痴を聞いて、
『さうだね、わたしも、さうだらうと思つて
居たよ、それで、お前、子供達を何うするつ
もりだい？』

と、たづねて居ます。
『左様さ、仕方がないから、二人とも手放し
て終ひませう。ミゼリ奴は、私達の魔法を、
すつかり覚え込んで終つたらしいから、今の
中に、かたづけして置かないと、爲になりませ
ない。』
『それでは何かい、お前、折角さうして來た

子供を二人とも逃がして終ふつもりかい？
『何うして、何うして、たゞ逃がして居るも
のか、それにや、いゝ考へがあるんだ。ねえ
お母あ、二人を、晩飯に喰つて終うではあり
ませんか！ それやどうも、王様の子供達の

味といふものは、また特別だからなあ！
『さうだらうねえ。それやいゝ考へだ！』
『ちやおつかあ、私は、錠の仕度にかゝるか
られ、晩には、御馳走をして喰べさせるよ』
『うまくやつてお呉れ！ なる丈柔らかに煮

てお呉れよ！ わたしや、甘からい方が好き
だよ！』
悪態は、おいしい御馳走の事を考へて、堪
らなくなつたと見えて、べろ／＼舌なめずり
を、しはじめました。
二階から、降りて來ると、魔王は、イレガ





「王は、むつくりと、起き上つて、釜の所へ来て見ると、さあ！ 侍女も

どつだねえ。」

「釜の下具合は

誰も應へません。

「逃げた！」

何處きいても、返事がないので、

「釜の下具合は

誰も應へません。

「逃げた！」

「王は、むつくりと、起き上つて、釜

の所へ来て見ると、さあ！ 侍女も

どつだねえ。」

「逃げた！」

何處きいても、返事がないので、

「釜の下具合は

誰も應へません。

「逃げた！」

「王は、むつくりと、起き上つて、釜

の所へ来て見ると、さあ！ 侍女も

どつだねえ。」

「逃げた！」

何處きいても、返事がないので、

「釜の下具合は

誰も應へません。

「逃げた！」

「王は、むつくりと、起き上つて、釜

の所へ来て見ると、さあ！ 侍女も

どつだねえ。」

「逃げた！」

何處きいても、返事がないので、

「釜の下具合は

誰も應へません。

「逃げた！」

「王は、むつくりと、起き上つて、釜

の所へ来て見ると、さあ！ 侍女も

どつだねえ。」

「逃げた！」

何處きいても、返事がないので、

「釜の下具合は

誰も應へません。

「逃げた！」

「王は、むつくりと、起き上つて、釜

の所へ来て見ると、さあ！ 侍女も

どつだねえ。」

「逃げた！」

何處きいても、返事がないので、

「釜の下具合は

誰も應へません。

「逃げた！」

「王は、むつくりと、起き上つて、釜

の所へ来て見ると、さあ！ 侍女も

どつだねえ。」

「逃げた！」

何處きいても、返事がないので、

「釜の下具合は

誰も應へません。

「逃げた！」

「王は、むつくりと、起き上つて、釜

の所へ来て見ると、さあ！ 侍女も

どつだねえ。」

「逃げた！」

何處きいても、返事がないので、

「釜の下具合は

誰も應へません。

「逃げた！」

「王は、むつくりと、起き上つて、釜

の所へ来て見ると、さあ！ 侍女も

どつだねえ。」

「逃げた！」

何處きいても、返事がないので、

「釜の下具合は

誰も應へません。

「逃げた！」

「王は、むつくりと、起き上つて、釜

の所へ来て見ると、さあ！ 侍女も

どつだねえ。」

「逃げた！」

ンに云ひつけました。

「けふは、お前達に、御馳走を喰べさせるから、お前は、これから、薪木をうんと取つて来るんだ。」

そして、侍女のミゼリには、

「お前は釜の下に火をつけるんだ。どんどんなしな。いゝかい。煮えたつたら、さう云ふんだよ！」

なんて、優しいさな聲を出して、云ひつけると、自分は、床へ入つて、ごろりと、横になりました。

で、イレガンは、早速、山へ薪木を取りに出かけました。ミゼリは、釜の下へ火をつけて、魔法使ひが、寝入つて、大きないびきが聞え出すまで、どん／＼もしつけて居る様な顔をして居ました。

ですが、すつかり、眠て終ふと、そつと、火を消して、王子が取つて来た、大きな薪を二本、かまどの兩側へ立てかけて、何か、小さい聲で、薪にさゝやきました。

そつと、其處を離れると、イレガンを、手

眞似て呼んで、

「王子様！ 今度こそ大變よ！ あの人は二人を、煮て喰べようとして居ます。それで釜を煮たてゐるつて云つたのよ」と、教へました。

「大變だ！ 僕には何うする事も出来ない！ 助けて下さい！ もう一度助けて下さい！」

「ええ、では、二人で逃げ出させよう！ その代り、妾の事、忘れないのよ！」

「忘れぬのですか！ 一生、何よくしませう！ 大きくなつたら、僕の所へ御縁さまに來て下さい！」

「きつと？」

「きつと！」

ミゼリは、王子の手を取つて、其處を馳け出すと、魔王の馬小屋へ飛んで行きました。馬小屋では、魔王の、お氣に入りの種馬がいつもの様に、鼻から火を吹いて、石の床をけり飛ばして、火花を散らして居ました。

ミゼリは、急いで、ふつ！ ふつ！ と、七

度呼吸をかけて、南京錠を外して、鐵の鎖を取ると、馬を引き出して、王子と一緒に、飛び乗るや否や、後をも見ずに、魔法の城を抜け出して終ひました。

暫らくすると、魔王は、眼を覺して、大きな欠伸をしたがら、嗚鳴りました。

「何うだ、ミゼリ！ 釜の具合は？」

「未だ煮たぢません！」

と、返事をしました。

その聲が、侍女の、ミゼリの聲と、すこしも異はない位似て居たので、魔王は欺されて

「どん／＼もせよ！」

と云つて、また寝て終ひました。

暫らくすると、また魔王は眼を覺して、大きな欠伸をしたがら、嗚鳴りました。

「何うだ、イレガン！ 釜の下は？」

「未だ煮たぢません！」

と、返事をしました。

王子も見えないし、火は消えて、釜は氷の様に冷たくなつて居ます。

「小せがれ共、何處へ夫せた！」

嗚鳴りながら、其處等を馳け廻つて居ました

が、誰も出て來ないので、腹を立て、雷の様な聲で、叫び立てました。

その聲の大きかつた事！ 城中の人は、震へ上つて、魔王の所へ集つて來ました。お袋の悪婆も、十二人の家來も。

けれど、子供達の姿は見えません。はつと思つて、馬小屋へ行つて見ると、あの、足の早い、御氣に入りの種馬も、居なくなつてます。

「逃げた！」

もうさうに決つて居ます。

其處で、王は、十二人の家來に命じて、子供達の後を、おつかけて、見つけ次第、首根つ子を引つ綱んで、引きつづつて來いと云ひつけました。



足の下の聲

西川喜平
岩岡とも枝畫

ふだんさみしい田舎の寺も、秋の彼岸の中日のことですから、阿彌陀詣りの人で、中々の賑ひでした。

ゴーン／＼と、絶えず打ち鳴らす鐘の音、本堂からうづ巻きながら流れ出すやうな香の煙、この日は殊更、佛の有難味が思はれます。本堂の正面にある、阿彌陀さま

の前には、入れ代り、立ちかわり参詣の人が、頭を下げて拜んでゐますが、その左にならんで、大きな繪の掛け物が、壁にかゝつてゐます。その前はまた一杯の人で、押し合ひながら見てゐます。これは地獄變相の圖と云つて、恐ろしい地獄の有さまが、繪になつてゐます。

真ん中に大きな閻魔大王が、机の上に帳面を開いて、見る眼、鼻と云ふ、眼と鼻の化物のやうな者がゐて、その前に、牛や馬の顔をしてゐる鬼に引き据ゑられた罪人の亡者が調べられてゐます。そのほか、青鬼や赤鬼に、責められてゐる、大勢の亡者が、針の山や、血の池でいろ／＼の苦しみを

をしてゐるところが、もの凄くかいてあります。その繪の傍に、年

を老つた坊さんが、坐つてゐて、珠數をつまぐりながら、



「この世で悪いことをする者は、死ねばこの繪にあるとほりの地獄へ墮ちて、責苦を受けます。ところが、わたしは、今まで慈悲善根を施し、他人を害つたことはない、と云つてゐる者でも、地獄へ墮ちることがあります。一體人間は自分から悪い事をしない者でも、知らぬ間に罪をつくつてゐることがあります。それは皆さんが、道を歩いてゐる中に、小さい虫を何疋踏み殺してゐるか知れない。一日でも何百疋、一生では何萬疋といふ數になります。なんの罪もない虫けらを踏み殺す。ナント可哀相なことではありませんか。この村の人たち、取り別けて今日御参詣の方々は、皆んな善人ばかりだが、

いくら善人だと云つて、今お話しをしたやうな殺生の罪を、皆んな犯してゐる。殺生戒とは、佛さまのいましめの内でも重いので、生き物を殺す恐ろしい罪です。それで死ねば地獄へ墮ちるのは當り前だ。そこでその罪をなくすのは、よく念佛を稱えて、阿彌陀さまのお助けを願はねばならぬ。有がたいお經に、一念彌陀佛即滅無量罪とある。なんでも一心にお念佛を稱へれば、いろ／＼の罪が消え失せてしまひます。死ぬ時には、誰の目にも見えぬが、この繪にあるとほりの火の車が迎ひに来る、人間は老少不定と云つて、何時このお迎ひが来るか知れない。お迎ひが来てから、あわてゝさはいいで

も間に合はない、皆さん火の車の來ない中に、サア／＼手を合せて南無阿彌陀佛々々々々々々」と坊さんが稱へますと、その前にゐる大勢の人たちは、皆んな感心したやうな顔をして、口々に、「南無阿彌陀佛／＼」と稱へて、やがて、日暮れになりましたので、參詣の人も散り／＼に、めいめいの家へ歸りました。その中に太五兵衛と云ふ者がゐました。

九二
に、何百疋の虫を踏み殺してゐるか知れない。己は知らなくとも、踏み殺される虫の方では、どんなに怨んでゐるか分からない。世間で評判のいゝ若い者が、病氣でポツクリ死ぬなんて云ふのは、やつぱりかういふたゝりかも知れないな。オヤ／＼、ウカ／＼歩いてゐる中に、日がとつぶり暮れてしまつた、早く歸らう。」と云ひながら歩くとたん、

事をしてしまった。正體を見たいが、眞つ暗だし、顔へ飛びつかれでもしたら大變だ。早く歸つて、明日見に来やう。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。」と云ひながら、自分の家へ歸つて歸りました。

無阿彌陀佛／＼。」と、稱へてゐると、背なかの方で「ギューツ」と聲がしたので、キヤツと飛び上つて、後を見ましたが、何もゐません。大變々々、かうなつては、しまひに取りつかれて死んでしまふ。お寺へ行つて和尚さんへお願ひをしなければならぬが、この夜更に外へ出たら、どんな恐ろしい目に出會ふかもわからないと、蒲團をスッポリ頭からかむつて、慄えながら念佛を稱えてゐましたが「さつき和尚さんの話したとほり死ぬ時には火の車が迎ひに来ると云つたが、マサカ今夜あたりは來まいな。しかし新田の願吉は、晝間野らで働いてゐたと思つたら、その晩死んでしまつたし、堤下の

九三
およく婆なんぞは、益に念佛踊りでさわいでゐたが、朝行つて見たら息がなかつたと云ふから、いつお迎ひが来るかも知れない。もしこゝへお迎ひが來たらどうしよう。和尚さんと相談をしたつて間にあふまいな。一日延ばしていただきたいと云つても、ゆるしてくれない。どうか火の車の來ないやうに、お迎ひの來ませんやうに。南無阿彌陀さま、阿彌陀さま、お助け／＼。」とブル／＼慄えてゐました。

ラリと開いたので、
「ソラ来た、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。」

「太五兵衛さん、どうしたのだ。念佛なんぞとなえて。」と云ひながら入つて来る者がありました。

太五兵衛は、蒲團の中で小さくなつて、

「御免なさい〜。」

「ナニが御免なさいだ、太五兵衛さん、寢ぼけてゐるのかい。」と提灯をさしつけられたので、太五兵衛は、怖はく首を出して見ると、村の人たちなので、ホツと息をつきました。

「アツ奎助さんに、甚六さんか、己はまた鬼かと思つて。」
「馬鹿なことを云ふな、今夜寄り

合ひがあるので迎ひに来たのだ。」
「その迎ひと聞いても、ゾツとするのだ。」

「まだ寢言を云つてゐるのか、サアサア早く仕度をして来いよ。」

「一緒に行くから、早く〜。」と、手を引くやら、背を押すやらして、やうやく外へ出ました。

太五兵衛は、家で耳についてゐる。イヤナ鳴き聲や、火の車を心配してゐるよりは、この二人の來たのを幸に、寄り合ひの席へ出て、大勢の人達と夜を明かした方がいい、と考へて、出かけました。

やがて寄り合ひのある家へ來て太五兵衛は村の人達に、寺からの歸り路で、「ギニーツ」となにか踏み殺したことから、家へ歸つてか

らも、鳴き聲がすることやらを話したところ、村の人達は面白がつて、からかふ者もあれば、氣の毒がつて慰める者もありました。

それから、大勢は酒を飲んで夜を明かしたので、あくる朝になつて、太五兵衛の踏み殺したものは、なんであらうと云ふ事になり、その正體を見届けやうと、大勢で太五兵衛をつれて出かけました。

太五兵衛は、大勢につれられながら、怖わく昨夜の場所へ來ました。

「太五兵衛さん、こゝらかね。」

「ナニモゐないぞ。」

「どこだ〜。」と、大勢に云はれ、

「ナンデモ、庚申塚のまへだつたよ。」と、太五兵衛が云ふので、村

の人たちは、そこいゝとさがしてゐたが、その中の一人が、
「アツゐた〜。」と、嗚鳴つたので、

「ヒヤッ。」と、太五兵衛が聲を上げました。村の人たちは、面白半分、ドヤ〜と、寄つて來ました。

太五兵衛も、皆んなの後から、怖わく〜覗きました。

とたんに、大勢はドット聲を上げて笑ひました。

見ると、その中の一人がつまみ上げたのは、大きな一つの茄子が踏みにじられて、泥まみれになつてゐたのでした。

(をはり)





めつかち泥棒

樺山千代

岩岡とも枝畫

「坊ちゃん危い！ 倉さんは大聲で叫んで、大急ぎでブレーキをかけて自轉車を止めようとしたが、中々止まりません。ア、ア、ア、と云ふ間に、吉雄の體ははねとばされてしまひました。吉雄は足に擦り傷をうけたばかりでした。けれども意地の悪い親方の源藏は、それを云ひがかりに、倉さんに、どうしても、出て行けと云つてきかないのでした。

「ね、親方！ 後生だから勘忍しておくんない。坊ちゃんが走つて来たんだし、どうにもならなかつたんです。」

「嘘を云へ、手前がわざとに轢いたんだらう！ な？ 吉雄、さうだらう」親方は、さうだと云はすやうに吉雄

遊んでた親方の息子の吉雄が、倉さんを見ると、

「やア、めつかち倉！」

さう云つて、通せん棒をしながら走つて来ました。

チリ、チリ、倉さんは、勢よく自轉車のペルをならしながら、使ひから歸つて来ました。その時、道ばたに

に目醒せしました。吉雄は仕方なしに「うん！」と、答へました。

『ほうら！ どうだ、吉雄もあゝ云つとる。そんな不都合な奴は俺の工場に一時もおく事は出来ない。さ、今直ぐ出て行つてもらはう！』

さう云つて、源藏親方は、たうとう倉さんを追拂つてしまひました。

倉さんの家には、老病のお母さんが居るのでした。扱、倉さんは、之からどうして暮したらいいのでせう？

倉さんは片目でした。けれども、中腕のいゝ旋盤職工でした。倉さんは毎日々々、雇つてくれる工場を探して町を歩きまはりました。

『俺んところには、職工はいることはないがね？ 君ぢや、一寸、都合が悪い？』

職工入用と貼紙をしてある工場へ道

入つて行つても、みんなさう云つて歸られました。片目では、どうせい仕事は出来まいと思はれるからなのでした。

もう之で半月になりました。倉さんの家の中のものは、着物から薬罐から唐傘のはてまで、みんなお金にして使ひ果してしまひました。狭い家の中は、ガランとして、やつれたお母さんが、お腹を空かして、ほつちりと、寝てゐるきりなのでした。

『あゝ、俺達はもう餓え死にするばかりだ。』

今日も倉さんは、一日歩き疲れて、泣きさうになつて歸つて来ました。そして家のそばに來た時でした。倉さんは暗い足許に、キラと光るものを見ました。

「おやー！」

よく見るとそれは墓口なのでした。倉さんの胸はドキドキして來ました。

「金さへあれやア！」

さう思ふも倉さんは夢中で拾ひあけました。どつしりと重い！

『神様のお助けだな！ 有難たい！』

倉さんはそれを懐に入れて、また道を引かへして、店のある通りへ出ました。

お米、お刺身、果物、大福、煙草、雑誌、といふ具合に、面白いほど倉さんは買ひ込んで家に歸つて來ました。

『まあ、どうしたんだま？』

お母さんは、おいしさうに御馳走をたべながら云ひました。

「何アに、今日は思ひがけない働きがあつてね？」

倉さんは、お母さんの喜ぶ顔をみるうれしくなりません。倉さんも、

久しぶりでお腹をふくらまして、お母さんの寢床の褥から潛り込みました。けれども、倉さんは、どうしても眠ることが出来ませんでした。なんだから、急に、墓口の事が氣にかゝつて来たのでした。俺は他人の墓口を拾つて金を使った！俺は泥棒をした！さう思ふと、倉さんはたまらなくなつて来たのでした。

『ごめん！』今にもさう云つて、お巡りさんが飛び込んで来さうな氣がしました。二日、三日、四日、倉さんはビクビクして暮らしました。けれども、お巡りさんは来ません。町を歩いてても、倉さんを疑つてゐるらしい者もありません。

『ふうん！ 成程、知らぬが佛で、知らぬといふものは重寶なものだ！』倉さんはしみじみとさう思ひました。

やがて、墓口のお金もなくなりました。倉さんの働きの口もみつかりません。倉さん達はまた餓死にしさうに困つて来ました。

二

『あゝ、また天から墓口が降つて来ないかなア！』

倉さんは、今日も疲れて家の方へ歩いて来ました。お腹が空いて、フラフラして、目がまはりさうでした。

『あゝ、何か喰ひたい。おつと！ いい、匂ひがするぜア！』

倉さんはあたりを見まはしました。ある、ある……『風來軒』と書いた洋食の出前の箱が、傍の床屋の前に、さも持つて行つて下さいと云はんばかりに拵えてあるのでした。出前持ちの若い衆は、床屋にはいつて、しきりに

無駄口をきいてゐる。

『ありがたい、天のお助けだ！』倉さんはもう夢中でした。箱の手をつかむと、まるで馳のやうに走つて家にかへりました。

『お母さん、お腹が空いたでせう？ 今日はいゝ働きがありましたぜ、ほうら！ 洋食、出来たてのホヤホヤだ。このドロドロしたんならお腹に大丈夫だ。俺はこの肉の厚ほつたい奴を』

倉さんは、目を白黒さしてムシャムシャたべました。そして、夜になると箱と皿とを裏の川に棄て、来ました。『成るほど重寶だ、かうして、失敬して来れや、俺達は餓える氣使ひもないし、油に眞黒になつて働く事もあれやしない』

さうは云ふものゝ、床にはいると、少しは氣になりました。けれども、別

に、お巡りさんもやつて来ないし、翌日、町を歩いてても、誰一人、倉さんをあやしむ者もありません。

それから倉さんは、玄關の靴を盗んだり、呉服屋の反物を盗んだり、帯の間からはみ出してゐる紙入を失敬したりするやうになりました。

『乞食を三日するとやめられないと云ふが、泥棒も三日するとやめられないや。全く、こんな面白くつて金になる商賣はないて！』

倉さんは泥棒が面白くつて仕様がなくなつて来ました。盗む氣にさへなれや、ほしいものは、まるで、落つちちてよもゐるやうに、何處にでもブラブラしてゐます。

さうしてゐるうちに、倉さんは、だんだん慾が出て来ました。『こんなコソ泥ぢや面白くないや、

一つ大仕事をやらかすがな』

倉さんは寝ながらさう思ひました。すると、もう、胸はワクワクするし、腕やら足やらは、ムズムズして、じつとしてゐる事が出来なくなりました。

『待て待て！ 俺は片目だ、すぐ目じるしになる。明日は一つ、眼鏡を買つて来よう！』

倉さんは、明日になるのを待ちかねました。夜が明けると、早速、眼鏡屋へ行つて、素通しを買つて来ました。

そして墨をぬつてかけてみました。雨降りのやうに、あたりは薄暗く見えました。鏡にむかふと、まるで、人が違ふやうに、人相がかはつて見えます。『ようし、これなら大丈夫だ。早く夜

になればいゝがなア！』倉さんは、ゴム足袋やら、手袋やら古帽子やらをまとめて、夜になるのを

待ちました。

『何處へはいつてやらう？ あ、さうだ源藏親方のところがいゝ、あそこなら、勝手はわかつてるし、それに、あんな意地の悪い奴は大いに懲らしてやつた方がいい！』

倉さんは、すつかりうれしくなりました。倉さんは、お母さんの眠るのを待つて、仕度をする外に出ました。町は、ひつそりと寝しづまつて居りました。倉さんは、犬の子一匹にも吠えられずに、源藏親方の家まで行きました。

親方の家は工場にうつついた二階家でした。倉さんは、階下に屈強の職人達が居るといふので、親方が安心して、戸締りのしてないのを知つて居りました。

倉さんは、掘垣をのほつて、二階の屋根に上ると、そつと高窓の硝子戸を

引きました。倉さんの胸はドキドキして来ました。やめようかな？ ちよいとさう思ひましたが、憎らしい親方の顔を思ひ出すと、急に勇氣が出て来て、ゴム足袋のまゝ、家の中に忍び込みました。

硝子戸なので、空の光をうけて、中はほんのりと明るく、親方夫婦と、二人の子供は、まるで殺されたやうに眠つてゐます。

『この顔だ！ この口で俺をさげすみつきやがつたな？ 今に見ろだ』

倉さんは、親方の寝顔にべつかんこをして、それから、先づ床の間に行きました。床の間には、親方の自慢の金の置時計があるのでした。倉さんは、それを先づ、腰の袋に入れました。それから算笥の上の手提金庫を脇に抱え、と、大金で、さつきの窓から忍び

出ました。家にかへると倉さんは、盗んで来たものを皆な床下へかくしました。

『どうだ、人を慮めるとこんなものだぞ。明日は、親方の奴、狂氣みたいになつて騒ぐだらう！』

倉さんは、満足さうに笑ひながら、また、お母さんの裾からもぐり込んでぐつすりと眠りました。

三

倉さんは、かうしてすつかり本式の泥棒になつて了ひました。毎日毎日、夜中になると、泥棒に出かけて行きました。

さあ！ 町中は大變な騒ぎです。

『昨夜は、菓子屋のお内儀さんの指環と紙入が盗まれたさうだぜ。』

『ゆふべは、消さんとこの寶藏がなくなつたさうだぜ。』

さう云つて、人々は、寄るときはると泥棒の噂でもち切つて居りました。倉さんは、床屋へ行つても、八百屋へ行つても、そんな話をききました。

『へえ！ 物騒だね？ 一體、どんな奴だか、泥棒の顔をみたつて人はないかね？』

倉さんはきいてみました。『なんでも黒眼鏡をかけてたつて話もあるがね、中々、警察の手でも、つかまらならしいよ、よつほと巧妙な奴とみえる。倉さんも用心した方がいいぜ。』

『なアに大丈夫だ！ 俺んとは死にかゝりの病人はあるし、かうして商賣もなく、稼ぎ溜めた金でやつと暮してゐるのを見れば、いかに泥棒も同情してくれるだらうて！』

さうは云つたものゝ、やつぱりお母さんは心配相でありました。

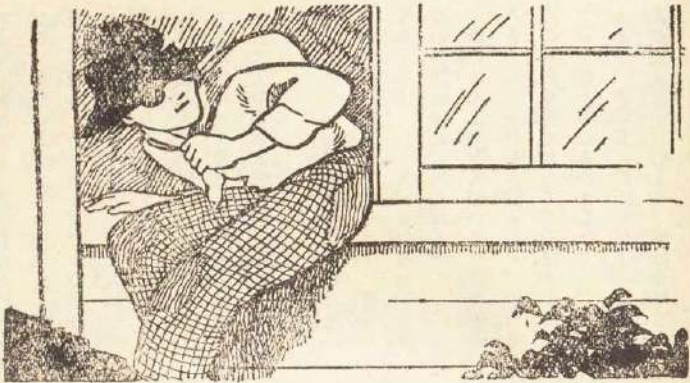
お母さんの病氣は、その頃から日に日に、重くなつて行きました。

或る夜のことでした。倉さんは、何時ものやうに、泥棒にはいつて、様々の品物を盗んで歸つて來ましたが、座敷に上るなり、

『アツ！』と叫んで、立ちすくんでしまひました。お母さんが、障床の上に坐つてゐたのでした。

『倉！ 倉！ お前はまあ！ 何といふ情ない眞似をしておくれだ！ おかしいとは思つてゐるが、眞逆！ 眞逆！ お前だとは思はなかつた！』

お母さんは盗んで來た品物を一ぱい抱えてゐる倉さんをみると、さう云つて泣きました。



倉さんは云ひました。が、倉さんは俺がその巧妙な泥棒様だぜつて、一寸自慢してみたいやうな心持がしました。或る日のことでした。『倉や。今日隣りのお内儀さんが來て話してだが、近頃、この町ぢや、すいぶん物騒だつて話ぢやないかい？』お母さんが云ひました。倉さんは、ギクリとしましたが、何氣なく、『なアに大丈夫でさア、内なんか、とられるものはありやしない！』『盗られる氣使もないだらうがね？』かうして遊んでたべちや、その泥棒の嫌疑をうけないでもないと思つてね？』

『ただお母さん、遊んでたべてるたつて、これぢや、まるで喰ふや喰はずぢやありませんか？』

『それもさうだがね。』

「ようくおきー！ 君ちゃんといふ娘はね。病氣のお父さんを連れて、女工をして暮してゐたさうだ。その子の働きためた貯金を盗まれて、二人は毎日泣き悲しんでゐるさうだよ。それから……それから……」

お母さんは、泣きながら泥棒に這入られた可哀相な人達の噂を物語りました。

「ほんとに、お前はそれですむと思ふのかい？ 自首しておくれ！ 自首しておくれ！ いええ、お前みたいな情ない人間は死んでおくれ！」

お母さんは身をもがいて、歎き悲しみました。それから間もなく、お母さんの病氣は重くなつて、お母さんはたうとう死んでしまひました。

「あゝ、お母さんが死んだ！ お母さんが死んだ！ いゝや、俺はお母さん

を殺した！」

倉さんは狂氣の様になつて泣きました。倉さんは、悪い夢から目がさめた様に、眞人間にかへつたのでした。

扱、泣きながら、お母さんのお葬式をすました倉さんは、自首して出たでせうか？ それとも、自殺したでせうか？

四

不思議なことには、その町には、それからも、毎日毎日今までよりも、もつとひどい泥棒事件がどきどきしました。そして、もつと不思議なことには、その盗まれた品物が、そつくり、他の家の庭から出て来る事でした。そしてその品物には

「盗んだ物はお返しします。戸締りをもつともつと、嚴重にしないさい。」と書き

そへてあるのです。それから間もなく、町の公園に、倉さん所の床下にあつた品物が、そつくりそのまゝ、積まれてありました。町の人達は、狐につまされたやうな心持がしました。

それは一體どうした譯でせう？

倉さんは、泥棒をしてみて、人達がどんなに間がぬけてゐて、戸締りに氣をつけないかをしみじみと感じたのでした。それで彼は、泥棒の仕納めに、思ひ切り大膽な泥棒をして、人達を懲らして、用心深くさせやうとしたのでした。それが、今まで騒がした人達に對しての倉さんの眞心からの親切だつたのでした。

その後めつからの倉さんの姿が、警察にあらはれたことは云ふまでもありません。

(をはり)



童謡

野口雨情選

(子供篇)

河鹿(賞)

福島 大内 憲二 (十四才)

チヨロ〜
淺瀬の石のかけ
サラ〜
汀の蘆の中
ガガチ ガガチと
鳴く河鹿

夕やけ小やけに
なりました

一軒家(賞)

東京 越村 和賀

野原の一軒家

淋しかる

たーだ青い

草ばかり

野原の一軒家は

淋しかる

さいかち(賞)

東京 板谷 令子 (十五才)

コロロさいかち
車引き

眞黒ガラスの
羽そめに

石ころ峠の
山道を

車引いては

エンヤラヤ

車は黒色
鐵車

山のススキは
旗ふつて

夕焼お森
まだ遠い

虹の橋

埼玉 磯田 文江 (萬二)

雨が晴れたら
虹がでた

赤黄 紫 緑 青

虹のお橋は

どなたがわたる

月のお庭の

花姫様か

子産石

東京 津田 恒

ぼつくり月夜に子産石

月様まろくなつた夜に

ぼつくりぼろりと

生れ出た
月様の子だと誰かいふ

小夜風ざらりと
渡る夜に
海邊のすゝきが
さしやいた

歸ろよ

東京 和氣伊勢雄

山にや入日で
お日様赤い

かへろかへろよ
ぐみの實つんで
雀も日暮にや
巢に歸る

祭の日

東京 福田伊之吉

朝から太鼓が
鳴つてます

お神輿わつしよい
通ります

伯父さんそつと
さそひ出し

だんごを買つて
貰はうか

日が暮れる

東京 豊原 園子
(十三才)

カアカア鳥が

三つ鳴いて
日光湯元の
日が暮れる

お山にや雲が
下りて来て

湖の面も

日が暮れた



が ん

埼玉 宮崎けさ子
(十三才)

が ん

とんだよ

ならんでよ

青いお月さん

見い見い

とんだよ

おごり草

山口 大下 フサ
(高二)

たくさんおこれ

おごり草

かわいい花を

せに負つて

日にてらされて

あつかない

たくさんおこれ

おごり草

水 車

山口 前田 佑
(高二)

から水車

ごつとりと

今日はいごかず

からすが

とまつてゐる

今日はいごかず

小 鳥

朝鮮 山本 力

ピーチク

小鳥がほらないた

お山の小鳥がほらないた

ピーチク

何處だか行つてみよ

どこだい
ピーチク
又ないた

秋

東京 手島芳次郎
(五才)

コロリ コロ コロ

ころろぎ なくよ

みんな あさだと

おにわの すみで

よるの にわげた

つべたい げたに

ぼくも あさだと

かんがへた

秋 風

京城 河野 青雨

すいしい秋風

さアらさら

芒をなびかせ

さアらさら

木のはをちらして

さアらさら

たんぼに波立て

さアらさら

青 田 道

埼玉 増田 里子
(三才)

お星さん

出たよ

かへりましょ

早よ

行きましたよ

かけかけて

此の道

近道

青田道

川

山口 田熊 恭亮
(高二)

山がうつつた

橋がうつつた

皆さかさ

波がたつ

山もさかさに

橋もさかさに

みんなゆれてる

十二、義士切腹(その二)

(前號までの梗概は一三〇頁にあります)



大石主税

三島霜川

羽鳥古山畫

元禄拾六年の春が來ました。松平隠岐守は、自分に三田の中屋敷に出かけて、主税等に逢ひました。「この度は、首尾好く敵討をされて、さぞ、満足であらう。この方に於ても、あのくを預り申して、悦ばしいことに思つてゐる。あのくには、定めて、いろく、不自由であらうが、望のことは、何んでも、速慮なく云ふが宜しい」

と、隠岐守は、穩に云渡しました。そして、主税に向つて「その方には母があらう。母は、どうして居るのぢや」

と、格別に、たづねました。

その時、主税は、どうしたのか、切りに、モジモジしてゐました。が、「はッ」と、頭を下げて、「母は、昨年以來、實家の方に引取られて居りまして、但馬

豊岡の方に居りまする」

と、ヤツと、扣目に、こたへました。

「して、兄弟は」

「弟が二人居りまするが、いづれも母の許に居りまする」

と、打情れて、云ひました。

「逢ひたいとは思はぬか」

「一度逢ひたいと存じます」

と、かん短に云つて、口を噤みました。

隠岐守は、その心もちを、憐に思ひました。そして「さうであらうな。母や弟等も、定めて逢ひたく思ふてゐるであらう」

と、慰めるやうに云ひました。

主税は、ホロリと涙を落しました。「昨年の秋、御當地へ参りましてから、たゞ一心に、敵討のことを思ひつめて居りましたので、つい、忘れて居りましたが、この頃は、しきりに、母のことやなどが思出

されまする」

と、正直に、飾りけなく云ひました。

「ム、ム。さうであらう、さうであらう」

と、隠岐守は、「なさけ」をこめて、うなづきました。間もなく、主税は、自分の小屋に、引退がッて來ました。そして、同室の義士等に向つて、「只今、隠岐守様の前で、モジくして、ずるぶん、變だつたでしょう」

と、笑ひながら云ひました。

「さうですネ、さう云へば何んですか……」

と、義士の一人が、淡ばくにこたへました。

「實は、極りが悪かつたんですよ」

と、云つて、主税は、クス／＼笑ひました。

「どうしてですか」

「いえ……でも、わたくしは、先殿様に御奉公をしたこともない者なんでしよう。皆様は、永年、忠義を盡しなされたのでしよう。それに、わたくし

は、父の子と云ふだけで、皆様を差置いて、先に出るのかと思ふと、何んですか、變で、仕様が無かつたんです。で、つい、尻込をしたのですよ」

と、無邪氣に云ひました。

「ア、さうでしたか。だが、あゝいふ場合には、家が柄が何より大切なんです。あなたにも、似合はな

う。」

と、云つて、不破數右衛門や、堀部安兵衛は、主税の、その遠慮深い、そして、少年らしい心を愛らしく思ひました。さうして、主税等は、ふだんの通りに、談したり笑つたりして、「運命」の來る日を待つてゐました。

しかし、この隠岐守の屋敷では、始めのうち、義士に對する「待遇」が、決して、好い方ではありませんでした。それで、ずゐぶん、世間の非難もありました。そして、「細川や水野流れは、清けれど、只、大甲斐(海)の隠岐(沖)を濁れる」と、かういふ、悪

口の落首さへありました。

とにかく、一番「待遇」の好かつたのは、細川越中守で、次が、間瀬孫九郎等九人が預けられた水野監物でした。そして、隠岐守と、調嶋八十右衛門等十人が預けられた毛利甲斐守とは、後ちになつて、その「待遇」を好くしたのでした。

何んと云つても、細川家では、太守の綱利が、非常に、義士等に同情してゐました。それで、正月には、家中の者と同様に、髪斗目小袖の紋付に、麻上下を賜はりました。また、内藏助が、ふだん、風呂に入るのが好で、湯上がりには、きつと、お酒を少し飲むのが習慣だとお聞きになると、直ぐ、その通りにして、毎日、風呂を沸かさせて、湯から上がるのと、きつと、酒を出すやうにしました。そして、自分が、何か、うまい物を召上がると、「これを、十七人の者にも遣れ」と、命じられました。さうして、毎日々々、喰べきれないほどの大御馳走か

つゞきました。しまひには、内藏助を始め、この御馳走に、ウンザリして了ひました。

で、内藏助は、我慢がしきれないで、ある時、堀内傳右衛門といふ「もてなし役」の人に、こつそり、さう云ひました。

「わたくし共は、久しく浪人をして、まづい物を喰べつけました。で、恐入つたお話ではございませんが、有様は、少々、御馳走に飽いて、腹がつかえて参りました。願はれることなれば、お茶漬、糠味噌漬、干鰯、海鼠、菖葎汁の類……さういふやうな物が頂戴したいのでございますが」と。

すると、この傳右衛門といふ人は、よく物の解つた「苦勞人」でしたから、「御尤でございます。御馳走も、かう毎日のやうに、續いては、成程、お飽でございませう。しかし、この御馳走は、一々、殿のお耳に入れて、あなた方に差上げるのですから、これは、變えることも、減らすことも出来ません。

だが、わたくしに、工夫がございます。お口に適ひますか何うか、こつそり、差上げて見ませう」

と、云つて、大に同情してくれました。

内藏助等は、「夜の薬喰」と、云つて、毎晩、寝る前に、お酒を飲ませられることになつてゐました。それも、太守綱利の指圖でした。傳右衛門は、その時の御馳走に、自分の宅で、田作を、うんと煮しめて、それに、唐辛をふりかけて持つて行きました。ひろん、ないしよでした。

「何うです、召上がられますか」

と、傳右衛門は、こつそり、たづねました。

それは、口が曲るやうに、辛い奴でした。内藏助も、十内も、忠左衛門も、惣右衛門も——その他の人等も、それを、すてきな珍味として、悦びました。

「有難うございます、實に、結構でございます」

「ア、さうですか。それでは……」

と、云つて、傳右衛門は、それから、味噌漬だと

か、糖味噌漬だとか——そんな物を、こつそり、持ッて行ッては、内蔵助等を悦ばせました。そして、他の「もてなし役」の人等も、いつか、それを知ッて、その真似をするやうになりましたから、内蔵助等は、まづい物にも、何んの不自由もしませんでした。さうして、内蔵助等は、まるで「大切なお客様」のやうにされて、五十日ほど、細川の中屋敷に暮らして居りました。隠岐守や鹽物の方に預けられた主税等も、やはり、さうでした。

二月二日、細川越中守は、奥方と、そして、世子の内記と一緒に、中屋敷に参りました。そして、内蔵助に對面しました。内蔵助は、それを「われわれを御覽下された」と云ッて、お禮を申しました。自分等は、天下の罪人だからと云ふので、わざと「お逢ひ下された」とは、云はなかつたのです。さうして二月四日、内蔵助等の切腹する日が來ました。この日、朝早く、赤穂城を受取に來た荒木十右衛



門が、久永内記と一緒に「檢使」の役人として、細川の中屋敷にヤッて來ました。内蔵助等は、麻上下を着て、檢使を迎えました。

十右衛門は、内蔵助と、かねて赤穂で「相識」になつてゐて、格別の同情がありました。で、役目をはなれて、「これは、わたしだけの考として話すことだが、實は、吉良左兵衛（上野介の子）も、今日、今度の仕方が不届だといふので、領地は召上げられ、信州の諏訪へ預になつたぞ」と、話しました。

「それは／＼。それで、思殘すことでもございませぬ。有難うございました」

と、内蔵助は、心が、カラリと、晴渡つたやうになつて、お禮を云ひました。

「ゆる／＼、仕度をしたが可いぞ」

と、云ッて、十右衛門は、一ツたん、書院の方に引上げました。

越中守綱利は、この日も、中屋敷へ、來てゐました。そして、家來を、内蔵助のところへ、よこして、「もし、お赦の御沙汰もあらうかと、それを待ッてゐたのだが、今日、切腹を仰せつけられると承はつた。さて／＼、残念なことである。心置なく、仕度をするが可い」と、云はせました。さうして、鶴の料理を出して、「訣別の酒盛」をさせました。

内蔵助等は、今は、いよ／＼、この世に思殘すことは無いのです。いづれも、快く、盃を取上げて、ふだんの通りに、笑つたり、話したりしました。そして、「もてなし役」の傳右衛門等とも、盃を遣つたり取つたりして、「今日は、格別の御馳走ではございませぬか。まだ、お茶と煙草とが出ませぬな」

と、酒を飲まない忠左衛門等は、さう云ッて、笑ひました。

「成程」と、傳右衛門は、これはと氣がついて、これも笑ひながら、すぐに、お茶を出し、煙草を出し

ました。さうして、内輪同志のやうな「酒宴」が、快活に賑に、つゞきました。

隠岐守の主税の方でも、晝頃に、かはるゝ行水を使ひました。そして、上等の料理で、酒宴が開かれました。

午後二時頃、「檢使」として、杉田五左衛門と、駒木根長三郎とが、やッて來ました。それよりも前に、隠岐守も、やッて來てゐました。その頃、堀部安兵衛や、木村岡右衛門、大高源吾、不破敷右衛門、千馬三郎兵衛といふやうな勇士たちは、主税を上座にして、まづ、いうゝと、盃を上げてゐました——その落ちついた様子は、一體、誰が腹を切るのかといふ有様でした。

そのうちに、南方の庭、築山の前に、幔幕が張られました。そして、筵の上に、盃を二枚、敷いて、その上に、淺黄の蒲團が布かれました。それが、主税等の切腹の場所でした。さうして、その蒲團は、

一人々々に、取換えられるのでした。時は、一ツぶんぐと、切腹の「刻限」に近づきました。しかし、隠岐守の屋敷では、ぐゞ／＼してゐるうちに、「もしや、御助命の沙汰」がありはしなしかと、わざと、一ツぶんぐと、時刻を、おくらせて、居りました。

四時、近くになりました。「檢使」の杉田五左衛門は、大書院の「檢使」の座につきました。今は、もう「時刻」をのばしては居られません。目付の三浦二郎左衛門が、呼出しの役を承はつて、まづ、大石主税を呼出しました。當年、十六歳になつた主税は、水色の上下、堀部不破等に會釋をして、いう然と立ちあがつて、靜に切腹の場所に進みました。そして、座につくと、「檢使」の方に向つて、一禮しました。「何んと云つても、十六の少年だ。やり損ねなければいいが……」



誰の心にも、さういふ心配がありません。で、思はず固睡をのみました。ところが、主税は、ふだんの通りに落ちついてゐました。まづ、腹切刀をのせた三寶を推戴き、上下をはらつて、肌を押ぬぎ、腹切刀を取上げると其のまゝ、逆手に持つて、ブツリと、左の腹へ……介錯人の波賀清太夫の刀が一閃。主税の首は、見事に落ちて了ひました。幕の外には、散りかけた梅の花が、ヒラ／＼、ヒラ／＼と散つてゐました。

かうして、日の暮頃には、細川の屋敷でも、水野の屋敷でも、また、毛利の屋敷でも、内藏助を始め四十六人が、残らず、順々に、腹を切つて了ひました。そして、義士等の生きてゐるうちからの望によつて、その死骸は、残らず、泉岳寺に葬られることになりました。

(を は り)

十一月の歌

三木露風

枯れた葉つばを
かきよせて
やいた煙が
立ちのぼる
土に もくもく
もぐらもち
くくつて どこへ
行つたやら



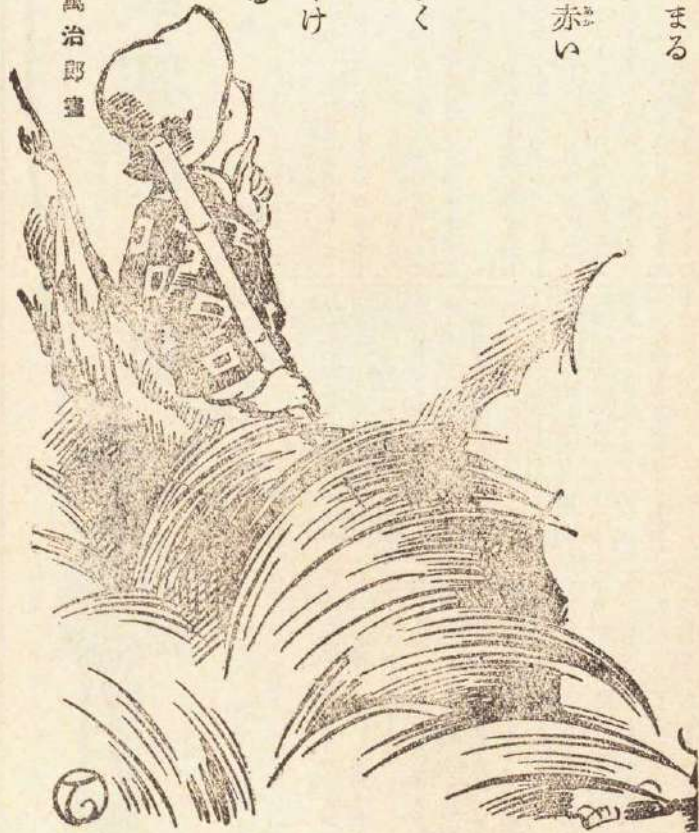
枝にからまる
蔓のさき
さがつた赤い
烏瓜



鳥がとびゆく
山の中
空はゆふやけ
日が暮れる



寺内萬治郎盛



早く戸を開けておくれ。といひました。『手をお出し。』と中から聲がしました。



山姥は幸の葉でつまんだ手を出しました。今度はつる／＼してゐるので、
『お母アさんだ、お母アさんだ。』と皆大喜びで、戸を開けました。その途端に、山姥は白い齒をむき出して飛び込んで行きました。三人の女の子は、びつくりして逃げ出しました。

月子と雪子とは家から外へ逃げました。が、一番末の花子だけはとうとう山姥に捕まって喰べられてしまひました。

月子と雪子は妻の井戸のところまで逃げて来ました。そこに高い杉の樹が一本立つてゐるので、それに駆け上らうとしました。しかし、なかく上れないので、納戸から鎌を持って来て、それで幹に引っかけ／＼登つて、木の枝にかくれてゐました。

山姥は残りの二人の小供を喰べようと思つて、探し廻りましたが井戸のところまで来て、中をのぞき込むと、お月様の光で、傍の杉の樹の枝にかくれてゐる二人の子供の顔が映りました。山姥は樹を見上げて、『お前たちはどうして上つたのだ。』と、ききました。

さうして、『油をかぶり／＼登つたよ。』といひました。山姥は喜んで家の中へ入つて油を捜して来ました。そして、数へられた通り、油を頭からかぶりかぶり上らうとしますと、注つてどうしても上れません。

山姥は、はじめて敷かれたと気がついて、いよ／＼おそろしい顔をして、『お前たちは、よくも私を欺した。本當のことをおひひ。いはなければ木を切り倒して二人とも喰べてしまふから。』と、嗚鳴りました。

雪子はびつくりして、前後の考へもなく、『鎌を引っかけ／＼登つたよ。』と、本當のことをいつてしまひました。山姥はにやりと意地の悪さうな笑ひ方をして、『さうかい、成るほどいゝ考へだ。』といつて、急いで納戸から鎌を持って来て、樹に引つかけながら登つて行きました。



樹の上の二人は、生きた心地もありません。二人は眞背になつてふるへてゐましたが、思はず天に向つて、『さうかい、成るほどいゝ考へだ。』といつて、急いで納戸から鎌を持って来て、樹に引つかけながら登つて行きました。

二人がそれに飛びつくと、忽ちうつと空高く昇つてしまひました。山姥はもう一息といふところで子供が天に昇つてしまつたので、『天の神様、どうぞ私にも領をお下げください。』と、祈りました。



すると、又もや一筋の領が天から下つて来ました。山姥は大喜びでそれに飛びつくと、領は忽ち昇りはじめました。ところが、山姥の領は本當の領ではありませんでした。腐れ

繩だから堪りません。途中でぶつたりと切れてしまつて、ザンと眞逆様に地面へ落ちました。落ちたところは蕎麥畑でした。山姥は血を出して死んでしまひました。その血が蕎麥の根を染めしました。それ以来蕎麥の根はいつも赤くなつてゐます。(をはり)

びつこになつた娘 (イギリス)

むかし、あるところに、モリイにミニイと云ふ、二人の姉妹がりました。ある夕方のこと、二人が野原で遊んでゐますと、草の中からひよつこりと、かあらしい小人が飛びだして来て、『おい、お前達に一ツ、おねがひがあるんだがね、きいてくれるか

い？』と、云ひました。二人は、顔を見合せて、にっこり笑ひました。『笑つたところを見ると、きいてくれるんだね。なアに、別に六ヶしのことぢやないんだよ。他達の仲間を、毎晩、この野原へ来て、踊りを踊るんだがね、その時、喉が渇いて堪らないんだ。だから汲まないがね、君達の家の煙突の下へ、毎晩バケツに一杯水をに入れて置いてくれたまへ。俺達は踊りが済んだら飲みに行くから。』

この頼みは、別段六ヶしいことでもありませんから、二人は、『キツト出して置いてあげる。』と、約束しました。その晩二人は、約束通り、バケツに熱い水を一杯入れて、煙突の下へ置きました。小人たちはきつと煙突の上から這入つてくる

のに違ひありません。でも翌朝になると、二人は、もうすつかりこの事を忘れてゐました。お部屋掃除をしようと思つて、バケツを取りあげると、あら、あら！バケツの底には、新しい銀貨が二枚、キラ／＼と光つてゐるのです。『あゝさうだ、お姉さん！小人が御座にくれたのよ。まアいゝわねえ！』

妹のミニイは、大喜びでしつた。もちろん、姉さんも、大へん嬉しかつたのですけれど、なかなか見えない女でしたから、嬉しいのを押しかくしてゐました。それから毎晩二人は、忘れずに水を出して置きました。あくる日になると、水はキレイに飲み干されて、その代り、ピカ／＼光る銀貨が這入つてゐました。銀貨をなにして、日に二枚づつ、銀貨を貰ふのですから、二人は忽ちお金



持ちになつてしまひました。
 『ちよつと、モリイさんやミニイさんは、いゝわねえ。とてもお金』
 『まあ、いゝわねえ！』
 『近所の娘たちは、かう云つて羨しがりました。』
 『ある晩の事、二人はどうしたわ』

けか、ついウツカリして、水を出して置くのを忘れてしまひました。そして、そのまゝ寝てしまつたのです。
 『夜中の事、妹のミニイは窓の外がガヤ／＼騒しいので、ふと眼を覺しました。』
 『なまけものめ、とう／＼水を汲んでおかなかつたな！』
 『あれほど云つて置いたのに、ひどい奴だ。』
 『こんな事がきこえます。キツト小人達が怒つてゐるのに違ひありません。』
 『ミニイは驚いて、傍に寝てゐた姉さんをゆり起しました。』
 『ちよつと、姉さん、起きてよ。大へんよ！』
 『ムニヤ、ムニヤ、ぢやないわよ。』
 『あら、ムニヤ、ぢやないわよ。大變よ！ 小人達が怒つてゐるよ。あたし達が、水を汲んでおかなかつたものだから……』
 『姉さん、早く起きて、汲んでちよつと……』
 『うるさいわねえ。水なら井戸へ行けば山あるわよ。』
 『そんな事云はないで汲んでちよつと……』
 『小人達が怒つて来たらどうするの？』
 『あんなチビなんか、おこつて来たつて、ちつとも怖くないわ。あたし、かうやつて、ギューツと、つねつてやるわ。それで駄目ならかうやつて、ギューツと……』
 『姉のモリイは、かう云つての間、又ウツ／＼と睡つて行つてしまひました。』
 『あら、姉さん、ねちやつたの？ 困つちやうわ……ぢやあ仕方がないから、あたし自分で汲んでくるわ。』
 『ミニイはかう云つて、真の井戸へ行きました。小さいミニイには少しバケツが重過ぎましたけれどでも、エツチラ、オツチラと、やつとの事で、さげて来ました。』

く起きて、汲んでちよつと……』
 『うるさいわねえ。水なら井戸へ行けば山あるわよ。』
 『そんな事云はないで汲んでちよつと……』
 『小人達が怒つて来たらどうするの？』
 『あんなチビなんか、おこつて来たつて、ちつとも怖くないわ。あたし、かうやつて、ギューツと、つねつてやるわ。それで駄目ならかうやつて、ギューツと……』
 『姉のモリイは、かう云つての間、又ウツ／＼と睡つて行つてしまひました。』
 『あら、姉さん、ねちやつたの？ 困つちやうわ……ぢやあ仕方がないから、あたし自分で汲んでくるわ。』
 『ミニイはかう云つて、真の井戸へ行きました。小さいミニイには少しバケツが重過ぎましたけれどでも、エツチラ、オツチラと、やつとの事で、さげて来ました。』

小人達は、それでキツト機嫌をなほして、がぶ／＼と水を飲んで外へ出てゆきました。併し小人達は、野原へは歸らずに、庭の隅に集まつて、何かヒソ／＼と相談をはじめました。ミニイは、何を云つてゐるかと思つて、耳をすましてゐました。
 『あの姉嬢のモリイと云ふ奴はまつたくひどい奴だ。小人なんかちつとも怖くないと云つたぜ。』
 『怖くないどころか、とつつかまへて、キューツと捻り殺すと云つたよ。』
 『あ、云ふ奴をうつつやつて置いては、皆んなのみせしめにならん。うんとひどい目に遭はしてやらうぢやないか。』
 『あいつの眼を両方とも潰してやらうか？』
 『いや、それよりも、つんばにした方が面白いだらう。』
 『あいつの鼻を、イチゴみたいに』



『赤にしてやらうか？』
 『小人達は、めい／＼、こんな事を云ひ合ひました。ミニイは、せうなる事かゝるが氣ではありませんでした。』
 『最後に、この仲間の、頭と見える、年とつた小人が過みで、』
 『いや、それはあんまり可哀さうだ。女の兄と云ふものは、顔は大事にするものだ。顔だけは、かんべんしてやらう。その代り、あいつを今後、七年の間、びつこにしてやらう。どうだ、この考へは？』
 『それは面白い！』と、もう一人の小人が云ひました。
 『そして、そのびつこを造すにはどうしたらいいんです。なにか造す方法があるんですか？』
 『造す方法は、タツタ一つある、それは、ベラマトリアム、シトラマスタリンデンと云ふ名前の草で』



その足をなでればいゝのだ。さうすれば造るのだ。』
 『と、小人の頭は云ひました。』

て、野原の方へ走つて行きました。ミニイは、大急ぎで、姉さんを起しました。
 『姉さん！ 姉さん、大へんよ。姉さんは、びつこになつちやつたわよ。』
 『うるさいわね。なんだつて今晚はそんなに騒ぐの？』
 『姉さんは、眼を三角にして怒りました。そこでミニイは、小人の云つた事を、すつかり話してきかせました。
 『姉さん、一寸歩いて見て頂戴！ あたし心配でたまらないわ。』
 『大丈夫。びつこになんかなつて堪るもんですか！』
 『姉のモリイはかう云つて、寝室から降りて歩かうとした途端、バツタリと倒れてしまひました。』
 『あつ』
 『モリイの顔色は、みる／＼變りました。どうでせう。モリイの右』

足は、左の足よりも、三寸も短くなつてゐたのです。
 『モリイは、たうとう、びつこになりました。松葉杖をたよりにして、ガタリ、ゴトリと音をたてながら、お庭のあたりを、やつと散歩するくらゐしか出来ませんでした。』
 『それ以來、モリイは生れかはつたやうな少女になりました。もう以前のやうに、快活な、はしやいだ氣持ちは、どこにも見られません。顔色もなんとなく打ち沈ん』



に取られ、王子とはなればなれになつてしまひました。王子はお城まで、一生懸命に鹿のあとを追つて行きましたが、ある小高い丘の向ふへ鹿が飛び込んだと思ふと、それきりどうしたものか、姿が見えなくなつてしまひました。いくら探がしまつてみても、足跡さへも消えてしまつてゐて、どうすることも出来ませんでした。王子は、からだ中にびつしよりと汗をかいて、思はずはつと苦しげに息をつきました。見

ると馬もべろりと舌を出して、はあ／＼とあがいてゐました。王子はすぐさま、馬から下りて手綱を手にもつたまま、一心に神懸へお祈りをしました。しかし間もなく馬は、そこへばつたりと倒れて、そのまゝ死んでしまひました。あまりのことに王子は力も抜けて、目は涙さへ浮かべながら、広い野原をとぼ／＼と歩んでまゐりました。するとやがて、目の前に一つの小山がある所に来ました。

王子は破れた身体に元氣をつけ、その小山をよぢ登りました。やつとのことで頂上についてみると、王子はあたりの意外な景色に驚かされました。そこには一本の大木が、天にもとどかんばかりそびえてゐて、枝といふ枝にはみづ／＼しく美しい葉が光つてゐました。そしてその下には青草の生えたところがあつて、泉が湧い



たり、色とりどりの花が咲き亂れたりしてゐました。王子のこの景色をみると、王子の心は俄に生き生きとしてきました。先づ泉に駆け下りて、きれいな水をおなか一杯飲むと、うつとりとあたりをみまわしました。すると驚いたことには、向ふの方に王様のかける椅子が一つおい

が現はれて來ました。はだしで、頭をくる／＼坊主にして、行者の様な着物をきてゐましたが、その歩み物ごしには、どこか位の高い人のおもかげがあつて、心のやさしい、いかに考へぶかさうな様子が見えました。その人は、王子の傍近く來ると、かう言つて聲をかきました。

「元氣な若い方、あなたはどうかしてこんな所へ來たのです。どこから來たのですか。」王子はすつかりの話をしまし

いのです。」その人はかう言つて、かぶりを取りました。しかし王子は、大層その人のことがさ／＼度かつたので無理にたのんで話をしてもらふことにしました。

「聞いて下さい。私はペビロンのジヤナニール王であります。一時は軍隊や、召使や、家族や、寶物や、私の持ちものといつては、口で言へない程、澤山ありました。神懸は私に七人の男の子を下さつて、どれもみな、あつばれた王子に育つてゐました。ところがある時、一番兄の王子が旅人からこんな話を聞いたのです。なんでも支那に近いトルキスタンといふ國に、キムスと呼ぶ王様がゐるで、その一人娘のミール姫は、外に誰一人及ぶものもない世にも美しい王女であることを聞きました。澤山の王子たちが來て是非お嫁さんにほしいといふので

すが、その度に嫁はかう言つてこゝとわろのさうです。『私は一つの謎を知つてゐる。その謎が解ける人となら誰とでも結婚して、自分の持ちものをすつかり上げる。けれど若し解けない場合はすつ首を切つて、お城の城壁にさらしてしまふ。』といふ話です。

その謎といふのは、お嫁は、赤杉をどんな目にあはしたか、といふのでした。私の息子はこの話を聞くと、まだ見たこともないその嫁がすつかり好きなつてしまつたのです。それでやるせなさうな顔をして、私の前へ來て泣きました。しか



よし、もしくれない場合は、國中を荒しまつて、王女を奪つて來てはどうか」と云つてみました。ところが息子はそれを喜びませんでした。『そんなにして領土を荒したり、宮殿をこはしたりして望みを上げ

たう息子をやることにしました。ところが、息子は誰に答へることは答へたが、本當の答は出来なかつたのです。そのため、すつ首を切られて、城壁にさらされてしまつたのです。私は四十日の間、黒い喪服を着て、悲しみつゞけました。しかし、これだけならまだよかつたのです。あとに残つた六人の息子が次から次へと、皆同じやうな望みをもつて出掛けて行つては殺されてしまつたのです。それ以來、私は悲しみのあまり、王の位を棄て、かうしてこの荒野に住んでゐます。最早、政治のことからは手をひいてしまつて、たい悲しさのため今にも消へ入るやうな思ひばかりつゞけてゐます。」この長い話を聞いてゐるうちに、ターマス王子の心はいつものまにか、未だ見たこともないそのミール姫を慕ふこゝろで一ぱいにな

つてしまひました。
 丁度この時、家来達は王子を探しあて、そのまはりには集まつて来ました。風のやうに早く走る馬も一匹用意してありました。王子はその馬に乗つて、そのまゝ自分のお城へと急ぎました。
 お城に歸へると、王子は毎日ひとりで庭のことばかり考へてゐました。顔の色は蒼白くなり次第にからだは瘦せて、まるで病人のやうになつてしまひました。
 王様をはじめ、みんなの心配は一方ではありませんでした。そしていろいろ苦心した末やつと、家来の一人が王子の心を知つたので早速お父さまのサマン王の前へいつて、



「おそれながら、王子様には、キムス王の玉女ミール姫をひどくお慕ひのやうでございます」といつて、王子から聞いたすつかりの話をして聞くと、

「大層心配なまつて、早速王子をお呼び出しになりました。『本當にお前がさう思つてゐるのなら、わしは早速手紙を使ひに持たしてやつて、王女をくれるかどうかきいてみよう。それに深山の驛りのを積んだ駝鹿の一族をおくることにしなければならぬ。それですぐ姫をくれ、結婚だもそれだといつたら、國中の軍隊を出して一度に攻めたと、その高慢な姫を奪ひ取つて来ることにしよう。それでよからう。』」

「かゝる王様はおつしやいました。王子は、そんなことをするのは正しくないことだから、自分で説をときに行くといつてきません。丁度そこに居た、王に付添つてゐる賢人も、

「これはなにか、大變な事情でございませぬ。私の思ひますには、誰れか心強い家来を五六人おつけして、王子様を向ふへおやりになる方が、よろしからうかと存じます。王子様はきつと説をお解きになつて、ミール王女をつれてお歸へりになるに違ひございませぬ。傍から口を出してすゝめまして、王様もその氣になつて、王子をやることにしました。王子は十人ばかりの家来をつれて、深山の驛院に金や、寶石や、毛織物などを、深山につんで出發しました。何十日も過ぎて、王子達はやつとキムス王の城下町につきまし

た。立派な城は小山のやうに町の邊中が築いてゐました。そしてお城の城壁には深山の首が、づらりと並んでゐました。
 しかし王子は、この氣味の悪い首などには目もくれず、城の入口へと進みました。そのあたりは實に美しく、世界中のどこを探しても、こんな立派なところは無いと思はれる程でした。廣い四つ辻の角には、紅繻子の天幕が張つてあつて、その中には寶石づくりの太鼓と、寶石づくりの棒とがおいででありました。
 王女を待つて来たものはこれを叩いた、着いた事をお城の中へ知らせすので、王子はこの太鼓をみると、すぐ馬から下りて、どどん力一杯太鼓を打ちました。間もなく、城の中から一人の役人が出て来て、丁寧におじぎをして、王子をスキム王の前へ案内しました。キムス王は王子を一目見

ると、まだ年が若く、いかにも自分の思ひつめたことに夢中になつてゐるやうに見えましたので、言葉やさしくなだめました。
 「お若い王子さん、あなたは未だ若いから夢中になつてゐるのだらうが、そんな夢のやうな望みは捨て、おしまひなさい。わしの娘は自分が美しくないので、自惚れてゐるなことをしてゐるのだ。誰にもあ



されてしまつては、つまらないではないか。』
 しかし、折角の王の忠告も、王子の心を變へることは出来ませんでした。キムス王ははしかたなく三日の間、盛大な宴會をした。王子をもてなし、そのあとでミール姫と問答することにした。で、一先づ、王子を陣屋にかへして、それからミール姫を自分の前へよんで、

「ミール姫、お前はいつまで罪な人殺しばかりしてゐるのだ。いゝ加減によしてはどうか。今日来た東の國の王子は、まことに立派で、大變なお金持ちで、お前にやるといつて、金や寶石や毛織物を出のやうに持つて來られた。お前も妙な意地ばかり張らないで、あの王子と結婚したらどうか。わしはそれが一番いゝと思ふが。』
 と言ひました。



「傍にゐた、お世様の王妃も、『さうおしなさい。これ程結構なことには無いと思ひます。』とすゝめました。が、ミール姫はたゞかう答へるのでした。
 「いゝえ、お父さま、私たとへ千年代たつても、説を解く人がないかぎり結婚はいたしません。自分でさう決めてゐるのです。解く人さへあれば、いつでも結婚いたします。』
 こんなわけで、やがて三日の日は経ちました。王子は立派な服をつけて、ミール姫の御殿に参りました。姫はすゝました。お世様の赤衫をどんな目にあはしましたか。と説を出しました。王子は大層言葉上手でした。ですから少しもまごつかず、一首の歌を詠んでそれに答へました。
 世の誰ぞ
 知るは御座たゞひとりと
 人は知らぬにと
 いふがまことぞ
 するとすぐそこへ、血みどろに染つた着物を着た首切りの男が出て來ました。そして、『今度消える星は誰ですか』といひながら、王子の腕をつかんで、氣味の悪い死刑着をきかせました。そして無慈悲にも、ずばりと王子の首を切つて、すぐそれをお城の壁にさらしてしまひました。
 このことが王子のお父様サマン

王の耳に入つたので、王様は世界中が一度に暗やみになつたやうに驚き悲しみました。四十日の間



黒い喪服を着て、泣いてばかりおりましたが、その涙のまだ乾かぬ間に今度は第二番目のカマス王子が、同じやうにミール姫を慕つて出かけて行きました。

今やサマン王には、三番目のアルマス王子がたつた一人残つてゐるだけでした。アルマス王子は二人の兄さんにもまして、賢く勇ましい立派な王子でした。ある日のこと、お父様がいつものやうに泣きながら、亡くなつた二人の王子のことを考へてゐる時、アルマス王子はその前へいつて、
「お父さま、キムス王の王女ミール姫は私の兄さんを二人とも殺してしまひました。私は仇を討ちに行きたうございます。」と言ひました。王様はびつくりして、
「これ、何を言ふのぢや。お前は天にも地にもたつた一人のわしの子ぢや。わしの命よりも大切なものぢや。それなのにお前まで死に行かうと言ふのか。」と涙を流されました。
「でもお父さま、私はあの高樓なミール姫をどうかして、へこましてお父さんの前へひれ伏させなく

つては、ゐても立つてもゐられませぬ。お願ひです、どうぞやつて下さい。」
からして、アルマス王子もたう／＼出掛けて行くことになりました。しかし王子アルマスは、誰も供をつれないで、たゞ一人で出掛けて行きました。やはり兄さん二人が行つた時と同じやうに、何日も長い旅をつゞけて、やつ



ました。又町の中央の廣い四つ辻には、紅獅子のテントが張つてあつて、寶石づくりの太鼓と棒とがちやんとおかれてありました。
アルマス王子は、それらのものをまるで胸をえぐられるやうな思ひをしながら一通り眺めました。それから町外れの田舎の方へ行つて、来る途中で知りあひになつたある老人の家を尋ねました。その老人といふのは、おかみさんがもう百二十以上にもなるのですが、まだ子供のやうに元氣で、つやつやした顔をしてゐました。
「お父さま、王子が行くと、老人夫婦は大層喜るこんで、まるで自分の息子が来たやうに、もてなしてくれました。アルマス王子は馬を納屋につないで、持つて来た荷物をそつくり二人に預けました。そして二人に自分のことは誰にも話さないで、みんな内證にしておいてくれと頼んでおきました。」

あくる日になると、アルマス王子は王子服でない粗末な着物を着て、やうやく東の空が赤らみがかつて来た時分に、町中へと行きました。謎の意味はどうしたら解るだらうか、誰か加勢して呉れるものはないだらうか、兄の仇をどんなにしてうたうか、と、そんなことばかり一生懸命考へながら、町中をぶら／＼と歩きまわりました。何にも人には聞かうともせず、ひとりでおへてばかりゐました。といふのは、聞いてみたところで、ミール姫の謎の意味を辿つてゐる者は、町中に一人もゐないことは解りきつてゐるからです。

御殿は目も麗あるばかりの美しいので、正面には驚くばかり立派な門があり、戴めしい塀がぐるりをおかこんでゐました。誰か這入つて行かうにも、門番は深山のるし、とても這入るすべはありませぬでした。アルマスは何とも言へない胸立たしい氣持になりました。が、
「まあい、是非こゝで何か見つけてやらう。」と、心をはげまして、花園御殿の周りを、隙をさがして歩きまわりました。そして



「神様、私はどうしたらよろしうございませうか、どうぞお教へ下さいませ。」と心の底からお祈りしました。祈つてゐる間に、ふとある考へが心に浮びました。それは外から引き込んである流れ川から御殿に這入りこむことでした。アルマスは人に見つかからないやうに氣をつけて、そつと流れ川に飛び込んで、うまく堀の下をくり込みました。
這入つてみると、さすがに花園御殿といはれるだけあつて、色とりどりの花が美しく咲き亂れて鳩や鶯があちらこちら飛びまわつた。きれいな水はその間を流れて、まるで繪のやうな景色でした。アルマスは、ぬれた着物が乾かまで木陰に隠れてゐて、それが乾くと花園の中をあらちこちと歩いてみました。前庭の方へ廻つてみ

ると、正面には寶石で飾つた玉坐があつて、廣場の真中には、清水をたへた鏡のやうな池が見りました。アルマスはこれだけ見ると、何んだか安心して、そして木陰に引つかへしました。そして閑丁に見つからぬやうに、そつとかくれて、一夜をそこで明かしました。
(つづく)

長前號までのあらすじ

大石主税

元禄十四年三月十四日、淺野内匠頭は、吉良上野介を傷つけた爲め、江戸の愛宕下田村右京大夫の邸で切腹をさせられました。そして、お家はたやされてしまいました。内藤助は、主税をはじめ、同志の者達とひそかに「復讐のはかり」をすゝめました。十二月十四日、討入の日がやってきました。主税は、西組の大將として、吉良の邸の裏門に向いました。そして内藤助の東組と力を合はせて、刃向ふ敵を殲らす、ヤツつけて了び、遂に、目ざす敵、上野介の首をあげました。やがて一冊は、仙石伯耆守の邸へ行つて、一應取しらべを受けました。それは、ほんの形式だけで、役人たちは皆な大そう同情してゐました。さうして四十六義士は、四家の大名に、分けて、預けられて、非常に待遇を受けることになりました。



通信

童話の選後に

齋藤 佐次郎

▽今月はい、作が澤山にありました。大層愉快に選が出来ました。
▽阿部和子さんの「月夜と人形」。川地榮一さんの「長靴を履いた異人」。青山明さんの「三太の馬鹿」。門田洋一さんの「線路」。朝比奈聖子の「初霧」。大島知恵子さんの「手紙に入れた花」。小佐篤では高木實さんの「兄弟けんくわ」等、大層いい作でした。
▽前月入選作として挙げた三篇の中、茶水七郎さんの「敵が来た」を今月號の推薦作に挙げました。今後とも、推薦作に就て、

皆さんの感想を私あてに聞かしていただきたいと思ひます。その月によつて、いゝ出来ばかりの推薦作が出るさばかりは限りませんが、成る可く優れた作を選ん、日本の童話の爲めに役立ちたい希望です。
▽例によつて少しばかり讀後感を述べて見ます。先づ最初に阿部和子さんの「月夜と人形」に感心させられた處がありました。阿部さんの作は毎月注意して拜見してありますが、これまで一度も推薦の機會がありませんでした。阿部さんの綴りから見てみますので、この人の文才が次第に成長して行くのがはつきりわかります。
▽殊に今度の「月夜と人形」はこれまでの内で一番の出来だと思ひます。お話の筋は大して珍しいものではなく、一人の若い人形師が亡き妹に似せた人形を作り、それを賣しいために遂に賣つてしまふさいふやうな筋ですが、全篇に「詩」が流れてゐるの、が此の作の特徴でした。

▽私は此の作を響る「月夜」の詩と呼んだ方が適當のやうに思ひました。月夜が持つてゐる詩、それを微妙にあらはしてゐました。
▽川地さんの「長靴を履いた異人」にも、ひきつけられる處がありました。一夫といふ少年が兄さんに連れられて活動寫眞に見つて歸り途、カッパエーへ入つて兄さんにおこつて貰つてゐると、さなりにロシア人

タルになり過ぎてゐますが、しかし成る程作者の過去の實感だと思はせる力を持つてゐます。

▽朝比奈聖子さんの「初霧」は、異用にまともな作です。少年 作らしい面白さです。

▽大島知恵子さんの「手紙に入れた花」はいつも大島さん程、振つてゐませんでしたが、高木實さんの「兄弟けんくわ」は愉快なものです。少年 作らしい面白さです。

○それで、本月はたゞ三篇を入選作として挙げます。
月夜と人形 阿部 和子
長靴を履いた異人 川地 榮一
三太の馬鹿 青山 明

(此の内から推薦作を挙げます)

編輯室より

○出来るだけ面目を一新する積りにて、表紙も岡本先生にお願ひして、童話雜誌らしい可愛らしいものを書いて頂きました。大層面白いものが出来たと思ひます。
○久米正雄先生の作が、今月は載るはずになつてゐましたが、間に合はなない爲め次月に廻りました。先生の傑作が次月號を飾ること、思ひます。
○世界童話欄にも、つと澤山にする筈でしたが、誌面の都合で思ふやうに行きませんでした。でも、今月は大分に長篇を載せる事が出来ました。(齋藤生)

頼光の四天王

源氏の一族が悪人達のざん言で誹られようとした時、相模馬入川の住人、平吉秀は、鎌倉にゐた若大将頼光を一晩はかくまひましたが、心がはりして、今は重病人の頼光を京都へ差立てようと思ひました。しかし、片瀬小次郎、藤原平、秩父十郎、土部六郎、峠の荒太郎等が途中伊豆の國府に待伏せて、頼光を無事に救ひ出し、箱根の足柄谷の觀音寺に連れしました。住持の松雲禪師や近臣等のあつち介抱によつて、頼光の病氣は徐々に快くなりました。頼光はこの足柄山で、一人の怪力童子をいつけて家來にしました。これが酒田金時です。恰度そこへ渡邊綱三、もう源氏に對する疑ひは晴れて、源人ばらは却つて罪に行はれ、若大将頼光を以て京都守殿の役につかせる。……といふ、嬉しい知らせを持つて歸つて来たのでした。

がゐて、それが非常によつたらつてゐて、自分の身の上話を聞いてくれといつて、話し出すのです。ところが、それが身の上ばかりな話で、自分の身に背かつてゐたあはれな犬の話をするのです。

▽二三日過ぎてそのロシア人に町中を行あふと、ロシア人はさびさうにラジヤなかついで歩いてゐた。かういつた筋の話ですが、その中でも、ロシア人を書いたあたりが非常に上手でした。異國にさすらつてゐる淋しいロシア人の面影を察することも出来ましたし、又感情家の彼が自分の身の上を話すといひながら自分の身の上話を話す前に、自分の家に飼つてゐて盗まれてしまった可哀相な犬の話をして、しみじみと歎くあたり、此の作の最も優れた個所でした。

▽青山明さんの「三太の馬鹿」も、いゝとこゝろがあります。かういふ話の対話はするぶん澤山にありますが、馬鹿さ利口を對照させ馬鹿が案外普通人以上の不思議な力を持つてゐて、いはゆる利口な人間の方が却つて馬鹿に劣つてゐる。……といふやうな構想は童話にはよくあるものですが、この「三太の馬鹿」の場合、ありふれた行き方をしないで、最後になまじいな「介」を「三太」がなぐるあたり面白い場面でした。
▽門田洋一さんの「線路」は、作者が最後にこゝによつてなられ方廻り少しセンサメン

童心句と俳句の
境界論

瀧田 研二

俳句とは如何。この問題を發生の時代から論ずること、紙面の都合上さしつかへるが、俳句と稱せられるものの型式とか、意義とか、特徴とかいふものを述べると、
1 連歌より發生し
2 用語制限あり
3 自然を主とす
4 季節を考へてゐる
5 飄逸を尙ぶ
等が當然あげられねばなるまい。然しこんなアトモスフィアの中にある俳句を凝視する時、どうしても取り去ることの出来ない生命を發見することが出来る。
それは俳句が「自然」を主としてゐること、その結果として「季節」を重んじてゐるといふ二點である。この點を度外置いた俳句はあまいと思ふ。二三の例をあげると、
鳥羽殿へ五六躰いそぐ野分かな

五月雨をあつめて早し最上川
石工のみ冷したる汚水かな
これ等は「野分」により「五月雨」により、或は「清水」といふ概念から、季節を明示してゐる。所謂新しい傾向をもつた俳句と稱せられてゐるものの中に、季節も自然も考へてゐないものがある。それは正しい意味の俳句ではない。
私のいふ俳句の、五大特徴といふ見地から童心句を眺めると、明かにその差異を發見することが出来る。發生のことも用語の制限されてゐる點より、或は自然とか季節云々の點よりみても、我が童心句は明白に俳句と異なるものであることを、確然と發見することが出来る。
童心句は「童心」を濃縮したところの、非常に短小な型式をもつ「土」に出發した作品で、素朴な子供の藝術である。俳句の如く用語とか字數に制限なく自由な點に立つたものである。そして飽迄も素朴なものでなければならぬ。其處に俳句と童心句の差異を見出すのである。
私達は、ものを見ても、ものによつてもものをきいても、ものを考へても、總べての生活は、純真な童心所有者の生活であつ

て、初めて童心句の作者たることを得ると思ふ。どこまでも型こそが用語さか支配されないので、自由なそとして敏感な境地に生きてこそ、眞實な意味に於ての作者であると思ふ。諸兄の御意見を乞ふ。
(東京市外中野二八七 上飯坂方)

インノウセンズ禮讃

高岡 千尋

所謂無邪氣である。
秋の天空の様に高く高く澄み渡つた心である。夜明けの庭に、おほらかに純白に咲き誇つた紫陽花の花の様なまん圓い心である。
天真爛漫の四字に盡きるこの白紙の様な心を私は禮讃して熄まない。
生きるといふ儘みに染まぬ兒童の持つ心が、その様に無垢であり天真である事は自然である。偽、猜疑、貪欲、さうした醜いものから離れた人間の自然なそして天真な心程貴いものはない。そして、その様な母體から生れ出た詩こそ、歌こそ、眞の意味での童謡と稱せられるものであらう。童謡の本質的價値もこの境を出ない事は愚論を俟つまい。
この様な分り過ぎる位明白な理論を今更くどくどく説明する事はあまりにも幼稚

である。只、大人が、あらゆる生活の苦惱を替へつ、生活の汚水に濁つた心をもつた大人が、言ひ換へれば天真といふ心を失つた大人が、そうした兒童の世界に立ち入るといふ事は、嚴格な立場から言へば矛盾した話である。
さば言へば決して大人が童謡を作ることを許すものではない。寧ろ大いに賛同して居るのである。要は、この大人その人が、どの程度迄、天真な童心に立ち返れるかと云ふ事である。吾人はあらゆる生活の苦惱から離れて、片時でもさうした天真な童心に立ち歸れるといふ事は、どんなに奥床しい事であるか知れない。
人生あらゆる苦惱の彼方に、練したたるばかりのオアシスがある。それは無邪氣の島である。インノウセンスの島である。
朝あけの紫陽花のそのの様に、いとも、け高く、そして天真爛漫なるインノウセンスの世界である。吾人は只このインノウセンスのオアシスに足踏む事によつてのみ、寸時でも慰められ、救はれるのである。(東京青山南町七丁目二番地六號 伊勢崎方)

鑑賞といふこと

英城縣結城 増田 實

童謡教育は、或特殊な才能を啓發するた

めに兒童を教育することではなくて、誰もが一緒にうたひ楽しみながら、萬人共通の童心性を喚起せしめること——これが兩情先生の童謡教育の意義であります。しかしその童謡教育と一言にして言ふ中にも、次の様な種々の部面があることを思ひます。
即ち、
親しませる
論はせる
等、
親しませるといふのは、兩情先生の童謡教育論の根柢とも思はれるもので、即ち「誰もが一緒にうたひ楽しみながら、萬人共通の童心性を喚起する」に至らしめる素質を作る。大きくいへば「藝術を理解する力」を作つてやるといふことです。小學教育は國民教育である。普通教育である。義務教育であるといふことから、私達は實際教育者であるといふことから、餘程深遠に考察せねばならぬ問題だと思ひます。その考察をゆるやかにし、又誤つて考へるときは、大きな罪惡を作るといつても過言ではないと思ひます。
論はせるといふこと、又、作らせるといふことは、更に多くの考ふべき問題を持つてゐるが、私は今こゝに「親しませる」といふ一つに關して申したいと思ひます。「親しませる」といふ意義は大體前述の通りですが、これを一つ言葉に換へれば、

鑑賞力を養ふといふことです。
世に鑑賞々々ことやかましくいはれながら、一方皮肉にも○青年の趣味の惰落などと唱へられることは何を意味してゐるのでせう。もつとよく彼等を導くには、彼等の趣味を向上させてやることです。そして藝術はその上位に位置するものであることを信じてゐる。爲政者が、國民一般の趣味を向上させることに眼を向けられることを、私達は切に望んで止まないものであります。これは大きく見たもので、小さく小学校教育といふものだけに見ても、あましまし以上の様な考へ方をすることが決して誤りでないことを信じます。
さて鑑賞をするとして、私達は二無二無と與へてよいものかどうかは、今更言を費すは愚の至りだと思ひます。私の申さうと思ふのは、兒童の年齢を考慮して、彼等のそのまゝの心性にびつたりとあつたものを與へたいといふ事です。低學年にはそれに適したものを、高學年にはその心理に合致したものを。
例へば空想時だつた兒童も、學年の進むにつれてだん／＼と現實的になつてきます。さうしたとき遂に夢幻的な童謡を放つたてどうして私達は眞の教育ができたか。どうして「鑑賞」といふことを考へるにつけて、思ひ出されるのは、野口先生の、先生御自身の童謡に對する鑑賞の實際的指針を、ある書(書名は忘れた)に於て示して下さつたことでありませう。

新しく出た本

○アメリカ童話集

金園社の世界童話叢書も、これといふと十冊になつたわけである。...

○モントクリスト伯爵

ガエーラの傑作「モントクリスト伯爵」は、曾って「岩窟王」...

童話掲載外佳作

- 新倉しげる(神奈川) 川崎 松夢(大分) 遠見子鳩(埼玉) 市川 四郎(不明)...

童話掲載外佳作

- 原田小太郎(神奈川) 無名 生(千葉) 鳥木 夫二(愛知) 松江 元夫(長崎)...

『金の星』誌友募集

『金の星』の誌友を募集いたします。誌友にはいろいろの特典や便宜があり...

金の星社

出版目録を

お送りいたします

出版目録御入用の方は、ハガキで本社宛お申込み下さい。早速お送り申し上げます。...

- 造峰 曉星(茨城) 宇治屋健一(宮山) 湯本喜一郎(不明) 高橋重右衛門(不明)...

新誌友名簿

- 篠田 文枝(愛知) 藤井治二郎(東京) 北野 朝子(京都) 大内 憲(新潟)...

○繪入世界童話集(印成の巻)

金の星自慢の本である。巻判三百頁、厚さ約一寸五分に天金を施し、原色版表紙を...

○漂流二百三十日

カザロンと云ふ人が大西洋の真中で難船して、乗組員一同さなな小艇に乗り移った。...



読者だよ

齋藤先生「飯が来た」を入選さして下さりまして、有り難うございませぬ。僕ばうれしくてたまりません。...

お伽話にでもありそうです。うれた二匹はコハマで見世物になつたので事です。僕は今、カマクラに居ます。...

初めてです。雑誌は春から読んでおめすが金の星の童話集も益々振つて来ました。...

たいのですが、仲々材料が集らないのでござります。それで皆さんへお願ひがあるのです。...

今後とも何分よろしく、書き方はこれに結んで下さるべく、ひらがなを使つて下さい。...

本社移轉おしらせ

金の星社は、かねて社屋修理中でありましたが、今般全部完成しましたので、十月二十四日より左記へ移轉致しました。...

金の星社

東京市外田端三五一番地 振替口座東京 五九五九六番

ふ存分に童話に對する智識欲を満足させて行く積りであります。給仕君、御祝儀は今愛嬌に届けさせたらから諸先方への取なれ方、宜しく頼むよ。...

れましたが、おかしな事にその金の船が書店頭に本誌と併はさまつて並んでゐましたが、僕にはさういふり解りません。...

お伽話にでもありそうです。うれた二匹はコハマで見世物になつたので事です。僕は今、カマクラに居ます。...

たいのですが、仲々材料が集らないのでござります。それで皆さんへお願ひがあるのです。...



金の星社 十一月號

出版だより

出版部より

○今月には本社出版部は大活動ないたしてをります。先づマローの著作「家なき娘」を毎月發行になつてなる「金の星家庭文庫」の第三巻を發行いたしました。續いて三島霧川先生の「影義隊と白虎隊」繪入世界童話集(印度の巻)、「漂流二百三十日」の四種を發行いたしました。

○尙、十一月には有名なスチアソンの「寶島探險物語」(金の星家庭文庫)の第四巻、及「少年天才物語」を發行の豫定であります。○佛國マローの世界的傑作「家なき娘」は四百頁に近い大冊であります。それが一冊廿錢といふ定價で發賣したので非常な評判でした。しかも譯述者は三井信衛先生でありまして、非常に樂々こ面

白く讀む事が出来るので、少しも讀譯らしい厭味がなく、日本の物語りと同様な親しみを持って、主人公マローの運命に泣き、又喜ぶことが出来るのであります。此の本の名聲だけを聞いてまだ讀まない方がありましたら、是非御一讀をおすすめします。

○金の星家庭文庫はますます評判をとりました。あの立派な本と、世界の傑作を集めてゐるのと此の評判をとつた譯でありませうが少年少女書出版界に於ける一つの評判となつたのは有難いことです。第三巻には、「四遊記」ドン・キホーテ、「ガリム童話」の三大名篇を集めてあります。

○三島霧川先生の「影義隊と白虎隊」は苦心の作だけに、三島先生の善心の作だけに、手に汗をにぎつて最初から終りまで一度に讀んで了ふやうな力のもつたも

金の星社編

◆金の星家庭文庫(4)

(定價金銀紙、送料十錢)

のです。羽島古山先生の装幀と挿畫とは、申分ない出来です。○繪入世界童話集(印度の巻)はスマラックよく出来ました。この出版には随分長い日数がかかりましたが、しかし、出来上つて見ると、全くいゝ本が出来たと喜んでゐるやうなわけです。續いて「ロミアの巻」が出来るとなつてゐますが、きつと大評判となる事と思ひます。

○久米鏡一先生の「漂流二百三十日」は、非常に早く出来上つて今月の出版に間に合ふことが出来ました。『金の星』に連載されたことがありますが、御承知の方も多いと思ひますが、今度本になるにつれて、御澤山に書き加へ、原書に出てゐる挿畫四十位程をそのまゝ、版にして掲載することが出来たので、スマラック面白い本になりました。讀みお話しと相まつて非常に興味の深いものになりました。『十五年漂流記』と共に是非讀むべき本であります。原著者マロー、ベルスは、多くの冒険小説を書きましたが、その中でも、『十五年漂流記』がこの「漂流二百三十日」が最も優れてゐます。

かし竹取物語は童話でなく小説であるといはれてゐる。取は小説と童話との境界を知らないが、金の星社の世界少年少女名著大系中の竹取物語は、立派な童話の體系を所有してゐる。私は童話の讀んでゐた竹取物語をかりて讀んでみて、その断定したのである。弟はその後、この本を小學校の兒童文庫へ寄附した。

あの不思議な程美しいかぐや姫を取りまく皇子やおくげ様方が、智慧をこぼつてのお仕事の面白さ。ほんとはよく、ほんとに美しくほんとは面白くかいてある。あの四六判の美しい本をひらいて、この頃の静かな夜を一夜讀んでごらん。そこには何ともいへない詩境と、豊かな喜悅とが生まれてくることを、筆者は斷言する。敢て諸君に之の本を進める所以である。

『私の讀後感』

飯田 彦馬

金の星の出版圖書はますますよくなりなりました。私は今まで金の星の本を、十五六冊も買つてゐて一度も御禮も言はずにすみませんで

◆漂流二百三十日

(定價金銀紙拾錢、送料十錢)

佛國マロー、ベルス原作
久米鏡一先生 譯述
僕に乗つた人々が、暴風と飢饉とに闘ひながら、大西洋の只中を二百三十日の間漂つた血と涙の漂流譚です。険と云ふものがどんなに人々の心を荒だたせるか、人々は遂に自製の心を失つて、互ひに相手を殺して、その血を吸り肉を喰ふと云ふ残酷道そのまゝの光景が現出しました。原作者ベルスは、もとゝ海洋を愛する心が深かつたのですが、又、非常に空想力に富んでゐて、人々の意思に出るやうな新奇なる事件を、さながら我々の眼前に見るかのやうに、まさしくと現して見せました。好奇心に富む少年少女の心を満すべき好箇の讀物であります。

◆寶島探險物語

(定價九拾錢、送料十錢)

スチアソン原作
入木鏡一郎 譯述
文豪スチアソンが子供を喜ばす爲に書いた「トレソニア・アイ

ランド」の譯述です。寶島の財寶七十萬兩を奪はんとがために、海賊達に向ふべく、手に汗を握るやうな幾多の冒険が展開されます。

主人公はサムと云ふ少年です。これが身籠の小さいくせに、眞玉が大きくて、驚くべいた海賊達にもビクとさせ、大活躍を演じました。活動を見るよりどれだけ面白いかわれませぬ。

流石文豪の作だけあつて、所謂冒険小説の興味が少しもなく、豊かな藝術味を感じることが出来ます。勢威は寺田良作翁伯が得意なる内容に一段と光輝を添へました。

『竹取物語』(讀後感)

浦田 研一

日本文學中で世界に誇るに足るものは、源氏物語であるといふことを聞いてゐるが、文學といふ廣い範圍から見て「童話」といふ見地から眺めて、日本の童話に世界に紹介するにあつて、最も立派なものは何であらう。それは「竹取物語」でなければならぬ。し

した。今までに買った本の讀後感を云ひます。

『オデッセイ物語』は面白いので一日で讀んでしまひました。なんと美しい本でせう。でも表紙の人物に足が有りますね。

『ギリシヤ英雄物語』此の本を讀んだのは二度目ですが、いつ讀んでも面白く思ひます。どうか、キングスレー作「水の赤坊」も出して下さい。

『ドンキホーテ』終までオナカをかいて讀みました。「神様! 讀みました。惜む可き書物によつて、徳々がされて居つた私の心は今漸やく淨められました。かゝる書物の害が初めてわかりました。死の手は刻一刻と私の上に近づきつゝあります。しかし私は不面目なる元の氣狂の儘で死ぬではありません!」かくてドンキホーテは、善良な勇氣ある一人の老紳士として靜かに死んで逝きました。

系大著名女少年少界世 星編の金社

錢十金料送・錢十九金冊各價定・本美頗入箱判六四

| | | | | | | | |
|---------------|-----------|-----------|------------------|-------------|---------|---------|----------|
| 編八第 | 編七第 | 編六第 | 編五第 | 編四第 | 編三第 | 編二第 | 編一第 |
| 神話オデッセー物語 | アラビヤン・ナイト | ロビン・フッド物語 | 大人國小人國めぐりガリバー旅行記 | ギリシヤイリアツド物語 | ドン・キホーテ | ナポレオン物語 | ロビンソン漂流記 |
| ギリシヤ神話オデッセー物語 | アラビヤン・ナイト | ロビン・フッド物語 | 大人國小人國めぐりガリバー旅行記 | ギリシヤイリアツド物語 | ドン・キホーテ | ナポレオン物語 | ロビンソン漂流記 |
| ギリシヤ神話オデッセー物語 | アラビヤン・ナイト | ロビン・フッド物語 | 大人國小人國めぐりガリバー旅行記 | ギリシヤイリアツド物語 | ドン・キホーテ | ナポレオン物語 | ロビンソン漂流記 |

集募作創賞懸

【意注】童童童 【意注】童童童

課題は何でもかまいません。諸君の日々見たり感じたり、したことや諸君のすきなものを、諸君のすきなやうに何なり、文なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまいませんが、姓名は学校や學年(または住所と年齢)とともにおとさないやうにしてください。用紙は童心句はハガキ、童話や童話はなるべく原稿用紙(または半紙)に書いてください。よく出来た方には「金の星」特製の賞品を贈上げます。次號締切は十月廿八日(その以後は次號へ題も發表は新年號、宛名は東京市外田端三百五十一番地金の星社)。

【一般讀者の創作】

童話は十五行以内、童話は二十行以内、童心句はハガキ一枚に三句以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五回、童話には一回づつ、特選の場合は童話には拾回、童話には五回づつ、賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして「入選」の場合は「金の星」賞を呈します。締切、發表、宛名は少年少女の創作と同じです。買稿こまみず住所氏名を記して下さい。原稿はお返ししません。

定價壹冊金四拾錢 送料壹錢五厘
 三ヶ月分三冊(送料共)壹圓貳拾錢
 半年分六冊(送料共)貳圓四拾錢
 一年分十二冊(送料共)四圓八拾錢
 但し新年號は特別號で五十錢増すから、御注文の際は分だけ必ず加へてお拂込み下さい。

振替口座東京五九五六番

【意注の送】

- ▽御注文は必ず前金で御拂込み下さい
- ▽送金は振替が一番便利で御座います
- ▽切手代用は(壹錢切手)一割増しです
- ▽第何巻第何號よりと書いてください
- ▽住所姓名はつきり書いてください

廣告料は御照會次第お答へ致します

昭和二年十月九日印刷納本(毎月二回)
 昭和二年十一月一日發行(一日發行)

編輯兼發行人 齋藤 謙 保
 印刷所 三賞印刷合資會社
 東京市外田端三百五十一番地
 電話小石川五三三七番

夜が明けた
 ライオンはみがき
 使ひませう
 日が暮れた
 ライオンはみがき
 使ひませう
 あたしの歯は
 美しくなる
 美しくなる

ライオン歯磨

ねりせい
 煉製チューブ入

